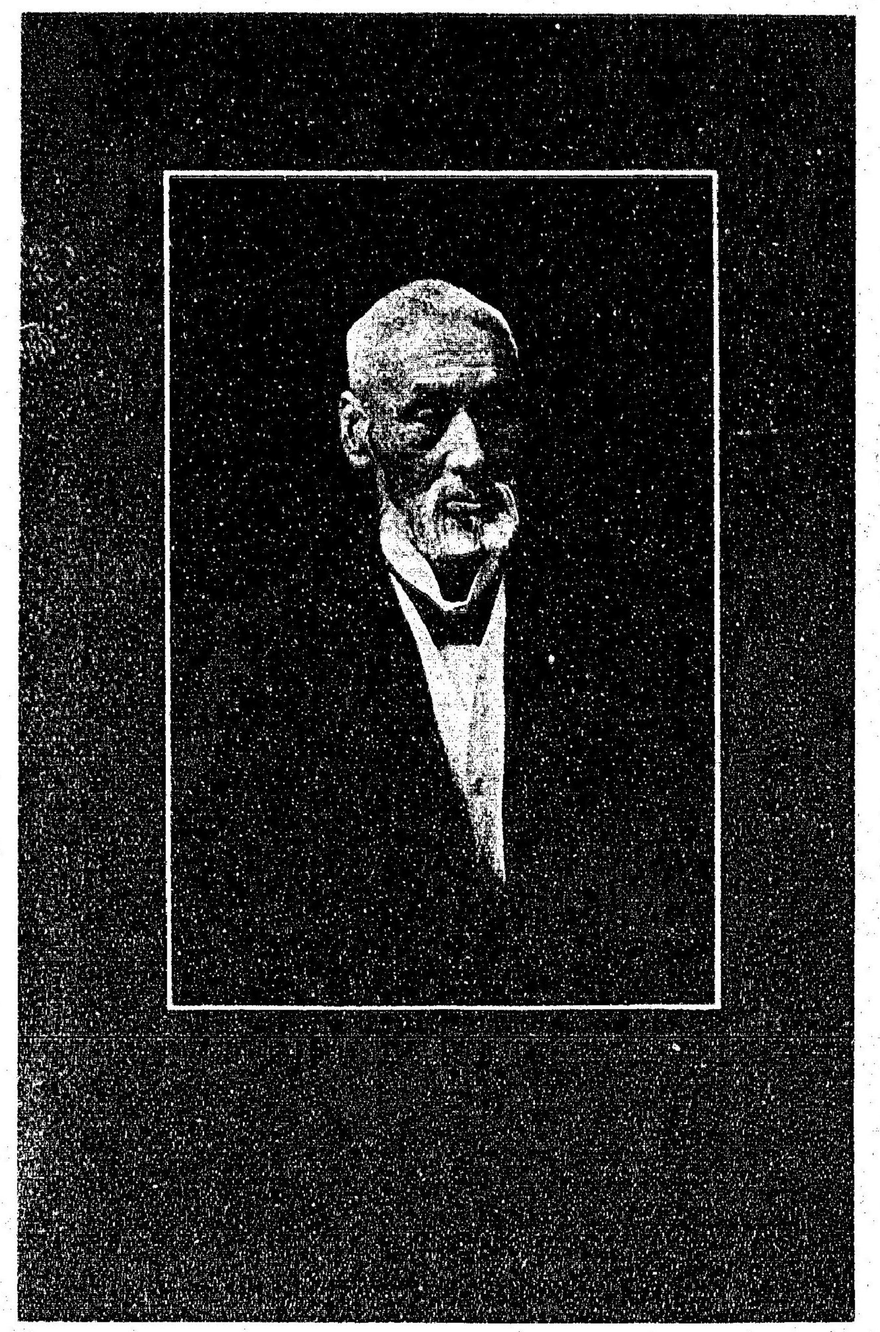
文學博士
法學博士 加藤弘之 著

學說乞丐伐

東京 弘道館發行

明治
44.1.2



小序

僕が約三十年前に始めて進化主義を信じた以來講論演說等に依て所見を發表したものは恐らく百數十回以上にもなつたであらうと思うのであるが其中にて先づ見るに足るであらうと認めた分を拔て明治三十三年に一書に編纂し「加藤弘之講演全集」と題して丸善書店にて出版發行した然るに猶其後の分は未だ編纂に暇なくして其儘になつて居たのであつたが今度弘道館主の勸めに依り編纂し「學說乞丐袋」と題して刊行することとした。

乞丐袋と題したほどのものであるから、うまいものも、まづいものも何でも角でも一切合切詰め込んだのであれば讀者諸氏の中には口に合ふものも合はぬものもあらうし或は中に

は嘔吐を催されるようなものもある乎もしらぬけれども、そこが卽ち乞丐袋といふ所以であるから仕樣はないのである。前述の如く余は約三十年來進化主義で一貫して居るのであるけれども併し年數を經るに隨ひ多少所說を異にした點もないではないが但し大主義に於ては決して變化した所はないと自ら信じて居るのである。

右講論演說は何れも種々の雜誌等に既に揭載したもののみであるから今般の編纂に就ては、それぞれ當該雜誌の持主に轉載を請求し其許諾を得たのである一寸此事を一言しておく。

明治四十四年十月　七十六翁　加藤弘之

學說乞丐袋

目次

第一　表裏反對の間違ひづくし……一
第二　生存と其需要……八
第三　宇內統一國成否の一大問題……一四
第四　利己的功利道德……二三
第五　Das Sollen ist Sinnlos……二九
第六　井上博士の「倫理と宗敎」を讀む……五〇
第七　算盤的倫理……八〇
第八　倫理上の、大疑點……八七
第九　一元的倫理……一三三

第十　所謂黄人禍……一六二
第十一　眞善美を論じて倫理學上の迷見に及ぶ……一七九
第十二　吾が立憲的族父統治の政體……一九四
第十三　進化學的人生觀……二二
第十四　無我愛卽有我愛……二三五
第十五　國字改良の困難に就て……二三九
第十六　教育も亦廉價に買はざるべからず……二四五
第十七　人格修養……二五三
第十八　小說と教育……二六五
第十九　拙者「自然界の予盾と進化の」批評に對する批評……二七二
第二十　有賀博士の「日本國民の精神上の疑問」を讀む……二八八
第廿一　精神的及び社會的進化……三〇五
第廿二　實業と倫理……三一九
第廿三　基督教に關する二大問題に就て……三二六
第廿四　倫理上實際の三問題……三三七
第廿五　學問の新風潮を知れ……三四四
第廿六　赤穗義士に就いて……三五七
第廿七　自然之謂性成性之謂道……三六九
第廿八　道德上の三淘汰……三八六
第廿九　進化學より見たる哲學……四〇二
第三十　過去七十年の追懷……四三五
第卅一　國運の進歩に伴ふ文學の發達……四五三

第卅二　源頼朝公と德川慶喜公……四六一
第卅三　現在小學教育の非難に就いて……四七八
第卅四　佛教現在及び將來に就いて……四八一
第卅五　我が國體を如何せん……四八九
第卅六　帝國學士院長退任祝賀會に於ける演說……五〇一
第卅七　五參議民選議員設立の建議に對する意見……五一六

目次終り

學說乞丐袋

文學博士
法學博士　男爵　加藤弘之　著

第一　表裏反對の間違ひづくし

古代の人の思想と近代の人の思想とは固より變はり居ることにて、古代の間違ひは近代に至りて分りたること數限りなし。之を一々擧げて言ふことは困難にして亦其必要もなし。唯其中にて今日言はんとする所は、表裏反對の間違ひ、例へば昔の白しと思ひしこと、今は黑く、又昔は圓形と思ひしもの、今は方形なりと知れたること等、極く表裏反對に間違ひたることを數へ立てて見たるまでにて、其中には小學校にて敎ふる樣なる分り切つたることもあれども、先づ順を逐うて之を說けば、

第一　天地の說　昔は天圓地方の說あり、其起りは唯天を望めば半圓の形を見、地は之に對して方形ならんとの漠然たることならん。今に至りては天圓の說は空な

るものにて、天には別に形なければ圓とも方とも言ひ難し、地の方の說は今日は全く地圓の說と變はりたり。次に昔は天は動きて地は靜なりとの說、支那にも西洋にも行はれたり。此れ所謂天とは天體卽ち日月星辰を指したることならん。然るに近來は是亦表裏反對となりて、天體には種々の種類ありて、恒星は動かざれども、惑星と云ひ、衞星と云ふものは動く故に、天體は悉く動くものとは言ひ難く、又地は惑星の一でありて常に太陽の周圍を廻轉し、及び地軸を中心として自轉するを以て、昔の地靜の說の間違ひたることも明かとなりたり。

第二　人間は萬物の靈　元來人は他の動植物より優りたるものと思ひしに、近來の學理によりて考ふれば、人は萬物の靈に非ず、卽ち下等動物より追々と進化して遂に萬物の靈とは爲りたれども、本來萬物の靈たりしに非ることを發見したり。

第三　天地好生の說　支那等にて、總て天地の理は生を好んで死を惡むと云ふと近來まで空に行はれたる說なれども、今に於て此說は間違にて、却つて天地好死の德と云ふも可なることを發見したり。蓋し天地間の生物、上は人間より下は微菌の類に至るまで其數限りあるべからず。空氣中にさへも無數の微菌ありて其中の何億分の一若くは何兆分の一のみが能く生長するを得て、其他は皆生長を得ずして

て死滅するなり。何となれば之を養ふべき營養物に乏しければなり。蓋し微菌の如きものの中にも、其營養の爲め生存競爭起りて、强者は勝を得て能く生存し弱者は敗を取りて死滅することを免れず。其一例を擧ぐれば千倍或は二千倍の顯微鏡を以て漸く見ることを得べき微菌なるものは、雌雄ありて子を生ずるに非ず、其身體分裂して增殖するものなれば、一時間に一度分裂して二つとなるものとせば、其二つのものが又分裂して二時間に四つと爲り、三時間に八つと爲る。此割にて計算すれば七十二時間卽ち三晝夜にて十七京と云ふ大數とはなるなり。圖にて之を示せば、

1,700,000,000,000,000,000,000

尙ほ之より百二十時間卽ち五日を經れば、世界の五大洋中に充滿する程の數に至るなり。但し理は正に然るべきも今まで、無數の年所を經て微菌の左程に殖えたることを見ざる所以は、前に云ふ生存競爭に依て淘汰され、大多數が死滅するを以てなり。是れ唯微菌に限るにあらず、凡ての生物が大多數は死滅するなり。彼の鼠の如き僅々の月數間に廣き天井にも充滿する程の子を生むものゆゑ鼠算といふ言葉あり。然れども實際左程に增加せぬのは全く生存競爭、自然淘汰あるが爲めのみ。果

して天地好生と云ふを得べきか、假令一旦生まるゝも其大部分が死滅し、極めて僅々のもののみ能く生存するとせば、却つて天地好死の德と謂はざるべからざるにあらずや。

第四　重力と引力　昔は物に重力あるものと考へたり。然るに近來物理の開明に由りて物に重力はなく、地球の中心に引力なるものありて物を引くがために重力なるものを生ずることを發見せり。蓋し實質の多少に依つて引かるゝことにも亦強弱あればなり。

第五　寒熱　昔は寒熱とて夏は熱を增し冬は寒を加ふるものと思ひたり。然るに是亦物理の研究に因れば、熱なるものはあれども寒なるものは絕えてなく、唯熱の少きもの卽ち寒なることを發見せり。卽ち昔は冬時にありては寒が身體を侵すものなりと思ひたるに、今は冬時にありて空氣に熱の少きを以て身體の熱を引かるが故に寒を覺え、又夏時にありては空氣の熱が身體を襲ふがために熱を感ずることを知るに至れり。

第六　物色　昔は物に色あるものと思ひたるに、是れ又物理の開明に由り全く太陽の光線の中に七色ありて、其中の或る色を吸收すると反射するとに因つて物に色を生ずるの理を知るに至れり。故に昔と今とは其主客を轉倒せるなり。

以上は物理學上の道理にて誰も異論なきことなれども、以下の諸問題は哲學的のことなれば多少反對の說はあれども、自然反對說も減少するの傾きあり、

第七　人權　人間生れながらにして人間たる權利を有するものとの考は、太古よりも却て中古より近世に移る時盛に行はれたる說にて、歐羅巴にて喧しく人權を主張したるは實に此說に因りたる者なり。卽ち人間皆生れながらにして平等の權利を有するを以て、上下貴賤の別を立てず、平等に取扱はざるべからずとの說にて、之に基いて歐洲一體の開化を促し、其結果は一時良好なりしと雖も、抑も此說たるや全く謬妄なれば取るに足らず。權利は素と强弱の差ある權力より起るものにして、人間の中には知識の優劣あり、又身體の强弱あるがために、是に於て生存競爭なるものの起りて、優强は勝ち劣弱は敗る而して其權力の大小より權利の大小を生ず。弱者は大なる權利を得ること能はずして强者に壓倒せらるゝなり。之れ蓋し表裏反對の間違ひなり。換言すれば、吾人に本來權利のありといふ說と、權利は唯權力より生じたりと云ふ表裏の間違ひなり。佛蘭西のルーソーの如きは最も激烈なる人權說を立て、人間は本來同じものにて權利に違ひなし、此同じ權利を以て社會を織

組したるものなるに、今日の有樣は全く之に反し、天理に背きたるものなれば、人間固有の權利を回復し、尊卑に依りて其權利を異にする所の國家の組織を打破せざるべからずとの趣意より、先づ佛蘭西に革命起り、次で、他の各國にも波及し、之が爲めに國の進歩を促し、法律制度の改良をなすことを得たり。然りと雖も此事たる大に間違ひたる趣意より出でたることにて、決して人間生れながらにして同一の人權を有するの證據なく、唯空理を唱へたるに過ぎざるなり。

第八　開化の由來　人間は他の萬物と違ひ、智識あり又德義を知る故に、此人間が互に道を守りて交はるときは世の中は次第に發達進歩するものなりとは、古來通常一般の說なり。然るに古來の歷史に徵するに、之と大に相違するものあり。蓋し人各々其道を守り、親しく穩かに交際すれば其間に爭のあるべき筈なく、誠に天下泰平なれども、古今東西の歷史一として天下泰平にて治り來るものなく、各國互に相爭鬪し、平和の時少くして戰爭の間却つて長く續きたるは古より今日までの歷史上の事實なりとす。故に今日の開化の由來は人の首を屠り人の土地を取り、互に其力を專らにしたる結果にして、各國の開化皆此生存競爭の結果に依らざるはなし。故に宗敎家、道德家の最も擯斥する所のものより今日の盛大なる國家を生み出したるものと謂ふべし。要するに開化の由來は古來一般の說とは反對表裏の結果より生じたるなり。

第九　道德法律進歩の一大原因　上に陳べたる如くなるときは、文明開化の原因は甚だ忌はしきものたるが如し。而して道德法律の進歩したる原因にも種々ありと雖も、就中其一大原因とすべきは亦生存競爭に外ならず。卽ち支那には古昔聖賢の相踵いで出で、歐洲には耶蘇敎なるものありて幾分か道德を進め風敎を淳良ならしめたりと雖も、支那は歐洲各國の如く人民が其權利を以て國の政治に干涉する能はず、一體の法律とても隨分聖人の出でたる國としては不似合なる慘酷の法律も行はれ居たり。尤も聖人の出でたる當時は仁を以て國を治めたらんと雖も、其人民を今日の歐洲の人民に比すれば權利なるものもなく、唯上に在る人其權力を專らにして、下に在る者は之に從つて治めらるゝに過ぎず。故に道德法律の進歩なるもの殆どなし。幸に聖人の出でたる時は暴虐の憂はなかりしなれども、聖人の出でざるときは隨分暴政の行はれたることなり。之に反して歐羅巴にては其初め權力あるものの壓制を受けたれども、人民は之に安んぜず、其相當の權利を擴張したればこそ道德も法律も進歩したるものにして、今の歐羅巴の有樣にては上の權力

のあるもののために人民は恣に制せらるゝことなく、又政府と人民のみならず、男女の間にても支那の聖人以來の敎へにては女子は男子に大に讓らざるを得ざれども、歐洲にては然らず。固より男女の同權に就ては歐洲にても議論あり、又實際行はれ難きことなれども、去りとて女子は濫に男子に制せらるることなく、又子は父のために濫りに制せらるることなし。之を要するに歐洲の今日にては權力を以て壓倒を行ふことを得ざるなり。

故に道德法律の進歩の一大原因も亦生存競爭の結果にして、宗敎家、道德家の云ふ如く人は只管相和し相愛して交際すべしと云ふ主義のみにては、道德も法律も進まざるものと知るべし。是亦古代と今日との說に於て表裏反對せる所以なり。

附言、第七第八第九の三項の如きは更に詳細に論ぜざれば甚だ暴論なりと誤解せらるゝの恐れなきにあらず、更に他日を期して詳論すべし。讀者之を諒せよ。（卅一年二月學士會院）

第二　生存と其需要

先づ初めに生存の定義及需用の定義を述べん。蓋し世界の物は有機物、無機物の二種に分れ、無機物には生存なく、有機物體に生存あり。更に有機物は動物、植物の二種に分れ、植物は身體上の生存即ち身的生存のみにして、動物は身的生存と共に精神上の生存即ち心的生存を併有す。而して動物中人類は最上の位を占め、心的生存も充分に發達す。然れども苟も動物たる以上は最下等の動物と雖も皆各々心的生存を有せざるはなし。彼の「バチルス」の如き動植孰れの部に屬するや判明せざるが如き物に至りては之を別問題とし、其他如何なる下等の動物と雖も多少心的生存を有せざるものはなし。唯下等動物は充分に之が發達を見ることなく、上等動物即ち脊髓動物中殊に哺乳動物に至れば殆ど人類に近き知情意も充分なる發達を見るの差あるのみ。

此他人類には個人的生存と國民的生存との二あり。蓋し他の高等動物と雖も多小此二樣の生存を認めざるに非ざれども是れ唯其萠芽のみ、未だ充分の發達を見ること能はず。此國民的生存にも亦身的及心的の別あり。例へば國民は其國土を有する上に於て國民的經濟なかるべからず、又國土を守るには軍備の必要あり、是等は則ち身的生存に屬し、國民相共同して政治を爲し又は外國に對して其獨立を保つ

等、重もに其無形のものは則ち心的に屬するものとす。固より此心的生存と身的生存とは共に相離るべからざるものにして、恰も個人の身體と精神とが共に離るべからざるものの如し。

以上は生存の定義にして猶之を詳論すれば際限なきを以て、唯其梗概を示したるに過ぎず。

次に需用の定義に付ても其概略を示さんに、凡そ需要なきときは生存ある能はず、但し動物、植物の差ひにより、各其需要とする所亦差ひあれども、而かも二物が最大必要とする所のものは日光、熱、空氣、水等の如き無機物なりとす。而して植物は此等無機の物を需用するのみにして大抵足れりとすれども、動物に至つては他に植物なるものを需要とするのみならず、又己と同一類たる動物を食物とせざれば生存すること能はざるものあり。動物中肉食するものと菜食するものと、肉菜兩食のものとの三種あり。牛馬の種類は菜食のみにして、人類を初め虎狼犬猫の類は單に植物を食物とするのみならず、又己れと同一類たる動物を食物とせざれば生存すること能はざるものなり。人間にあつては宗教の種類に依つては其教徒には肉食を禁じたるものあり。卽ち佛教の如き是れなり。熱帶地方なる印度の如きは肉食を爲せば却て生存に害あれば佛教は肉食を禁ずるも決して不都合なきのみならず、却て利あることなるべし。されども寒帶地方に至れば肉食を爲さゞれば十分に身體を保全すること能はざれば、暖帶及び寒帶卽ち地球の大部分に於ては必ず肉食を必要なりとす。要するに動物は到底無機物のみにて生存すること能はざるを以て、遠同類たる植物は勿論、近同類たる動物をも食物とせざるを得ざるなり。需用にも亦身的需要の外に更に心的需要あり。殊に人類の如きは精神の大に發達したるものなれば、之れが需要も亦甚だ大ならざるべからず。卽ち宗教、學術等の如きものにして、之に依て吾人の心神を養ひ之が發達を遂ぐるものなり。且需要も亦生存と同じく個人に屬する需要と國民に屬する需要との二種あり。而して個人的生存の需要となるもの合して國民的生存の需要となるものなりとす。

前述の如く動物の身的生存の需要となるものは無機、有機の二種なれども、其需要の一部分たる食物に至りては必ず之れと同類たる動物に資らざるを得ざること なれば、動物は必ず遠近の同類を以て食物とせざるを得ぬものと云ふべし。就中肉食動物に至りては其近同類たる動物を食物とせざれば充分なる生存を爲すこと能はざるが如く、國民の需要に於ても亦同一なる道理を發見するを得べし。彼の野

蠻未開の時代に於ては各國人民互に相戰鬪すること今日よりも劇烈にして、其勝を得たる國民は敗を取れる國民を奴隷として使役すること一般の風習なりしが、此ことに依て强國の富盛開明が大に進歩したることは歴史上爭ふべからざるの事實なりとす。是れ卽ち同類を需要として充分なる國民的生存を遂げたるものと云ふべし。

加之、近今の開明國と雖、凡野蠻人民を奴隷として使役したるが爲めに大に開化を進めたるものあり。彼の亞米利加各國の奴隷の如きは亞非利加より黑人を購ひ來りて使用したるものにして、之を全廢したるより未だ四十年に滿たず。其以前南亞利加を開拓するに付て、此地は暑熱最も甚しければ歐洲より移りたるものは此熱に耐へて農業をなすこと能はず、然るに亞非利加の黑人は身體は强壯、精神は溫和にして、殊に溫熱に耐ふる人種なれば、之を使用するに如かずとの考案より、亞非利加に至り、宛かも狩獵を爲す如くして多くの黑人を捕へ來り、爾來續々黑人の輸入を計りたりしが、今日南北亞米利加の開化は全く黑人の奴隷に依つて其速成を爲したるものと云ふべし。要するに國民の充分なる生存をなすには必ず同一人類たる國民を以て其需要と爲すに非ざれば能はざる所以を知るべし。

更に余は現今世界の形勢に照して深き感覺を起したるものあり。想ふに開明國民が未開人民を壓倒するは獨り之を奴隷とするに止まらず、其權力又は詐謀を以て或は其土地を奪掠し或は其人民を征服するを常とす、是れ皆國民的生存の需要となすものなり。或說に近時獨乙國が清國膠洲灣を占領したるが如きは、獨乙國が僅々二名の獨乙宣敎師の殺害せられたるを名として爲めに膠州灣を占領し、以て支那分割の端を開きたるものなり。其他露國も亦旅順口を占領せんとし、英も威海衞を占領せんとして支那分割の實は漸く將さに開けんとす、豈寒心すべきことならずや。蓋し獨乙は今より充分に海軍を擴張せざれば英佛と競爭して亞細亞に勢力を張る能はざることなるに、獨乙中「プロシャ」を除くの外領海なきを以て海軍擴張を無用として反對する者甚だ多ければ、反對者を黜して贊成せしむるには海軍の必要なる事實を以てせざるべからず、是に於て急に膠州灣を占領して最も充分に艦隊を派遣することの必要を示したるものなりと。若し果して此說の如くならば、獨乙は自己の國威を伸張し充分なる生存を得ん爲めに支那を其需要となしたるに外ならずと云ふを得べし。今日の歐意巴各國は自國生存の需要に汲々とし、獨り支那のみならず東洋全體に其勢力を張らんとするの形勢あり。之に對して歐羅巴

各國の需要とならざらんとするには、それにも優る程の國民的生存なかるべからず、我日本國民は今日に於て其影響を防ぐに足るべき身的生存と心的生存とを充分ならしめざるべからず。啻に他國の爲めに需要とせられざるのみならず、更に進んで他國を需要とする實力を養成せざるべからず、是れ實に日本國民の責任として重且大なるものなりと信ず。

之を要するに、前述の如く動物が十分なる生存を得るに付て必ず同一類を需要とせざるべからざるの理と同く、今日國民が充分なる生存を得んが爲めにも亦他の國民を需要とせざるべからざるは實に爭ふべからざる天則にして、殊に余は今日の時勢に於て感ずる所深きを以て茲に之を一言するのみ。其詳細に至りては後日更に論究する所あらんとす。（卅一年四月學士會院）

第三　宇内統一國成否の一大問題

本題は屢々雜誌等にも掲載したることあれども、此宇内統一國の成否に付ては諸君の立論に依つて何れとも之を決することを得べし。現に我邦に於ては近來國内の政治論に熱中狂奔する者多きが故に、尙ほ之より一層大なる世界に亙りたる政治論を學理的に研究したらんには、其興味も亦尠からざる事を信じ、仍て今日は本問題に付て論究を試みんと欲す。宇内統一國とは世界の各國を一にして其上に大なる政府を置き、而して世界各國を統一すべき法律を立て政治を施し、各自の國々其下にありて多少の獨立權を有する仕組を云ふ。例へば北米合衆國又は獨逸聯邦の如きを更に大にしたるもの是れなり。從來歐洲の學者間にも此論を立つるものあり。今を距る百年前、碩學カントは此世界に戰爭の跡を絶たしめざるべからず、卽ち世の進歩するに從ひ人間として未開野蠻の時代の如く他の國を滅して自己の國を擴むるが如きことをなすは其道に非ず、各國互に相一致し、永久平和の交際を爲さゞるべからずとの趣意を說けり。斯の如き說は次第に盛んに行はれ、殊に國際法の學者及び耶蘇宗教家等熱心に此事を唱へ居れり。然れども此說たるや唯坐上の空論にして今日の現狀は之と全く正反對を示せり。但し古來實際上宇内統一國を立てんと欲したる者往々なきにあらず、彼の希臘の歷山王の如きは當時世界の範圍地球の有樣等を知らざりしも、其志たる馬蹄の至るところを悉く征服して以て

世界の大皇帝たらんと欲するに在りたり。然れども事半ばにして斃る。次に羅馬帝シーザル以後世界を征服して大皇帝たらんとして全歐洲を征服せしも、亦遂に破れたり。降つて中古に至りてはチャーレマン皇帝及び獨逸皇帝亦之を企て、尙ほ亞細亞に於ても彼の成吉思汗の如き亞細亞より歐羅巴を攻取して己れ世界の大皇帝たらんとの大望を抱けり。然れども亦直に破れたり。又彼の那破崙一世の如き同一の志を以て一時は殆んど歐洲全土を蹂躙したれども、遂に露國に於て其志を挫かれたり。我邦の豐太閤の如きも其威を朝鮮に及ぼし尙ほ支那より印度、蒙古までを征服せんとの志望ありたるが如くなれば、是亦世界征服の大志ありたりと云ふも可ならん。

此の如く實際上宇內統一國を建設せんとしたる者ありたれども、是等は唯武威を以て世界を統一せんとしたる者にして、昔日未開の時に在りては斯かる企望を起すも無理ならぬことなれども、既に今日の如く開明の時勢に方りては決して斯かる暴擧をなし遂ぐべきにあらず。然るに現今學者の唱ふる世界統一の說たるや之を概括すれば、抑々世界の人たる開化の程度に差異ありと雖も皆等しく靈長の人間にして、然かも常に戰爭を爲し又は互に爭ふが如きは實に道理に背きたるものにて、若しも互に相親睦し永く平和を保たんには人生の幸福之に過ぎたるものなかるべしとて、即ち彼の國際法の元祖たるグロチウスを始め其他の學者皆此主義を論じ居れり。加ふるに耶蘇敎に於ては熱心に此趣意を以て布敎し、是等の爲めに人間社會の開化を促したること亦尠しとせず。然れども其實際に至りては大に之に背馳するものありて、現に歐洲諸國が他洲に向つて施す所の政略は先づ自己の私慾を貪るがため凡ての弱國を併呑せんとし、其慾望日に甚しきを加ふるが如し。故に今日の形勢より見るときは戰爭を已めて各國互に相親睦せしめんとするが如きは一に座上の空談にして、到底之を實行せしむること能はざるべし。

然るに余の考ふる所は前述の如き趣意に非ずして自然的に世界各國の合同すべき必要、即ち換言すれば止むことを得ざる場合よりして、遂に世界の統一を見るの期あるならんと考ふ。其理由は今に於てこそ歐米各國互に其利益を得んことに汲々とし、隨て互に外國を壓倒せんとすれども、元來歐羅巴の諸國たる其强弱の點に於て甚しく差異あるものに非ず、加ふるに其人種及び宗敎を一にし、自ら同一の歷史を踏みたるものなれば、其風俗習慣及び開化の程度に於ても相距ること決して遠きものにあらず。故に今日に於ては一國にて自己の利益を壟斷することを許さ

ず、各國の人民互に商業、工業、宗教、學術等を交換し、又は之を共通し、國は相隔つと雖も社會上に於ける人民間の交際は世の進歩に伴ひて月に日に次第に頻繁、親密に赴けり。之れがため宗教、學術上及び工業、諸業者等に於て「インテルナショナル、コングレッス」即ち列國會議なる者ありて、何事も各國より代表者を出して合同協和の方法を講ぜざるはなし。例へば彼の尺度の如き素と歐羅巴各國各々之を異にしたりと雖も、今や各國評議の結果に由りて歐洲の各國大抵皆メートルを用ふるに至り、唯り英國のみ之に服せずして從來の「フィート」を用ゐ居れり。蓋し英國は元來保守的の國にて、利害の點よりも寧ろ國風保存の點より成るべく各國の評議に一致せざる方針を執るを以てなり。假令英の一國は加入せずとも他の諸國が相一致すれば大に便利を得ることなりと雖も、他國も亦往々其評議に反することあり。然るに多數決を以て之を決すること能はずして、一國にても之に服せざるものあれば敢て之を壓服せしむること能はず、故に未だ充分に各國相通じて便利を計る事を得ず。然れども漸次世の進歩に促されて其必要上より列國の利害益相一致するに至らば、遂に今日の亞米利加合衆國又は獨逸帝國の如く諸國を合して一大統一國となし、政治法律等總べて事の大なるものは此政府の下に行はれ、其他各國より議員を出して多數決に依りて事を決するが如き時期必ず到來すべしと思ふ。唯今より其年數を豫定する事の如きは固よりなし能はざれども、必ず數百年の後には此の如く各自些少の不便を忍び、互に一致して遠大の利益を圖るの時期あるべし。果して今日世界の強大國及日本を始め歐米相合して一の大統一國を形成するに至らば、世界の開化せる人民は眞に一國人の如きものとなり、不和等の起ることあらば中央に設けられたる大裁判所にて之を判決審理するに至るべし。而して野蠻未開の國は之と伍を同じうすること能はずして皆之に服從せざるべからざること恰も米國に於ける黑人と同一ならざるべからず。

余が論旨は前述の如くなるも、此事たる決して急速に行はるべきものに非ず。即ち世界の現狀たる古より次第に戰爭の數を減じたるも、是れ唯互に他國に侵されざらんが爲めに其兵備を嚴にし、孰れも其虛の乘ずべきものなきのみにして、各々奪略爭鬪の野心を有せざるはなし。現に露國の如き次第に鐵道を延長して南下の策を畫し、英國は亦之を妨ぐるに汲々たり。其他獨と云ひ佛と云ひ互に自國の利慾を遂うせんと欲せざるものなし。故に今日に於ては遂に各國の志望を變じて共同一致せしむること能はざれども、終には其私慾を棄てゝ各國統一の利益を計るが爲

めに世界統一國を形成する時節到來すること無しとは謂ふべからず。然れども或學者は之に反對して各國は決して自己の利益を棄つるものに非ず、故に幾百千年を經るも互に和熟して、統一を爲すの理なし。彼の米國の如きは英の暴政を防ぐが爲めに合同共和を爲したるものなり。獨逸聯邦の如きも那破崙一世の頃より佛國のために國内を蹂躙せられ大に屈辱を受けたるを以て、獨逸各邦の人民は小兒に至るまで此怨を忘れず、佛國に向つて恥辱を雪がんとの敵愾心ありたるを以て竟に聯邦を統一して一帝國を創設するに至りたるものなり。

此の如く大敵を前に控ふるときは合同一致の實を擧ぐることを得れども、世界の統一國を造るに付ては敵とすべきものなきを以て自己の利害を棄てゝ一致すること能はざるべしと。余も此説に全く反對するの理由を有せざれば、或は此説の眞確なるやを計り難しと信ず。要するに各國が其必要上より統一を爲すべき時期ありや又は各國互に利害權力の固執よりして到底一致すべからざるものたるやは頗る興味ある問題なれば、之を學者の間に於て研究するは頗る價値あることなるべし。

余は此論説を拙著「强者の權利の競爭」の獨逸文中に掲げたるに、墺地利のグラツ市大學に於て有名なる政治學及び社會學の教授プロフエッソルグムプロウイッチなる者余が説を駁して之を雜誌に掲げたり。余は從來此人の著したる書籍より頗る利益を得、大に信用したる人なれども、余が説を駁したる議論は頗る其要旨を謬れり。卽ち余の論旨は前に述ぶる如く漸次各國の間に於て其人民の利害を均しくするに至らば、必要上自然に相合致せざるべからざることを説きたるに、之に對してグムプロウイッチは、加藤の議論は理想に止まれり。實際上斯かることあるべき筈なし。若し加藤が此の書を著すの際一二年の中に日清戰爭の起るべきことを豫想したらんには此の如き理想的空論を吐くべきの理なしと。余は決して理想に非ずと信ず、又日清戰爭のみならず、其他大戰爭も屢々起ることあるべきを豫想して立論したり。卽ち余は事實より推して此説を立てたるものなれば、若しグムプロウイッチにして歷史の事實あるに拘はらず余が説の行はれざるべきことを説きたらんには、余も亦首肯する所あるべきも、前述の如く表裏矛盾の駁論なれば余は實に其價値なき事を認めたり。尤も素とグムプロウイッチの書きたる獨逸文を英文に譯したるものを見たることとなれば、飜譯の誤謬もありたらんか、但し斯くまで論點の相違せるを見れば罪を誤謬に歸すべからざるものの如し。唯日本人の議論とし

て輕蔑して輕卒に駁論を掲げたるが故、斯くも余の意を誤了せしものならん歟、兎に角甚だしき誤駁とせざるを得ず。（明治三十二年二月學士會院）

第四　利己的功利道德

從來學者の論ぜる道德は之を大別すれば直覺及功利の二派とすべし。而して功利派中又利己的と利他的との二あり。尙細則すれば種々あれども茲に詳說せず。直覺派は道德を以て人類の天性に具れりとなし、或は神が造れるものとなして、人類が直に之を覺ることを得るものなりと說く。然るに功利派は人類の利益幸福となるもの卽ち道德なりと說く、支那の道德は多くは直覺派に屬するものの如くなれども、其中功利派に屬するものも少なからず。西洋の道德說には兩派あり。然れども古說は多くは直覺派にして新說は多くは功利派なり。又功利派中、利己的功利派に於ては人類は利己心のみにて之を本として社會の利益を圖るものとなし、利他的功利派に於ては人類には利己と利他との二心あれども、道德は單に利他心より生ずるものとなす。且つ西洋の哲學者間にありては此利己心と利他心との爭ひ甚しく、支那には殆ど斯の如き爭を見ざれども、夫れに反して性善惡の爭ひ甚だし。孟子は性善を說き、荀子は性惡を說き、其他或は善惡相混ずと云ひ或は善惡無差別と說く等、其他種々の說あり。然るに性善說は其實、利他心說と同じく、性惡說は其實、利己心說と同じけれども、只其着眼の點相異るなり。抑善惡は天然に定まるとの說あるも善惡が天然に定まるものにあらずして、社會の開否文野或は其他社會の種々の性質に依つて多少異るは爭ふべからざる事實なれば、性の善惡は人類一般に通じて之を論ずるを得べからず。然るに利己、利他の二心は文野開否等其他に由つて異同あらざれば、性善惡說よりも利己利他二心說の方大に理に合せりとす。

人類は禽獸と異りて利己心の外に利他心を有せりとは古來其說多く、今日も尙ほ之を論ずる者多し。抑此說たる一應理ゐるが如くなれども今日の萬物進化說を取り、人類は本來人類にあらず下等動物より自然淘汰に依つて進み來れるものと信ずる以上は、特に人類のみに本來利他心ありとは信ずるを得ざるなり。今日吾人一個人の心身の遺傳を研究するには其父母又は祖父母等に遡りて穿鑿を要すると等しく、人類の心身の遺傳を研究するには必ず其遠祖たる動物に遡りて之を考究

せざるべからず。蓋し下等動物は單獨に生活して社會を結ばず、高等動物は稍社會をなして共存し、又人類に至りては全く社會を成して共存す。但し野蠻人民にありては其社會の結合未だ鞏固ならざるも、知識の開くるに從つて漸く鞏固となり遂に國家を成すに至る者なれば、單獨に生活する間は利己のみにして利他の必要なければども、社會を成して共存するに至りては他人の利害と雖之を看過する能はざるに至る。例へば他人の受けたる災禍と雖若し之を我に受くれば其苦痛は果して如何と考へ、親しく交る者の間に於ては他人のことも自己のことの如く強く感ずるに至る、所謂同感の情是れなり。是れ利他心を生ずる一原因なり。然れども他人の災厄を救ふは單に他人を利するに止まらず、他人をして災厄を免れしむれば同感の情よりして自己に愉快を感ず。卽ち利他行爲は他人を利するが最終の目的にあらずして、其實己れを利するに外ならざるなり。然るに之に對して非難をなすものあり、曰く君國の爲め又は父母の爲め同胞の爲めに盡す者は我身命を捨てゞ厭はざるもの少きにあらざれば、決して利己の目的を達せんとするに非ず、全く利他の爲めにすること明かなれば、吾人には利己心の外に利他心のあるは決して疑ふべからずと。此說一應理あるに似たれども決して然らず。凡そ人類は生命のみを大切とするものにあらず、生命を捨つるも心神に愉快、快樂を感ずることが人間最上利益となること往々なきにあらず。或は國家君主の危急に際しては決して之を坐視するに忍びず、身命を擲ちて之に盡すの快樂たる實に云ふべからざるものあり。されば之れ實に最上無比の利己にあらずや。少しく性質の異れる一例なれども、或は貧困に迫り若くは救ふべからざる災厄に遭ふ場合に際しては、大切なる生命をも顧みず自殺するもの少なからず。之れ卽ち大切なる生命を保ちて困苦せんよりは寧ろ生命を捨てて安心を求めんと欲するものなれば、是れ亦利己の爲めに生命を捨つるものと云ふべきなり。

凡そ單獨生存をなせる動物にありては他の爲めを圖らずして可なるも、多少社會を形成して共存する以上は自己の欲のみ逞くすべからざる理由更に存するを知らざるべからず。假令其體力强く智力優る者と雖も、唯自己の利益を圖り他人の事を顧みざる時は、忽ち他より害を受くるは明かなれば、自己が利を得るの手段として先づ他を利すること甚だ必要となるなり。假令自己の不便は暫く之を忍ぶも、他人の利を圖り若くは他人の利を圖る迄のことは爲さざるも必ず之に害を加ふることを爲さゞるにあらざれば、決して他をして自己を信用せしめ隨て自己の利益

を得ること能はざるべし。是れ前に述べたる同感的と異りて知識的利他心、或は智略的利他心と稱すべきものにして、是亦其實自己の利益たるものなり。

其他又利他心行爲を助成するものあり、卽ち宗敎道德是れなり。凡そ開けたる宗敎道德は仁義と云ひ博愛と云ひ忠孝と云ひ、其說く所各異るも一も利他行爲を勸めざるものあるなし。或は直覺的に人類は互に他人の爲めに盡すべき義務ありと說き、或は人類の義務は斯く々々にして古聖賢の敎ふる所なりと說き、之に依りて盛に利他行爲を勸むと雖、其の之をなすには必ず利己心を利用せざるものなし。例へば孔子の敎にて君に忠を盡し父母に孝を盡せよと勸むと雖、其忠孝をなすときは忠臣孝子と稱せられて無上の光榮を受くべしと說く。是れ卽ち利己心を利用して利他を勸むるものに外ならざるにあらずや。又耶蘇敎にて博愛を說き人類は互に相愛せざるべからず、是れ神の命ずる所にして神の意に適ふものなりと云ひ、並に佛敎にて慈悲を說き、慈悲を施せば佛の意に適ひ佛の加護を受くべしと云ふも、皆同一軌にして、一も利己心を利用せざるものなし。其他地獄、極樂說の如き固より無智の輩に對してのみ效能あるものなれども、皆利己心を利用して吾人の利他行爲を勸むると明かなりとす。故に所謂利他心とは其實利他心にあらずして全く利己心に外ならず、徹頭徹尾自己の愉快、利益となるものに外ならざるなり。

斯く論じ來れば、利他心は利己心が唯其形を變じたるに止まりて、決して獨立固有のものにはあらざるなり。人類が社會を成して共存する以上は必ず斯くせざるべからざる理より斯くなりしなり。下等動物は社會を成して生活を共にせざるが故に單に利己心のみにて足ると雖、人類に至りては社會共存のために利他心が必要にして且つ宗敎道德に依りて益々之を勸めたるより斯くなりしなり。

但し單に自ら利して他を害せんとする利己は固より社會に害あれども、前述の如き利己は啻に社會を害せざるのみならず實に社會を利するものなれば、最も貴むべき利己にして道德の基となるものなり。是れ卽ち利己的功利道德の大意なりとす。然るに之に反して利他的功利道德派に於ては利他にあらざれば社會を利するものにあらず。利己は唯個々己れの欲を縱にするに止まるを以て、成るべく之を抑制して利他心を伸さざるべからずとなす。故に利己的功利道德派が利己心は決して有害のものに止まらず、忠孝、仁義、博愛、慈悲の如き一も利己心より生ぜざるものなしとする主義と相反するなり。利他的功利派の主義は一見眞理の如く見ゆるも到底謬見たるに過ぎざるなり。

但斯く論ずるも、吾人が他を憫み他の幸福を祈るは意識的に自己の愉快を求めんとして爲すにはあらず、全く他の爲めにせんとする心にてなすなれども、之は古來漸次養成せられて斯くなりしものにして、其實は全く利己に出るものなることを知るべし。之を換言すれば吾人が意識的に利他とする行爲も無意識的には必ず利己なる事を知るべし。

然るに利他的功利學派或は直覺派にありては利己的功利學派を貶して、利己は絶對的惡しきものなりと云ふ。尤も世には眞に稱讃すべき君子聖人は甚だ少なく唯利己を縱にする者のみ多きも、古來貴むべき利己心より生命を抛ち國家の爲め君主の爲め若くは父母又は同胞の爲めに盡したる者少なからず。斯の如きは假令利己心に出るも、其結果たる國家を益し君父を益し社會を益するものなれば、誠に尊重すべきものなり。是に由つて觀れば利己は決して惡しきものに限るにあらざるは甚だ明かなることにあらずや。然るに唯利己心なる言葉のみを聞きて忽ち之を惡しきものと考ふるは甚淺薄なる見と云ふべし。

凡そ植物は意識なきも自ら維持伸張せんとするの力を有し、動物は上級に至るに隨つて意識的に自己を維持伸張せんとする力を有す。卽ち有機體は植物より人類に至るまで總て利己の力を有し、其階級に隨つて其力益々强大となる。而して人類に至りては遂に形を變じて利他となるに至るなり。スペンサーは利他を極めて低き所まで及ぼせば親が子を生み又之に乳を與ふる行爲をも利他とすべしと說けども、有機物が自己の種族の永存を圖るの點より視れば是亦利己と云ふこそ至當なるべけれ。要するに有機物は最下級より最上級に至るまで、單に利己の力を以て一貫するものと云ふべきなり。

但利己を斯くの如く說くときは予の臆說と言はるゝ點も少なからざるべく、余自身も或は他日其非を悟る日なしとは斷言し得ざれども、併し今日に於て余の確信する所は以上所論の如し。（明治三十二年二月學士會院）

第五　Das Sollen ist Sinnlos.

諸君、一昨明治三十二年十二月九日本會に於て『愛己愛他と Nützen（自然的不可不）und Sollen（道德的不可不）との關係』と申す題で講演したことがあつたが、今日

の講演も夫れに似たものである。僕の說は兎角非難が多いから、少しく說き方を變じて更に先會の說を主張しやうと思ふのである。

自然的不可不、道德的不可不の事に就ては諸君に對して委く論ずる必要はないが、一寸例を擧げて見れば、先會にも申した如く、自然的不可不の方は不「可」不「食」、不「可」不「學」と云ふやうな事で、此不可不には絕對的結果がある、卽ち食へば生命を保つ事が出來るが、若し食はねば餓死するより外致し方はないことで、決して免れる事の出來ぬ結果である、又學べば知識を得る事が出來るが、若し學ばねば知識なき愚物で止まるより外致し方がない譯で、是れが決して免かるべからざる結果である。凡そ吾人は寸分も此結果を免れる事は出來ぬのである。是れが卽ち自然的不可不の絕對的結果と云ふべきものである。然るに一方の道德的不可不の方は如何である乎と云ふに、是れにも結果はないではない、忠孝を盡す人は忠臣孝子として世にも稱讚せられ、隨て幸福を得る事にもなる。又不忠不孝の者は不忠不孝の臣子として世にも擯斥せられ、隨て又不幸の地位に陷るやうにもなるが、併し是れは自然的不可不に於けるが如く、眞に絕對的結果があると云ふ譯には參らぬ。卽ち忠孝を盡す者でも或は世の稱讚を受くるに至らず、又不忠不孝の者でも或は世の擯斥を受けぬやうなこともあり、忠臣孝子が落魄して居る歟と思ふと、一方には不忠不孝の者が頗る時を得て居ることも往々珍からぬことである、夫れ故此道德的不可不の結果と云ふものは殆ど、不定なものであつて、自然的不可不に於けるが如く絕對必然と云ふ譯には參らぬのである。

右樣なる譯合からして、自然的不可不の方は其效力が實に强いと云はねばならぬ。換言すれば、吾人が此不可不を務めて守らねばならぬもし守らぬやうなことがあれば忽ち害を受くるのである。然るに道德的不可不の方は其效力が頗る弱いと云はねばならぬ。換言すれば吾人が必ずしも之を守るに及ばぬやうなこともあるのみならず、場合に依ては守らぬ方が都合のよいことも隨分あるのである。然るに自然的不可不と道德的不可不とに於て、何故其の效力の强弱があるであらう乎。其理由と云ふものは本來如何な譯であるかと云ふに、自然的不可不は全く自然的必然法 (Naturnothwendiges Gesetz) 卽ち天則 (Naturgesetz) であるから、此の如く强いなれども、道德的不可不の方は決して純乎なる天則でない、唯社會生存の起るに隨ひ、自然淘汰と人爲淘汰との湊合作用で出來て且つ追々進步したもの(此のことは拙著「道德法律進化の理」第六十七八頁に論ず)であるから、自然、效力は弱いのである、此の如

き理由より吾人が自然と道德法(Sittengesetz)を守らぬやうなことに至るのであるが、併し此の如きことに立ち到る重もなる一原因は吾人の心的傾向(Geistige Neigung)が兎角社會生存の目的と背馳して致しにくい所にあるのである。

直覺學派に於ては、吾人は先天的に道德を固有して居る故、吾人には之を直覺する力があると說き、殊にカント氏の如きは、道德は吾人理性の絕對命令(Kategorischer Imperativ) なりと說て吾人は、理由の如何に拘はらず必ず之を遵守せぬばならぬ筈の者であると申して居る。然るに實際は決して左樣に參らぬのである。仍てカント氏は又吾人がもしも單に理性を有する者 (Vernunftwesen) であつて同時に肉質を有する者(Sinnliches Wesen)でなかつたならば、吾人の道德は天則同樣の效力を有するであらうなれども、兎角肉慾の爲めに動かさるゝ故道德を守らぬ樣になるのであると、個樣に逃げ道を取つて居るのであるが、併し是は甚だ可笑しい論である。吾人が若しも單に理性を有する者であつて、同時に肉質を有する者でなかつたならば吾人は全く無形物でなければならぬ、全く幽靈でなければならぬ。吾人が若し幽靈であつたらば何の爲に道德が入用であらう乎、吾人が有形活體であつて夫が集まつて社會生存を營んで居るから、始めて道德が入用になるではない乎。故に箇樣な可笑しい論旨では吾人が道德を守る守らぬと云ふ問題を解釋するには足らぬと思ふ。果して然らば、如何なる學理が此の如き問題を解釋し得るであらう乎。是に於て僕は吾人が道德を守ることの難いのは、前申した吾人の心的傾向が兎角社會生存と背馳して一致しにくい所のある故であると云ふことを說かねばならぬと思ふ。偖夫れを說くに就ては僕は愛己的道德說(Das egoistische Moralsystem)と進化主義(Die Entwickelungslehre)との助けを假らねばならんと思ふのである。仍て是れより此二個學說に依て右の解釋を試みやうと考へる。既に進化主義が主張する如く吾人は特に吾人として始めて世界に顯はれ出でたるにあらずして、下等動物より漸々徐々に生存競爭、自然淘汰によつて進化した結果、始めて吾人となつた者であると云ふことを眞理として取る以上は、吾人は遠祖たる下等動物から心身の遺傳を繼承し來たる者と確信せねばならぬ。勿論其進化に由て遺傳も亦非常に進化して來たに相違なけれ共、併し何時迄立ても其遺傳の全然消滅すると云ふとはないと認めてよからうと思ふ。而して吾人の最先遠祖たる下等動物が些少の愛他心を持つて居らずして、實に愛己的動物即ち單に無限純乎的愛己心のみを有する動物であるといふとも事實上疑ふべからざるとである。此事に就ては中島德藏君が拙著に對して駁擊

されたのを僕が反駁した論が哲學雜誌に掲載してあるから、直に其文を玆に抄出するであらう。

僕が著書に「吾人の非社會的遠祖が雌雄、牝牡相愛し、又母が初生兒を愛するとの外未だ殆ど一の必要なき愛他心を有せず」と述べたに就て、中島君は加藤は動物にも人間にも多少愛他心を存するを認めたるが如しと云ふ樣な意味に論ぜられたとであるが、僕は決して動物、人間共に本來愛他心の存するを認めぬなれど、併し僕が雌雄牝牡、相愛し、又母が初生兒を愛する所の動物を說いて、夫より以前の動物卽ち雌雄、牝牡相愛せず、又母が初生兒をさへ愛するとなき動物に迄溯つて論じて置かなんだのが僕の粗漏である。尤も僕の意では多少愛他の生じた遠祖でさへもやつと雌雄、牝牡相愛し、又母が初生兒を愛する丈のとであると云ふとを述べた考で、其以前の遠祖に至つては、無論毫末の愛他心もない者であると云ふ意味は含ませた積りであつたのである。併し後より考へれば一寸左樣には解せられぬやうであつて甚粗漏に失したとである。右樣な次第であるから今は其最先遠祖に迄溯つて論ずるであらう。左樣致せば毫末の愛他心なき動物を捕へ來て、御目にかけるとが出來やうと信ずる。初生兒を愛する動物と云ふものは最先遠祖よりは數等進化したものである、胎生動物にあつては母が多少初生兒を愛せぬものはなからうが、卵生動物になると初生兒を愛するものと愛せぬものとの二類がある。母體の溫度で孵化せる動物にあつては、母は多少初生兒を愛するとであれども、自然の溫度で孵化する動物にあつては固より母子の緣もわからぬ。又母の看護も要するものでないから、母の初生兒に對する愛抔と云ふものは少もない。又更に一層下りてヘッケル氏其他の進化學者が動物の最大始祖と認めたる、所謂モネラ(Moncra)に至つては是れは生殖するものでなくして分裂で增殖するものであるから、母が初生兒を愛する抔云ふとのあるべき筈は毫もない。僕は右の如き自然の溫度で孵化する動物から更に溯つて分裂動物まで捕へ來て見れば、愛他心の絕無なる動物が既に眼前に現はれたとと思ふ。

但し雌雄、牝牡の相愛はどうである乎、是れは頗る强い愛他心ではない乎との說も出るであらうが、此相愛は他とは餘程性質の違つたもので、全く雌雄、牝牡の情慾卽ち生殖慾と申しても宜いもの故、其實、變性的愛己心卽ち愛他心とは申し難い位のものである。夫れ故此相愛と愛他とは殆ど關係のないとであり、又決して他の愛他の根本となるものでもない、强いとは强いけれども、全く別種のものと見るがよか

らうと思ふ。加之此相愛さへも生殖動物に限るもので、其先代たる分裂動物には無論あるべき筈がないのである。

最先遠祖に愛他心の生じ難い今一つの明かな證據がある。下等動物になればなるほど增殖が多い。進化學者の說に據れば、若しも時々刻々生誕(分裂生殖共に云ふ)する者が悉皆生存し得るならば、此地球は數時間にして既に生物を以て充滿して立錐の地も無い程に至るべき筈である。然るに太初以來左樣なことがなくして今日迄參つたのは頗る不思議に思はれるが、其實決して不思議でない、其譯は地球上に時々刻々に生誕し來る生物を養ふだけの物質が不足して居るからである、生誕し來る生物は夥しいが之を養ふ物質が頗る僅々たるものであるからである。そこで其結果として生物界に烈しい生存競爭が起らねばならぬ。而して又其結果として生物中優强な者が養物を占取することになつて、劣弱なる者は少しも占取することが出來ぬのみならず、劣弱なるものが優强なるものの餌食になることも夥いことであらうから、優强なるものばかり生存することが出來て、劣弱なるものは皆死亡してしまうことになる。是が卽ち生存競爭から起る自然淘汰である。自然力は能く生物を生殖させ得るけれ共、其最大多數は能く殺してしまうのであると、進化學者は說いて居る。實に夫れに相違ないと思ふ。此生存競爭、自然淘汰の理から考へて見ても、最下等動物に愛他など云ふことの起るべき餘裕のないことは明かではない乎。

但し斯く申したならば、生存競爭自然淘汰は、決して最下等生物には限らぬ、一般生物にもある、吾々人類にもある、文明開化の人民にも中々烈いことではない乎。果して然らば最下等生物に生存競爭、自然淘汰のあると云ふ理由で愛他心の絕無を證明することは決して出來ぬではない乎、と辯駁さるゝやも知らぬが、併し生存競爭も次第に依つて違ふのである。既に多少社會らしいものを組織して居る以上の動物ならば、社會外に向つては烈しい競爭をしても、社會內では左樣に烈しい競爭は出來ぬ。若し烈しい競爭をすれば社會は一刻も保てぬ、直に滅亡してしまうことになる。故に社會內には必ず多少愛他の行はれて居ることは自然に解つて居るではない乎。併し又箇樣な辯駁も起るであらう。曰く下等動物には社會生存とは云へまいけれど、同種の動物が社會生存らしく一處に群居して隨分樂しさうに生存して居るものもある(但し蟻、蜂抔は十分社會生存らしいものが慥にあるから是等は除くとして)是等には多少愛他心がなければ出來ぬことではない乎と云はれるやも知れぬ、併し必ずしも左樣には云へまいと思ふ。同種の下等動物が處々に群居して隨分樂

しさうに生存して居るものもあらうけれども、是れは同一地に生誕して其性質も同一である所から、自然其樣に生存して居ることでもあらうが、併し其生存が永續するものでもなからう、唯一時のことであらう。故に必ずしも社會らしい生存と云ふとも出來まいと思ふ。且又茲に一つ念の爲め斷つて置かねばならぬことがある。夫れは外の事ではない、愛己、愛他(Egoismus, Altruismus)の意味である、愛己、愛他と云ふとは通常の意味では決して唯一通り己れを愛し、又は他を愛するといふことではない、愛己といへば他を害して以て己れを利することを云ひ、又愛他とは幾分か己を損して以て他を利することを云ふのである。(但し僕の所見に於ては異る所あれども)さうして見れば未だ社會らしいものをなすにも至らず、一寸一時、群居共存して居る下等動物に幾分己れを損して以て他を利すると云ふ程のことのあるべしとは思はれぬではない乎。養ひ物の不足せぬ內こそ樂しさうに群居もしてゐらうけれども、養ひ物が不足すれば分散してしまう歟、又はそれでなければ烈しい競爭が起るであらう。右等の如き動物には社會らしいものを組織して愛他をするだけの智力はまだ到底ないに相違ないと思ふ。

斯く論じ來つて見ると、吾人の最先遠祖には畢竟愛己心のみあつて、愛他心の絕無なることは最早異論はなからうと思ふ。中島君は、通じて之を論ずれば、博士は能く無限純乎的愛己心のみを有する實物を捕へ來つて、夫より變性的愛己心の生じ來る次第を明示するに於て成功したりとは云ふべからず」と云はるれ共、僕は既に其實物を捕へ來つて中島君の御覽に供へたと信ずることである。唯著書に詳密に論じなんだ爲に中島君を煩したのは實に謝さねばならぬのである。改版の時には必ず詳論し樣と考へる。右の譯であるから、僕が無限純乎的愛己心のみを有し居ると認める品物は、決して形式的論理的幽靈ではない、慥に生命を有し居る實物である。

以上の文に於て吾人の最先遠祖たる下等動物に愛他心抔云ふ物の毫末もないことが判然するであらうと思ふ。然るに動物の漸次の進化に由つて高等動物に至ると漸次社會生存が起つて來た、併し漸次に起つて來たのであるから、初より社會生存と云ふ程の名を付けられぬのは勿論である。唯漸々徐々に左樣な名を付けても宜しい樣になり、最後に吾人々類に至つて大に完全した社會生存になつたのである。尤も人類中にも極めて野蠻人民に至つては殆ど高等動物と同じ樣な社會の有樣である。偖右の如く本來絕えて愛他心のない下等動物から漸次進化するに隨ひ社會生存の狀況も亦進化して社會の維持進步の必要上より自然淘汰と人爲淘汰と

に由て愛己心が變性して愛他心を產出するやうになつたのである。若し愛他心が生じて參らねば一日片時も社會の維持が出來ぬからである、卽ち共同生存する所よりして、吾人相互の愛情と各自の知略とが愛他心を產出することとなり、更に又敎育に由て愛他心を奬勵することにもなつたのである(拙著に感情、知略、敎養の三種愛他心と云ふものである)。併し無より有を生ずるといふことは絕えてあるべきこともし方がないのである。夫れ故皮相上に愛他心を見て固有獨立のものと考へるのは、實に道理の立たぬことと僕は考へるのである。

併し前にも述べた如く、吾人は最先遠祖たる下等動から受けて來た遺傳を今日全然失つて仕舞ふと云ふ譯には參らぬ必ず多少猶保存して居るに相違ない。卽ち右遠祖の遺傳たる無限純乎的愛己心を矢張今日迄多少持つて居るのである、否隨分多く持つて居るのである。然る所が此無限純乎的愛己心は今日吾人の社會生存の爲には甚だ害になるのである。此の如き愛己心があつては到底十分なる社會生存の出來ぬは解りきつたことである。是卽ち僕が前に吾人の心的傾向が兎角社會生存の目的と背馳して一致しにくいと申した所以である。併し茲に一つ述べて置かねばならんことがある。吾人の心的傾向が社會生存の目的と一致し惡いと申すものの、去りとて吾人の心的傾向が其方にのみ偏して居ると云ふ譯ではない。吾人の心性には社會的意向(sozialer Trieb)と非社會的意向(Antisozialer Trieb)と云ふ二種の反對した意向が幷存してあるのである。其譯は吾人は太初より(恐らくは高等動物時代より)必要に由て社會生存をなすに至つたと故、固より社會的意向を持つて居るなれども、併して又遠祖からの遺傳に由て猶非社會的意向をも隨分持つて居るからである。卽ち無限純乎的愛己心を隨分持て居るからである。此の如く相反する二種の意向が俱に存在して居ると云ふことは事實上決して疑ふべからざることである。併しカント氏の申した如く、吾人が理性體と肉質體との二性質を有して居るから左樣であると云ふ譯では決してないのである。僕は吾人が此二種の反對意向を持つて居ると云ふ事實丈に就ても吾人を立派な理性體又は萬物の靈長と云ふの大謬見なることを主張するのである。吾人を萬物の首長であるとは云はれるけれども、靈長抔といふ者は吾人を全く超動物的視した譯で決して當らぬことと信ずるのである」。然るに古來の學者は勿論今日の學者と雖、右等の理を知らずして、道德法(Sittengesetz)が吾人の先天固有であると歟、先天內容の聲であると歟云ふやうなことを主張する

のであるが、實にわからぬ議論である。道德なるものは社會生存の起つた時には固より生ぜねばならぬものであるから、其萌芽は無論、吾人の近祖たる高等動物に存して居ると申して宜しい、否最先遠祖たる下等動物にも其微々たる種子は含有して居ると申せないではない。併し道德其物が決して先天的であるのではない、道德其物は全く社會生存の起るに至つて出來て、夫より漸次進歩したものである。夫れ故實に後天的に相違ないのである。但し今日の吾人には多少先天的と申しても宜い。何故なれば今日の吾人は祖先以來既に道德を遺傳繼承して來たから自然先天的にもなつて居るのである。併し祖先には全く後天的であつたものが今日の吾人に先天的になつたのであるから、此道理を能く知らねばならぬとである。

加之、先天的とする所の道德は、無論一定不變の規則であると說くとなれども、是も大なる謬見である。道德は吾人の祖先以來社會の進化と共に漸次大進化して來た者である、猶此上にも進化するであらう。夫故人民の開否文野に隨つて道德は大に異同があるのである。時としては全く反對して居るともあるのである。唯當時の社會の幸福利益となるものが道德で、不幸不利となるものが不道德である。善惡正邪の別も其道理から立つのである。然るに先天論者は假令開否文野に隨つて道德不道德とする所、善惡邪正とする所、換言すれば正善と指し邪惡と指す所に於て相違があるにしても、道德不道德、善惡、邪正と云ふ別丈けは如何なる人民社會にもあることとなれば、夫れ故道德が人民の開否文野に隨つて相違があると云ふとは云へぬのであると主張することとなれども、實に道理の立たぬ論である。斯く人民の開否文野に隨つて道德に相違があると云ふのは、右申す如く全く社會の幸不幸、利不利とする所に相違があるからである。然るに獨り文明社會の道德のみを以て眞正のものとして、夫れが吾人の先天的であるなどと云ふのは實に迂遠極まる論である。野蠻未開人民には左樣な先天的觀念は少しもない。却て往々全く反對の觀念があるのである。此道理から考へて見れば、所謂先天的なるものは既に文明となつた人民が、數世の間履行經驗した道德の觀念を漸々遺傳繼承して夫れが先天的となつたのである。夫れは唯今日文明人民に先天的なのであつて、一般人類に先天的なのでは決してないのである。

既に述べた如く、道德的不可不の效力は到底自然的不可不の如く强からずして、爲に兎角道德が行れ難いと故、古來社會を支配する大權力を有した者例へば酋長、國王又は敎主等の如き者が種々骨を折つて何でも道德的不可不に自然的不可不と

均き效力を持たせねば成らんと工夫したのである。野蠻未開社會で大權力者が民衆を壓制して統一を謀り、男子が女子を壓抑して其制馭の下に服從せしめんとに努めた時代には、大權力の下に服して能く其命令を遵守する者は善良の者たるべく、若し之に反する者は邪惡の者たるべしと說き、且つ其相違に由て天の賞罰、神の賞罰等を蒙るべし抔諭して、務めて其實行を促したとであるが、是が卽ち效力弱き道德的不可不を成るべく效力强き自然的不可不に變ぜしむる術であつた。又追々進步した宗敎德敎が開げる樣になつてからは、吾人相互に信義を守り又は敬愛を盡せば必ず善人君子となるべく、若し之に反するときは必ず惡人小人となるべしと云ふ樣に諭し、更に一種の巧妙なる術策を發明して未來の賞罰なるものを說き、善人君子は死後、極樂世界又は天堂に生れて至幸至福を受くべく、惡人小人は地獄に落ちて未來永劫の罰を蒙るべし抔說いて勸懲するやうになつたとであるが、死後のとは生前には何ともわからず、實に恐ろしくなるものであるから、自然其敎訓を守るやうになるのである。箇樣な術策と云ふものは實に巧妙なもので、夫れに由つて吾人の行狀が大に善良に趣くとなつた。而して今日の開明社會でも開けぬ階級や又は子供抔には隨分效能があるのである。

是が卽ち吾人の心的傾向が社會生存の目的と兎角背馳して一致しがたいのを矯正する妙策である。換言すれば吾人の無限純乎的愛己心を抑制して、愛他心を勸奬して以て社會生存の目的と一致せしむる妙策である。何故妙策である乎と云ふに愛他心を勸奬するに愛己心を利用するからである。前申す如く吾人は單に無限純乎的愛己心のみを有して居る所の最先遠祖たる下等動物の遺傳を、今日も猶多少有して居るが爲めに、此の如き愛己心が隨分强いから、乃ち此愛己心を利用して之を善き方向に進ませて、以て社會生存の目的を達し易いやうにしたからである、卽ち大權者抔の命令說諭、又は宗敎者德敎者の敎訓勸奬を遵守すれば己れ必ず福利を得べく、若し之に反すれば必ず不幸を蒙るべしといふ觀念を起さしめて以て愛他をなさねばならぬやうに致したからである。是れぞ卽ち效力弱き道德的不可不を效力强き自然的不可不に變ぜしめたる譯ではない乎。夫れ故僕は此の如き仕方を巧妙なる術策と申すのである。

併し、右の如く未來の賞罰を說いて愛己心を利用し以て愛他心を奬勵するのは、重もに未開半開の人民に利益があるのであるが、開明人民にしても未開無識の階級や又は子供に對しては用立つのである。げれ共今日の開明社會の開明階級に對し

では殆ど效能がないのである。夫れ故佛敎や基督敎の方便說も今日にあつては案外效能を失つたのである。果して然らば今日の開明社會の開明階級には如何にして可なるべきかと云ふに、僕の所見では是亦矢張吾人の愛己心を利用するより外に致し方はないのであるが、併し其術の用ひ方を變更せねばならんと思ふ。卽ち吾人の今日進步發達に應じて愛己心を利用するのである。換言すれば愛他心を奬勵して以て今日の進步發達した吾人の高尙なる愛己心を滿足せしむるのである。今日進步發達した吾人は吾人が實に萬物の首長たる地位にあるとを自覺して居る者であるから、吾人は、宜く此最高なる地位に適應する所の愛己心なかるべからざる所以を悟らしむるのである。是れが卽ち今日開明社會の開明階級に適應する敎養的愛他心を起さしむる所以であると思ふ(此とは拙著「道德法律進化の理」第二百○八頁に論じて置いた)吾人の行爲が此の如くなるに至る時は、吾人の高尙なる愛己心と吾が社會の生存の目的とが毫も背馳することなく全く一致することなれば、斯くなつてこそ萬物の首長たる吾人の至上の面目とも云ふべきことであると思ふ。吾人は社會の細胞であつて、相集まつて社會を組成して居るものであれば、吾々個人は互に一致親睦して社會の幸福利益を謀ることに勞することは、吾人最大の快樂では

ない乎。是に至つて吾人の高尙なる愛己心が最も滿足を感ずることではない乎。此の如き心を以て愛他行爲をなせば、啻に敎養的愛他心が十分成功したのみでない、感情知略なる二種の愛他心も皆俱に十分成功したものと申されるのであらうと思ふ。而して此三種の愛他心の成功は取りも直さず吾人の高尙なる愛他心の大成功であると思ふのである。

今日開明社會の開明階級に對する道德の奬勵は必ず此の如き道理より出て參らねばならぬと信ずることである。何故なれば此の方法に於ては吾人が愛他行爲をなすとなさぬとより生ずる賞罰が、彼の宗敎德敎に於けるが如く決して客觀的でなくして、全く主觀的であることは言ふ迄もなく、又客觀的賞罰の如く決して虛僞でなくして全く眞理なるが故である。眞理であるから、開明人民に適應するのであると思ふ。併し假令今日の開明人民に對しても此の方法が決して十分に成效しやうとは思はれぬ。今日の開明人民にも猶無限純乎的愛己心が隨分强いのであるから、此の如き人民に對しては實效は薄い。夫れ故今日猶ほ多く理想的に止まるかも知れぬが、併し成るべく右の方向に向けたい者である。又多少實效があるに相違ないと思ふ。斯く論じ來つて見ると從來學者が道德的不可不の效力であると思つて

居たことは、古代に於ても今日に於ても未開社會に於ても開明社會に於ても、全く自然的不可不の效力に歸して仕舞ふのである。僕が今日「Das Sollen ist sinnlos」と云ふ題を掲げて以上の事柄を述べたのは右樣の譯からである。

併し反對論者は必ず箇樣に非難するであらうと思ふ。曰く「開明社會の開明階級に對しては孔孟の敎の如く毫も未來の賞罰抔を說かず、孔孟の謂はれたことを吾人が當然守るべき義務として敎訓すれば宜しかるべく、又カント氏の絕對命令を以て敎訓するも宜しかるべし。現に右等聖哲の敎を信じて道德を守つて居る人も少くないではない乎。是等は愛己心の爲めではないから、自己の快樂の爲めでもなからう。唯眞面目に其敎を奉ずるのであらう、果して其通りとすれば、矢張道德的不可不の效力であつて、決して自然的不可不の效力と見るには及ぶまい」と。箇樣に論ずる人もあるであらう。併し是亦謬見である。熟考して見れば其謬見たることは直にわかることである。孔孟の敎又はカント氏の絕對命令說抔を信じて道德的行爲を吾人の當然義務として守る人は、其敎を固く信じて履行すれば自己の心が實に安んずるのである。然るに若しも之を履行せぬやうなことがあつたときは自己の心に甚だしい煩悶を起すやうになる。是れが卽ち良心の煩悶(Gewissensbiss)と稱すべきものであれば、取りも直さず自己の快樂又は不快樂であつて、全く愛己の働きである。夫れ故詰まり愛己心に歸することで、矢張り其實自然的不可不である。決して道德的不可不ではないのである。右樣の譯であるから、孔孟の敎又はカント氏其外直覺學派抔の敎も實際道德の行はるゝ上に多少の效能はあるけれども、併し夫れとて決して道德的不可不の效能ではない。矢張り自然的不可不の效能であると云ふことを知らねばならぬ。其外に又箇樣な非難說も出るであらう。曰く「例へば親が不和なる兄弟を叱つて、兄弟喧嘩を禁ずる場合抔には兄弟とも少しも快樂を感ずるのではない、却て甚だしく不快を感ずるであらうけれども、唯已むを得ず親の嚴命で和熟するのである。故に是等は決して愛己心の爲めに和熟したのであるとは云へないではない乎。果して然らば決して自然的不可不とは云へまい、詰まり已むを得ず道德的不可不に隨つたのであると見なければならんではない乎」と主張するやも計り難い。然るに其已むを得ず親の嚴命で和熟すると云ふ點が卽ち愛己心以外ならぬのである。若し親の嚴命に背けば兄弟が親より嚴罰を受けるやうなことになるから、夫れが恐ろしくして已むを得ず和熟する場合もあらう。又或は親の嚴命をも用ひず、猶喧嘩をすれば親に甚だしい心配をかけるやうになる。箇樣なことは

子たる者のなすべきことでないと考へ、寧ろ喧嘩を止めて和熟した方が、親にも心配をかけぬことになり、隨て自己等の心も安ずるやうになると思うて、已むを得ず和熟する場合もあらうが、併も此兩場合とも詰まる所愛己心に歸するのであるから、矢張り自然的不可不の效力であると斷言して宜いと信ずることである。果して然りとすれば例へば Du sollst deine Aeltern lieben と云ふ文は Du musst……と改めねばならず Mansoll aufrichtig Sein と云ふ文は Man muss……と改めねばならぬ。其外如何なる場合にも Sollen なる語は適當せぬ故、總て Müssen を用ひねばならぬ道理になるのである。僕が Das Sollen ist Sinnlos と申するのは、以上論述した譯合からである。敢て諸君に質す。（三十四年六月哲學雜誌）

第六　井上博士の「倫理と宗教」を讀む

諸君、今日は井上博士の「倫理と宗教」を讀む。斯う云ふ題であります。

此井上博士が倫理と宗教と云ふ演說は今年の一月二十五日と二月二十五日の學藝雜誌に掲載になつて居るので、其前に當學士會院で演說されたのである。それを私が今日批評しやう云ふのであるが、此井上博士の論を私が今日批評すると云ひますのは、井上博士が既に私の說を批評したものがある、それは哲學叢書と哲學雜誌とに出て居る井上博士の倫理說がある。それには私の著述を精しく批評してある。此唯今批評しやうと云ふ方の學藝雜誌に出て居る卽ち學士會院での演說にはさう精しくは無い、併し私の說の批評に當る樣なことが多いのである。さう云ふことは書いてないけれども……。それで又私が批評し返す樣なものである。それは此學藝雜誌二冊に涉つて居る、それを私が能く分り宜いやうに御話する、是が談話體に書いてあるから諸君が御聽きになつても分りよい、

それで「倫理と宗教との關係」と云ふ題である。其中が分つて「倫理學者の謬見」其次が「宗教家の謬見」さう分けてあつて、第三番目に「倫理と宗教とに對する新見解」と云ふことがある。夫から一番終に結論と云ふのがある。さう云ふ譯になつて居る。ちよつと大意を初に言つて置かぬと、少し諸君に分り惡いかも知れぬ。充分御承知の御方もあらうが、井上博士の意見は、近來自然科學が餘程盛になつて來た、殊に進化學と云ふものが盛になつて來た、そこで昔の倫理說が壓倒されるやうになつて來て、總て其進化主義を倫理の上にも用ゐて說いて來る樣になつて來た。さうして一々證據

の擧がるものでなければ說かぬと云ふ樣になつて來た。さう云うことは誠に宜しいことである、昔は曖昧模糊とした議論であつた。所が、總て證據を引いて論ずる樣になつたのは自然科學が開けたから倫理學も自然科學の御蔭を以てさう云ふ譯になつて來のである。併ながらそればかりでは倫理學と云ふものはいかない、倫理學と云ふものは智慧ばかりではいかぬ、智慧を研いて道理が分つたと云ふばかりのものでは倫理を進めると云ふことは出來ない。倫理には情と云ふことが大切である、人間の腦の中に持つて居る情と云ふものが働いて來ると云ふことが倫理の上には必要なものである、智慧ばかりで說くと云ふことはいかぬと云ふ說である。其說を充分細かに言つてあるのである。倫理學者の謬見の方はさう云ふ意味に纏まつて居る。それから宗敎家の謬見と云ふ方は今まで世界に宗敎が數多くあつたけれども、もう今日では役に立たない、是から後の宗敎と云ふものは今日のでは役に立たぬから新宗敎が興らなければならぬ。其宗敎と云ふものは卽ち倫理的宗敎と云ふもので、倫理と合した宗敎と云ふものが必要である。さう云ふ倫理を主にした所の宗敎と云ふものが是から興つて來る樣でなければいかぬ。さうなるであらう、さうしなければならぬ。斯う云ふ說である。是が今私が大意を摘んだ所である。それから之を精しく一段づつ讀んで私の說を加へやうと思ふ。

斯う云ふことが一番初に出て居る。

今日講演しまするのは「倫理と宗敎との關係」と云ふことでありますが、段々順を逐うて論ずるつもりであります。

先づ序論として簡單に御話することがあります。それは倫理と宗敎と云ふ此二つの事柄は人間社會に取つてはナカ〳〵重大なる關係を有つて居りますので、今日迄の所、倫理と宗敎の間には餘程親密な相互の關係がありますけれども、二つの違つたものとして竝び行はれて居るのであります。又倫理は重に人生の目的を示すもので、宗敎は精神の慰安を與へるものとして竝び行はれて居るのであります。此二つのものは人類の最も必要として居る所のものであります。勿論人類であれば誰でも宗敎を有つて居ると云ふ譯でもなく、皆倫理の必要を左樣に感じて居ると云ふ譯でもありますまい。けれども人類一般の上から云へば倫理と宗敎と云ふものはナカ〳〵重大なる關係を有つて居りまして、實に人文の發展上に於ては到底兩者の關係を免かれる譯にはいかぬものであります。さうして倫理學者は此倫理を闡明する……倫理の事を研究して其道理を明にすること

とを勤めて居りますが、是等は宗教を離れて倫理學を立てやうと云ふ傾を有つて居る。今日の所では段々宗教に關係を絶つて倫理學を立てやうとして居るのであります。勿論、倫理學者は悉くさうであると云ふことは言へませぬまでも、先づ大抵の倫理學者はさう云ふ精神で倫理學を講じて居る樣であります。又宗教家は夫と反對で、宗教を土臺として倫理を立てやうと斯う云ふ考である。今日佛教家にせよ又基督教信者にせよ、宗教の上に倫理を立てやうと斯う云ふ考で居るのであります。實際の有樣はさうでありますが、さて我々はドウして宜いであらうか、倫理學者の學說に從ふべきであるか、宗教家の教へる所の倫理に從ふべきであるか、ドウも斯う云ふ二つの者が有る以上は其邊に多少迷ひを生ぜんければならぬ、隨分迷うて居る人が世の中にあると云ふことであります。唯さう云ふ風說のみならず、實際迷うて居る人が有つて、往々質問を私に向ける者もある。それで聊か私が平生倫理と宗教のことに就きまして研究して居りますので、斯う云ふ方針を執つたならば一番穩健であらうと斯う云ふ考があります、實は丁度、倫理と宗教との關係」と云ふ一部の著述を公にしやうと思つて半ば書掛けて居るくらゐのことであります。其精細なることは一朝一夕の談ではありませぬので、他日著述として纒めて發表したい考がありますが、其ごく概要のことを今日諸君に御話することは出來ないでもあるまいと思つて今日參りましたのであります。勿論、さう云ふ譯でありますから、有らゆる方面に向つて議論を盡すと云ふことは今日到底出來る譯ではありませぬ。けれども大體斯う云ふ方針を執つて行くべきであらうと云ふ一點に於ては私の自ら確く信ずる所がありますから、唯其要領を御話するに止まるのであります。

本論の一として斯う云ことを御話する積りであります。

まあ今讀んだので諸君に御分りになつたのであらう、さうして別に私は言うこともない。井上博士が倫理と宗教と云ふ本を書きかけて居ると云ふのである、其本當の著述として出すのは一朝一夕に出來ぬけれども、今日は其大體の所を話さうと云ふことで演說をされたのである。

それから、「倫理學者の謬見」と云ふ題があつて。

倫理學者の謬見と云ひましても、有らゆる倫理學者が謬見を懷いて居ると云ふ趣意ではありませぬが、倫理學者の中に殊に近來の倫理學者の中には確に倫理と云ふ事柄に付て謬見を懷いて居る者があると考へる。それは大に辯明して置

かんければならないのであると私は平生考へて居ります。

倫理學は本と哲學若くは宗教の範圍に屬して居つて、宗教と云ふよりは重に哲學の範圍に屬して居りました。西洋では哲學は希臘から起つて、其結果として段段今日まで哲學が繼續して發達して居りますが、既に希臘の學者が段段倫理を講じて居ります。それが抑〻倫理學の初で、卽ち哲學者が哲學と云ふ大なる範圍の中に於て倫理のことを講究してそれを說示したのであります。それで元來倫理學は哲學の中に屬して居つて、哲學と云ふ廣い大きな學問の中の一部分であつたのであります。

それで是は哲學中の一部分として倫理學と云ふものが希臘に起つて來たと云ふことを言はれた。それから、

倫理學はさう云ふ歷史を有つて居る所の學科でありまして、決して倫理學と云ふものは獨立し居つたのでない、所が段々自然科學の盛なるに連れまして、茲に大なる變動が起つて來たのであります。殊に十九世紀以降、殊にダーヴキンの進化論を主張して以來、益々哲學に關する研究の方法が變つて來たのであります。其變り工合は自然科學が段々エライ結果を生じて來た爲めに、卽ち種々有益な發明をして、それの結果廣く人文の發展を助けて來たのであります。實に自然科學の結果は盛なる有樣であります。自然科學が餘り盛である爲めに、段々と此自然科學の方法を精神に關する研究の方面に用ゐることになつて、それが大變有益なる結果を生じて來たのであります。

それで先刻も申した通り、近來自然科學が開けて來た、其中にダーヴキンの進化論と云ふものが開けて來たので、それを總て心に關する方の學問にも應用する樣になつて來たから、是が大變一體の學問の開けを促して來た、それはさう云ふ風に褒めてある。

從前は心理學も倫理學も同樣、哲學と云ふ廣い學科の一部分と爲して居つたものが、段々自然科學の方法に依つて研究さるゝことになりまして、モウ今日の所では殆ど獨立の學科と云ふ樣なものになつて來て居る。自然科學の方法を用ゐた爲に心理學は大變正確なる基礎の上に立てらるゝことになつて來た。昔は實驗を離れて唯精神の研究に依つて爲し遂げられたる心理學が、今は實驗に依て正確なる學科と爲されて來ました。夫で心理學の發達の勢ひは餘程盛な景況になつて來ました。其他種々、美學であるとか、社會學であるとか云ふものも元來哲學の

範圍に屬する所の學科でありましたけれども、自然科學の方法を應用することになつて大變有益なる結果を生じて來た。社會學などは段々獨立の學科として成立つて來ました。

是も褒めてある。自然科學の開けた爲に心理學もそれまでは實驗と云ふことを用ゐずに牽强附會の說で、唯漠然と人間の腦の働を考へて宜い加減の說であつたが、實驗を用ゐる樣になつてから心理學が確になつた、それは自然科學の御蔭である、社會學と云ふものもさう云ふ樣な譯で、總て自然科學の御蔭でさう云ふ良結果を得て來たのであると褒めてある。それから少し反對が出掛けて來る。

さうでありますが、倫理學と云ふものも矢張り心理學若くは社會學と云ふものと同樣に、自然科學の方法を應用して研究すべきものでありませうか、是が一つの大なる疑問であります。私の考では自然科學の方法に依て倫理學を研究し得られまいと思ふ。さうして又研究して居る學者がありますが、そこが大に考へなければならぬことである。成るほど此倫理學は矢張り道德的事實の研究であります、卽ち人間が種種の道德的動作を爲す、其動作を爲したる結果がチヤンと此世の中に事實となつて遺つて行くのであります。それは事實に相違ない、一種の現象である。それだからさう云ふ道德的事實を研究するには自然科學の方法を用ゐて研究せんければならぬ、さうすれば大變正確なる研究が出來る。併ながらさうして研究しました結果はドウしても人類學的若くは社會學的となつて仕舞ふ。人間社會の道德に關する現象卽ち道德的事實を研究しました結果は、人類學の中の道德に關する部分若くは社會學の中の道德に關する部分の研究になつて仕舞ふ。それも大變有益な研究であります。さうして今日まで人類學者若くは社會學者と同樣の研究の方針を執つた倫理學者の研究の結果はナカ〳〵有益なものであります。併ながらドウしてもそれは自然的若くは序述的の研究となりまして、人間の道德的動機を動かして行く效力を有つて居らぬ、ドウも其點に於て缺焉として居る。自然科學の方法で研究しました倫理學は道德に關する知識を與へると云ふ一點に於てはナカ〳〵有益であります、種々斬新なる知識を與へる、けれども、さて其倫理學として現はれて來たものを研究して見ると、眞にそれに依て人間の道德的動機を動かして行く力が少い。さう云ふ倫理學と云ふものは人間の道德として行ふ所のものはドウ云ふものであるかを示さぬではない。示すことは示しますけれども、ドウしても其效力が少い。道德に關する知

識を與へると云ふことが主になつて、眞に人間の道德心を左右して行くと云ふ力に於ては甚だ乏しいのであります、それは著しい事實である。

さう云ふことで、自然科學に依て此心理學や社會學と云ふものが自然に現はれる現象を研究して、さうして心理學上の知識、社會學上の知識を進めて行くことに付て誠に大事な者になつて來たと同樣に、倫理學も自然科學の方法を用ゐて、さうして一體人間社會に起る所の現象を研究して、さうして倫理學を說くと云ふことはそれは有益なことである。けれどもそればかりではいかない、心理學や社會學はそれで宜いけれども、倫理學と云ふものは人間は斯う云ふことをせねばならぬ、人間の動作云爲は斯う云ふことでなければならぬと云ふのであるから、唯事柄を知つたばかりではいかぬのである。それで知識ばかりで倫理が進んで行くと云ふことは無いのであるから、それば かりでは足りない、心理學は此人間の心と云ふものは斯う云ふ鹽梅に働くどう云ふ譯になつて働くと云ふことを詮索さへすれば宜い。それを他に用ゐて行くことはないから知識ばかりで宜い、社會學もさうである、社會が段々に進んで行くのは斯う云ふ道理から進んで行く、或は衰へるのは斯う云ふ道理から衰へるのであると云ふことさへ知れば宜いから、社會學は知識ばかりで足りるのである。けれども道德學は人間の道德を進めやうと云ふのであるから、知識ばかりではいかぬ。それでは唯說明を與へると云ふだけになつて仕舞ふ。心理學や社會學は說明的學問である、倫理學は說明的學問と云ふものでは未だ不滿足である、斯う云ふ井上博士の說である。そこで又後を讀んで見ると、

そこで倫理學と云ふ學科の性質を考へて見ますと云ふと、ドウも心理學や社會學と違つて居る、根本的の違ひがある。それはドウ云ふ違ひがあるかと云ふと、倫理學は是まで歐羅巴の學者殊にヴントなどが言つて居ります規範的科學であります。卽ちあちらの言葉でふと、ノルマチーブ・ヴキッセンシャフト」でありまして、心理學や社會學と違ふ、心理學や社會學は規範的科學でありませぬ、說明的科學卽ち、エキスプリカチーブ・ヴキッセンシャフテン」であります。

倫理學は卽ち規範になる人間の動作云爲の規範を示す、斯うせねばならぬと云ふものである、社會學や心理學は斯う云ふことであると云ふことを知らせさへすれば宜いから、說明的科學である。そこが大變な違だ。それであるから心理學や社會學は他の物理的科學卽ち物理學だの化學だの天文學だのと云ふ樣な物理的科學と同じことであつて、斯う云ふことをせねばならぬと云ふことは出來ない。倫理學は

斯う云ふことをせねばならぬと云ふ手本を示すのであるから違ふのであると云ふ說である。そこで又斯う云ふことがある。

丁度倫理學は政治學と其點に於て同じ性質を有つて居る。政治學は理論的に學理を研究しますが、然ながら目的は實行にある。政治學は目的たる實行を離れて政治學の必要は無い、政治學は唯理論的に講じて宜いといふものでない、實用に適せぬ政治學ならば何にもならぬ、それで政治學は矢張り規範的科學である。それが卽ち政治學の譬を取つたのである。それで尙ほ之を繰返して云ふと、他の學科は自然の原則、さうして現象と云ふものが斯う云ふものであると云ふことを敎へれば宜しいから、知識だけに關係する、倫理學も政治學もそれに依つて人間の道德を改良して行くとか、政治の方法に依て國の進步を圖つて行くとか云ふ實行の法が主なるものであるから、それで其方は他の學科とは餘程意味が違つて居る、知識ばかりで行くものでない……さう云ふ議論は大變長いから一々讀んで行く時間が掛るけれども……

そこで若し倫理學が心理學や社會學等の如く說明的科學として成立つことが出來、又それを以て足れりとするならば、それ以外に人間の道德心を動かすものが必要である、卽ち道德的動機を實際動かして行く所のものが必要である。それで倫理學を單に說明的科學として講ずるものは、それは人類學や社會學の一部分に屬する社會學の道德に關する部分、人類學の道德に關する部分である。それから心理學の道德に關する部分も說明的科學に屬する部分である。倫理學は本來特殊の部分として、それ以外に倫理學それ自身の本領を有つて居る。心理學でも社會學でも、又人類學でも、それ等の範圍に屬して居らぬ所の倫理學が有ると私共は信じて居る、それが元來の意味で、倫理が自然科學的に研究されるのは輓近のことであつて、元來さう云ふ意味のものである。それで倫理學は何處までも理論的であると同時に實踐的でなければならぬ、それが倫理學の範圍である。倫理學は政治學と同樣、論理的である……倫理學は政治學や論理學と同じく規範的科學の中に屬するのであります。それで自然科學と同樣に研究しやうと云ふ人は此の點に於て大に誤つて居る、自然科學の方法に依つて倫理學を研究しました結果は有益なものでありますが、倫理學の本領の所に於て效力が少い。それは人間の道德心を動かす力に乏しい。有益なる科學的の認識は得られますが、倫理學の本領は却てそこに缺焉として居る。それがそう

あると云ふ譯はナカ〳〵面倒でありますが、少し御話して見やうと思ふ。

是は今まで言つたことを繰返して言ふ樣な譯である。倫理學と云ふものは、斯う云ふものであると云ふことを知らしたばかりではいかない、人間の倫理の動機を動かして來る樣なものにならねばいかない。

そこで道德的事實と云ふものは人間社會に現はれて來る道德の事柄、總ての社會に現はれて居る現象です。それが其道德と云ふものから云へば抑々結果である、結果が社會に現はれて來る。道德と云ふものはドウして起るかと云ふと動作云爲として起つて來る、人間の動作となつて道德的事實が社會に現はれて來る。けれども、其動作と云ふものは何から起るかと云ふと、動作を起す本は我々の精神界に在る、精神界の奥に在る、精神界の奥に在るものはそれは一言を以て盡す譯に行きませぬけれども、此道德的動作を惹起すものは意思其ものである、「ウイル」が起して來る「ウィル」の作用の結果として道德的事實と云ふものが現はれて來る。其結果はナカ〳〵千差萬別で、人間の歷史として知られて居るものは皆道德的動作の結果として差支ない。けれども意思が無ければ道德的動作は起らない。それは意思の作用の結果である。意思と云ふものが無ければ其人が無い。意思が眞に其人の根本的のものである。總ての動作云爲と云ふものは唯外界現象から惹起されると云ふ譯に行かぬ。人間には斯う云うものが欲しい、あゝ云ふものが欲しいと云ふものは世の中にある。夫を欲求の對象と云ふ。對象と云ふのは向ふに在るもの、其欲求の對象が有る爲に之を得やうとして種種のことが起つて來る。けれども欲求の對象が直に御互の道德的動作を起し得ると云ふ譯に行かぬ。欲求の對象が無ければ道德的動作は起りませぬが、單に道德的動作の原因を外界に歸することは間違ひである。何故ならば、同じ欲求の對象が有つても之に對してドウ云ふ動作に出づるかと云ふことは其人々で違ふ、大變違ふ。例へば賄賂を持つて來る人が有れば、其賄賂を退ける人もありませうそこで大變に人間の道德的動作が違つて來る。賄賂を人が持つて來れば皆取ると極つて居るのではない。或人は取りませうし或人は大に憤激してそれを棄てると云ふ樣に、人々で違ふ。賄賂を取る者は段々自分の惡い品性を作つて行く。賄賂を棄てる者は始終さう云ふ欲求に向つて打勝つ所の高尚なる品性を作つて行きませう。其品性は誰が作つて行くかと云ふと、自分が作つて行くので、此外界の欲求の對象に向つてドウ云ふ工合に働いて行くかと云ふことは、是は其

人々に依て違つて行く、外界のものが直に極めて行くのでない。外界のものが有つても之にドウ云ふ反應を生ずるかと云ふことは人々に存して居る。人々の意思其ものに存して居る。意思其ものが賄賂を欲すれば取りませう、意思其ものが賄賂を欲しなければ取らぬ。それは賄賂の一事に付て言つたもので、凡そ世界の欲求の對象が道德的動作を起すが、總ての欲求の對象に對して如何なる態度に出づるかと云ふことは人々の意思其ものの極め工合で違ふ。故に意思其ものが我々の根本的のものである。意思其ものは我と云つて差支ない。所が其意思と云ふものは現象界と實在界とに跨つて居ると云つて差支ない。何故ならば、意思と云ふものが動作となつて現はれるので、動作となつて現はれて來てさうして種種の結果が現象界に遺る。意思が働いて、賄賂を取る人もあり取らぬ人もあり、種種現はれて來ませう。種種現はれて現象界に善なり惡なり結果が現はれる。是等の道德的事實を捉へて研究するのは自然科學の方法に依て研究する倫理學である。所が其意思其ものは何かと云ふと、意思の作用は人間の內部から外部に働き掛けて來る活動であります。意思活動「ヴイレンス、テーチヒート」であります。其活動が現はれて來んければ道德的事實は遺らぬ。又現はれて來んければ意思が分らぬ、現はれて來れば分る、道德的結果が遺る。其結果が現象となり道德的事實となる。此道德的事實を捉へて研究するのが人類學、社會學の道德に關する研究になる。所が如何せむ道德は現象だけではなくして意思が其大本であります。意思は一種の活動である。人間の內部から外部に働いて行く活動である。意思は人間の內部から出て來る活動であつて、元と現象でない。特殊の現象として捉へて來ることは出來ない。一種現象を超絕した活動である。そこで道德は現象を捉へて研究することも出來るが、道德の根底は現象以上にある。現象は抑々末で、意思の働いた結果が道德的事實となつて外界に遺つて行く。それを捉へて行くだけでは道德の結果を研究するに止まる。意思其ものが本源であることを知らんければならぬ、意思其ものの依て來る所は現象を超絕して居る。

之を短くして言ふと、茲に例に出してある賄賂を持つて來る人が有る、賄賂は卽ち欲求の對象である、それを取る人も有り退ける人も有る。それはどう云ふ譯だと云ふと、卽ち自分の腦に意思と云ふものがある、意思が取らうと云ふ方に働けばそれを取る。又取つては惡いと云ふ樣に働けば取らぬ。けれども其取る取らぬと云ふことになつて來るのは現象である。そこで現象と云ふものは自然科學が研究するも

のであるからそれは宜いけれども、其未だ現象に現はれぬ意思と云ふものは人の腦の中にあるのである、それを今の樣な新い進化學で、さう云ふ賄賂を取るとか取らぬとか云ふことの起る本たる意思を詮索しないで、其末の現象に現はれた所を詮索するのはいかぬと云ふのである。それは私は充分分らぬけれどもさう云ふ譯である。所が現象に現はれぬものを研究するのは餘程危いことである。それは純正哲學と云ふものがやるのであるが、危いことである。現象になつて始めて物の證據を取つて來ることが出來るが、未だ現象にならぬ腦の中にあるものを詮索して來ることは到底科學と云ふものでは出來ない。井上博士は科學的ではいかぬと云ふのである。心理學でもさうで、昔は現象を等閑に視て、さうして唯腦の中にある力と云ふ樣な事柄ばかり考へて來たのである。それが今日の心理學では取らない所以である。それが科學的とならない所以である。どうも私などの考へた所では賄賂を取る取らぬと云ふことは意思から出ることであるけれども、取ると云ふことは社會の爲に惡い結果が幾らも出て來る。賄賂を退けた結果は世の中の爲に餘程良かつたと云ふ現象があればそれが卽ち立派な倫理學である。卽ち規範的になる。それでなければ唯腦の中にあつて現はれて居らぬ意思の奥まで行つて詮索して見た所が何もならぬ話である。意思には善いのもあり惡いのもある。善惡は意思が働いて行くから現はれるので、賄賂を取る樣な人は都合が宜からうが、卽ちさう云ふ社會は腐敗して來る。賄賂を退ける役人の多い社會は、社會が盛に進んで行くのである。卽ち現象が現はれて來れば倫理學でさう敎へればそれは誠に結構なことである。それで現象を重に詮索して人の心の中を詮索しない倫理學は無益であると云ふけれども、私は少しも無益でないと思ふ。さう云ふ現象から卽ち善惡の例を詮索して來れば、そこで規範となる。さう云ふ學問が規範の學問となる。そこで心理學と社會學の例を出して、井上博士は心理學は或る有樣を研究すれば宜い、それが敎の本となるべきものでない。それから社會學が盛衰存亡して行くのは斯う云ふ道理があつて行く、斯う云ふ現象があつて社會が盛衰存亡して行くことを知れば宜い。それに依て規範とするものがあるのでない。そこで自然科學で宜いと云ふ。それが私は大變間違つて居ることと思ふ。心理學が開けて以來それが大變兒童の敎育に影響を及ぼして來る樣になつた。兒童の腦の發達に逆つた敎育を兒童に與へてはいかない。丁度兒童が發達して行く樣に、それに應じて幼稚園から尋常小學と云ふ樣に當篏めて行かなければならぬ。それのみでない尙其上まで必要であるが、今は

歐羅巴でもさう云ふことに大變骨を折つて居る人がある。心理學自らはそこまで領分を有つて居らぬけれども、教育學では心理學を土臺にして、兒童の腦の發達に逆らはぬやうに、夫に順應して行つて教育の出來るやうに考へて居る。今段々始つて居る。未だ十分效能が有つたと云ふ譯に行かぬが、後には大變效能が有らう。兒童ばかりでない成長した人にも有る。それだから、さう云ふことになると、心理學も或は規範的心理學が出來るかも知れぬ。心理を教育に當嵌めて行く、唯心理の現象ばかりを詮索するのでない、現象を詮索した上に今日の教育に當嵌めて行かねばならぬ。兒童から段々成長して行く人間の精神の發達に連れて教育を施して行かねばならぬと云ふことになると、卽ちもう規範的になる。今日はまだ行つて居らぬと云ふだけのことである。それから井上博士が社會學も唯說明的の學問であると言はれた、それも大變間違つて居る。今はそんなものである、併ながら社會學もそれは社會の有らゆる現象を研究してさうして斯う云ふことにやつて行けば、卽ち社會の興る方に是が適當するものである、斯う云ふことにやれば其反對で社會の衰弱を招くのであると云ふことから、卽ち社會學に依てそれを政治上或は社會上の實際に於て實行して行くことにすれば、卽ち其社會學も一部分が分れて規範的社會學になる。今では十分それ程になつて居らぬが、もう既に行つて居る。政治家にも社會學が實に必要なものになつて居る。今日では政治學は從來の政治學では役に立たぬ、卽ち社會學が開けて來ねばならぬ。社會學に基本を取つた政治學でなければ役に立たぬ。社會學の開けは今日は尙僅なもので眞の科學と言へない、容易に科學と名を付け得らるゝことにならぬけれども既に其傾はある。唯社會學は社會の有樣を說明して行けば宜いと云ふことではない、卽ち社會を改良し、政治を改良して行く基になつて來る。既に今日なり掛つて居る。心理學もさう云ふ譯で教育の基になつて來る、なり掛つて居る。それだから此心理學、社會學は決して何時までも說明的科學でない、其一部分は卽ち規範的科學になるのである。それ故どうも私は井上博士の說は大變間違つて居ると思ふ。それは今までの有樣だけのことである、今までと云つても、今の有樣を少し見ればさう云ふことは分かるのである。二十年、三十年前ならばさう言つても宜かつたか知れないが、もう今日では其通りのことは言へない。

勿論意思と云ふものが有り知識と云ふものが有つて、動作が遂行される、意思だけでは未だ總ての道德的動作が起る譯でない、知識と云ふものが要る。それは何

の爲かと云ふと、欲求の對象を知らんければならぬ。ドウ云ふ欲求の對象が有る、ドウ云ふ方法を以てすれば自分に取ることが出來る、自分の欲求を充足して行くことが出來るか、外界に關する知識が入用である。知識と意志が無ければ總ての道德的動作は爲し遂げられぬ、けれども、知識と意思だけでは必ずしも道德的動作とは行かぬ。善いこともありませう、けれどもさうでないこともありませう。意思は惡いことを欲求することも出來る。惡いことを欲求して自分の欲望を充足して行く。例へば盜賊は惡いことを知つて居る。彼の家は何處から入つてドウすれば金が取れると云ふ知識があるから、それを遂行して行く意思が働く。盜賊しやうと云ふ意思と其方法に關する知識と一緒になつて惡いことを爲し遂げる。かうして意思と知識だけでは未だ充分でない。そこで意思と云ふものは單獨に起るものでなくして必ず感情を伴つて來る。

井上博士は一番初に意思と云ふものを出して、それから知識を出して、今度第三に感情と云ふものを出して來た。

けれども感情を度外視して働くことが出來る。今の樣な惡いことの場合には感情若くは人情と云ふことを度外視して行くことが出來る。けれども人間の動作が道德的であらうと云ふのには感情を離れては出來ぬ。人間は一種の感情が有る、人情卽ち感情ですナ。さう云ふものを具備して居る。素より今日の心理學で云へば知情意と云ふ此三つの能力を人間が有つて居る。是が今日の心理學者の說であるだから意と知だけの働では片輪の働で、モウ一つ情が入らんければ圓滿なる發展の出來やう筈がない。

そこで井上博士は意思と云ふものが大切である、其意思と云ふものは、もと現象に係らぬものである、それを詮索するのが必要である、そこで自然科學では迚もいかない、それから知識と云ふものが要る、けれども知識は盜賊しやうと云ふ知識もあり又善い知識もある、それは當にならぬ。それから第三に感情と云ふものが必要である、そこで卽ち心理學で謂ふ知情意の三つになる。さうして井上博士は情と云ふものが實に絕對的に別段に必要なものであると云ふ樣に說いて居る。それでちよつと、こゝで讀まんければいかぬから讀みませう。

若し意知の二つだけで行かうとすれば間違ふ。賄賂を取つたり金を盜んだり惡いことをするのは意も有り知も有るが人情が足らぬ。それで缺點が有る。感情が大事で、人間は感情から動かされて居る。知識だけでありませぬ、知識だの技藝だ

のと云ふものは必要に相違ありませぬ。知識は大事でありますが感情と云ふものが非常に人間を動かして居る。彼の墓場に夜一人居るとは嫌ふ、知識から云つたら墓場などは何とも思はぬが、何だか墓場に一人居るのは嫌である。それは知識でない、感情である。其の感情はナカ〳〵人間を動かす。迷信の類はそれから起つて居る。種種の迷信が人間を動かして行くのは知識が暗いからである。又知誠か有つても感情に打勝てない場合が有る。人間が今日にやつて居ることは心の中に感じて、或は不愉快であるとか愉快であるとか、種種直接に感じて人間を動かして居ることが多い。知識ばかりでありませぬ、道理はさうでないと知つても感情が動かして居る。善いことも悪いことも、人の爲して行つて居ることは感情が大變に勢力を有つて動かして居る。其感情と云ふものを度外視してはならぬ。私の言ふ感情とは人情卽ち高尙なる感情であります。さう云ふ感情を度外視してはならぬ、度外視してはならぬと云ふのは、道德的行爲を爲し遂げやうと云ふには意思と知識と高尙なる感情此三つが合はなければならぬ。

それは又當然のことである。けれども井上博士は感情には悪い感情があると言つて居る。さうして一番終に感情と言ふのは高尙な感情である、それは高尙な感情であらうが、知識にでも意思にでも皆悪いのがあると云ふことを言つて居る。感情ばかりに高尙のと云ふのは分らず、知識も意思も感情も皆高尙な方でなければいかない。獨り感情ばかりが高尙でなければならぬと云ふことはない。さう云ふ意味でないと云ふことは此文章で表はれて居るけれども、此感情と云ふものを意思や知識と異つて別段に強く取つてある。さうなると大變に間違が起つて來ると思ふ。感情に悪いのがなか〳〵ある。さうして悪いと思はれぬで悪いのがある。其一つ二つの例を言ふと、昔の日本の武士道と云ふものは貴いものであるけれども、ちよつと過をしても直に腹を切ると云ふことがあつた。それは悪い心から起ることでない、縱令人から何と言つても自分が過をなした、武士道に於て耻づる所の過をなした、生きて居られぬと云ふ感情から命を捨てる、腹を切ると云ふのは宜いけれども、それは土臺野蠻未開的のことである。開けて來ればそれは悪い感情に入れられて仕舞ふことである。だから今日さう云ふ考の者は無い。それから印度で夫が死ぬと未亡人が火の中へ入つて殉死すると云ふことが近頃まであたづが、英吉利政府が禁止して居る。それも志は宜い、情に於てはそれは高尙と云ふことが言へるか知らぬけれども、是は野蠻未開的のことである。夫が死んだからと云つて自分も一緒に死

んだら夫の爲になるのでない。日本の殉死、追腹を切ると云ふのもそれと同じことで昔にあつてはそれは皆惡い感情とは言へないでせう、隨分高尙と言つても宜い。けれども進歩的感情でない。甚だ野蠻的感情である。それだから感情ばかり別段貴いものと云ふ考にすると、さう云ふことは大變間違つて來るのである。昔の倫理學と云ふものは感情が隨分重になつて居るのである。それは今言つた日本の武士道で腹を切ると云ふことは宗敎で禁じてないから宗敎と竝び行はれた、其時分は必要であつたかも知らぬ、其時分は惡いことであるとは知らぬ。けれども開けて來ればそれは惡い情になつて仕舞ふ。情と云ふものを無暗に別段のものに立てると妙なことになつて來る。井上博士は近頃科學的に倫理學を研究する者は情と云ふものを見ない樣に言つて居る。私は少しもさう云ふことはあるまい、そんな人はあるまいと思ふ。情と云ふものはちつとも顧るに足らぬと云ふ樣な考の學者がある樣には思はれぬ。それであるから、知と云つても情と云つても意と云つても、是は人間社會を治めて行く上に於ては皆善い方もあり惡い方もある、善い方ばかりではない。それから又野蠻時代と開明時代と變つて來る。昔は餘儀ないことであつて餘儀ないことであれば卽ち其時は善かつたことであらうが、それが開けて來れば惡いことになる。さう云ふ知情意と云ふものに酷い違を見る道理が無い、道理が立つまい。さうして今の科學的に倫理學を研究する者は情を疎外して少しも研究しないと云ふ事實は私は有るまいと思ふ。幾らも研究して居る者が有る。情と云ふものも矢張り空漠な論ではいかない、卽ち社會の現象に依つて說明かして來る情でなければ役に立たぬ。併し其情も重もに現象で詮索せんければならぬ。情が人間に有ることは十分考へねばならぬのであるけれども、さう情ばかりに重きを置くと云ふことは分らぬ。近頃自然科學的に研究して居る人が情を蔑視して居ることは決して無いと私は思ふ。井上博士の心配には及ばぬと思ふ。唯空漠たる考を持つて詮索の出來惡い所を詮索しないで、詮索の出來得る所の現象に就て詮索する、さうしてそれが矢張り規範的になる。社會の存亡興廢に益になる行爲は進めて行き、害になる行爲は禁じて行く、それが卽ち倫理學の目的である。倫理學の目的は唯詮索するばかりでない、種種の現象を詮索して研究して行つて、どうしても是は社會の爲に利益であると云ふものは人間の行爲としてすべきものである。それに反するものは人間の行爲とすべからざるものであると云ふことから、それが卽ち規範的となつて來る、決して說明的ばかりでない。

そこで倫理的謬見はそれで大意を言ひましたが、今まで言つたことを一口に言ふと、井上博士のは心理學や社會學は說明的に止まる。唯社會の現象が斯うである、心理は斯う云ふ工合に發達して行く。人の精神の動くことは斯う云ふものであると云ふことをのみ研究すれば宜いのであるから、說明的科學であると言はれたのは私は服しない。今日は充分な所まで行かぬけれども、心理學と云ふものは兒童の……人間の發達と云ふものを見て、それを敎育に施して行く樣な傾になつて居る。それから社會學もさう政治の上にも社會の改良に就ても、社會學で卽ち現象上に就て研究したものを應用して行かうと云ふことになつて居るから、卽ちそれも規範的になる基は出來て居る。今日未だそれ程眞に規範的と言へない樣であるが、段段それに進んで行くのは當然である。それだから心理學も社會學も矢張り規範的になる。それと同じことで、倫理學も今日の新い倫理學が決して說明的ばかりでない、新い倫理學が現象を能く研究して、其現象に依つて社會に人間の行爲の善惡の影響する所を敎へて行き、影響の善い行爲は人間がせねばならぬ、影響の惡い行爲はしてはならぬと云ふことになつて來るから、今日新しい倫理學は是までのより餘程確に規範的になるのである。

それで倫理學者の謬見は宜しいが、あとの宗敎家の謬見、是は主としてない。又私も論ずる必要は少いと思ふ。唯之を一口に言ふと、宗敎と云ふ者は昔から澤山有つた、近頃釋迦と基督が一番優れた宗敎であるけれども、併し是とても今日は役に立たず、丁度子供の時の着物が大人となつて役に立たぬと同じことで、どうしても基督敎でも佛敎でも今は仕樣が無い、是からは別段の宗敎が要る。それはどう云ふ者であらうかと云ふと、是は倫理的宗敎と云ふもので、倫理を以て宗敎の根本として行くものでなければならぬと云ふことである。それは是までも博士の他の著書に書いてある、私は是も亦反對である。宗敎と云ふものは、倫理と別なものである。倫理を宗敎の中に引込むやうになつたのは開けた宗敎である。併し宗敎の大目的は安心立命と云ふことにあるのである。どんな開けた宗敎でも開けぬ宗敎でも同じことである。然るに宗敎に倫理を主とすれば宗敎の面目を失つて仕舞ふ。佛敎や基督敎が今日要らぬと云ふのは人間の知識が進んだからである。役に立たぬ宗敎を倫理的に拵へなくても倫理學が開けて行けば宜い。私の考では今日知識の無い者或は少年兒童の樣な者には古い基督敎や佛敎が必要であるけれども、少し知識が進んだ以上は誠に不必要である。必要とした所が信仰しない、又信仰させるに及ばぬと思

ふ。井上博士の宗教家の謬見論は極簡單で、先刻の倫理學者の謬見論よりは著しく簡單であるから、私の批評も亦極めて簡單である。

これで大略批評し、盡しました。（三十五年五月東洋學藝雜誌）

第七　算盤的倫理。

萬朝報社長黑岩周六氏が曩に天人論なる書を著しゝに、其後博文館の記者國府犀東氏が之を批評せしを、黑岩氏は此批評に答ふる文を萬朝報紙上に掲載せしが、其中に左の文あり。

余は心的一元論の外に宇宙人性の解釋なきを信ず。唯吾が邦の思想は總體に常識的なり。孔子の教を信ずるも天の何たるを究めんと欲せず、ヘッケルを譯述し出藍の尊敬を受くる加藤弘之先生の如き大家も物質以上は單に迷信なりとし、倫理は利害の計算のみとす。余は信ず、結果の利害を計算し利益に應じて道德を修むることを能事とする倫理は一種の商業取引的の倫理なることを。少許の幸福を犧牲として、更に大なる幸福を得んとすることが若し道德の一切ならば、之は切賣道德なり、屠牛店の主人が現金に應じて肉を賣り、娼婦が玉代に應じて情を賣るをも道德の標本となすを得べし。彼等は幸福と幸福とを交易するものなればなり。此の如き思想の傍に拜金宗と自ら銘打てる道德論あり。一世を唯利害計算の算盤詰となすは當然なり。

黑岩氏の天人論は余も著者の惠贈を辱くして之を讀みしが、近來殆ど罕に見る所の好著と稱して可なり。其中にはヘッケル氏の論旨に資る所も少からずして余の贊同を惜まざる點もあれども、然かも又頗る科學を蔑視して獨斷的哲理に屬するものの多きは余の服せざる所なり。殊に前掲余の主義に對する論旨に至つては最も服し難き所なれば、今は此論旨を批評し併せて余の所見を辯護せざるべからざるなり。

凡そ宇宙の目的が如何なる邊に存するやは余輩未だ之を究むるの知識を有せずと雖、然かも特に有機界に於ける目的の如何は既に之を知るを得たりと信ず。蓋し各有機個體が自己の維持發展卽ち自利を計ること是れなり。而して各有機個體が自己の維持發展を計ることに依て玆に有機界の進化始めて起ることを得るなり。

然るに此維持發展を計らんには必ず之が手段なかるべからざるは敢て言を俟たざることなるが、幸に所謂宇宙の秩序は之が爲めに最好手段を與ふるものの如し。吾が遊星卽ち此地球が若しも一種の天國ならんには、若しも一種の樂園ならんには、若しもモール氏の所謂無何有鄕ならんには、吾人非吾人凡べての有機體は絕對圓滿なる幸福の境遇に在るものなれば、維持發展の目的も又其手段も敢て之を要せざるべしと雖も、然かも吾地球は不幸にも天國にあらず、樂園にあらず、極樂淨土にあらず、又無何有鄕にもあらずして、寧ろ殆ど焦熱地獄若くは火宅若くは修羅とも云ふべき程に不幸なる世界にあらずや。是に於てか有機個體は此の不幸なる世界の苦惱より解脫して幸福の樂界に入らんが爲めに玆に利害的卽ち算盤的手段を要するの已むべからざるに至れるなり。圓滿幸福の世界には利害を計算するの算盤を要せざるも、不幸の世界には利を取り不利を避けんが爲めの算盤なかるべからず。

地質學の徵證する所に據れば吾が地球に原始有機體の生じたるは今より凡そ四千八百萬年前にありと云ふ。而して此の四千八百萬年間に於て原始有機體より進化に依て遂に吾人人類の始めて生ずるに至れることなるが、此原始有機體より吾人に至る迄無數の有機體は抑如何なる手段に依て生存し得るものなる乎、此無數の有機體が各生存を維持し且つ發展せんには、必ず種々の無機、有機兩體を以て其需要に充てざるを得ず。光、熱、空氣、土地等を始め更に動物にありては直接營養に供すべき食餌をも要するなり。而して此直接營養に供すべき食餌なるものは到底之を無機界に求むべからずして、全く同一類たる動植二界に求めざるを得ざるなり、卽ち同類相食と云ふべきなり。

然るに此地球に動植二物の時々刻々に生誕するや其數實に驚くべきものあり。肉眼にて見るべからざる微小物なる所謂菌に於て例を求めん歟、學者の研究する所に據るに、菌の增殖は生殖に依るにあらず、分裂に依る者にして、最初一個の菌が七十二時間卽ち三日の後は增殖に依て其數四十七兆(卽ち四十七 Trillionen)となり、百二十時間卽ち五日の後には遂に地球の五大洋に充滿する程の大數に達すべき筈なりと云ふ。是れ五日間に於て最初一個の微小菌より增殖すべきもののみにて既に然るなり。此增殖の割合を以て推考すれば吾が地球は既に數日にして最早一個の微小菌を容るべき空地をも餘さざるべき筈なるに、然かも四千八百萬年間未だ曾て此の如くならざるは抑何故ぞ。是れ一に有機體の生存需要の缺乏するが爲め

なるのみ。蓋し自然は時時刻刻無數の有機體を生誕せしむるにも拘はらず、之が生存を維持せしむべき需要を與へざるなり。自然は生誕に仁にして然かも生育に不仁なるにあらずや。

自然は凡ての有機體に均しく生命を與ふるに非ずや、而して此均しく生命を與ふる凡ての有機體に又均しく此生命を維持すべき手段を與へざるは何故ぞ(第一問)。自然は均く生命を與ふる同一有機體中にありて其一が他を食餌とするにあらざれば生存する能はざるが如き憲法即ち同類相食の憲法を立てたるは何故ぞ(第二問)。自然は凡べての有機體に自己の維持發展即ち自利を計るべき動向を賦與するにも拘はらず、其之を計るべき身心力に優劣强弱の等差あらしむるは何故ぞ(第三問)。凡そ此三問題は實に宇宙の三大問題にして、余は之を自然造化に於ける三大矛盾と稱せんと欲す。

自然造化に三大矛盾の存するは是れ即ち有機界に生存競爭の生ぜざるを得ざる所以にして、苟くも生存競爭の生ぜん歟、優强者が勝を占め劣弱者が敗を取るは當然の結果にして即ち之を自然淘汰と云ふ。而して此自然淘汰に依て有機界の進化起るなり。蓋し原始有機體發生以來萬物の靈長と稱せらるゝ吾人人類の生起に至る迄の進化幷に吾人の生起以來野蠻未開より次第に開化文明に至れる進化が一に此優勝劣敗の作用に出づるは敢て疑ふべからざるなり。果して然らば凡そ進化なるものは全く自然造化に於ける三大矛盾に因由せる利害問題即ち算盤問題にあらずして何ぞ。ヘッケル博士も亦生存競爭、自然淘汰の作用を稱して算數的必要事件 (Die mathematische Nothwendigkeit) と言へり。

但し以上は未だ道德界に就て言ふものにあらざれども、更に道德界に就て觀察するも利害問題即ち算盤問題は尙依然として力あるを知るべし。余が所謂道德界なるものは即ち國家的社會を云ふなり。凡そ國家なるものは衆個人が絶對的に集合共同して生存する所の一種の大有機體たるに外ならざれば、國家にありては其安寧幸福を維持發展せんが爲めに絶對的に道德(法律も亦)を要するは言ふ迄もなきなり。故を以て國家にありては自然界に於ける純乎的利己が稍其性を變じて一種の變性的即ち進化的利己(即ち利他)を派生し、能く國家の道德と調和合一して以て國家の安寧幸福を維持發展するを得ることとなれり。而して此國家の安寧幸福を求むる所以のものは是れ實に國家なる一大有機體の利己心に發するものにして其實は同じく一大有機體たる他の國家に對して自己の地位を維持發展せんとする

ものに外ならず。然かも此國家の利己は其細胞たる個人の利己が變性的利己となることに由てのみ生ずるものたるなり。是れ亦實に計算的卽ち算盤的問題たるにあらずや。

又道德の進歩發達に就て觀察するも、同く算盤的問題に遭遇せざるを得ず。社會の優强階級の權力が常に劣弱階級を壓倒する國家にありては道德は進歩發達すること難しと雖、然かも之に反して劣弱階級も亦能く權力を得て遂に優强階級に對抗するを得たる國家にありては道德は大に進歩發達したり。又道德の進歩不進歩は啻に國家の內部に利害を及ぼすのみならず、外邦に對する權力上にも大利害を及ぼすものなり。道德の進歩せる邦の權力は外邦に對して强大なれども、道德の進歩せざる邦の權力は甚だ弱小にして獨立を維持すること易からず。凡そ是等の理も亦實に算盤問題卽ち利害問題に屬するものとすべきにあらずや。

以上說く所に據て考ふれば、凡そ自然界にありても又道德界にありても、算盤的卽ち利害問題に屬せざるものは一もなきにあらずや。而して余の所見を以てすれば其此の如くなる所以のものは全く自然造化に於て三大矛盾の存するに淵源するものとせざるを得ざるなり。若しも自然造化に三大矛盾の存せずして吾が地球が實に天國たるならば若くは樂園たるならば、利害と云ふ問題の生ずべき理毫もあらざればなり。

余の主義を圖式にて示せば卽ち左の如し。

自然界 ↑ 個體的利害 ↑ 自然造化に於ける三大矛盾

道德界 ↑ 個人的社會的利害 ↑ 自然造化に於ける三大矛盾

余は黑岩氏が余の倫理主義を貶して算盤詰の倫理と稱せしも毫も厭忌せず、寧ろ歡迎して此題名の下に余の主義を辯ずること此の如し。但し黑岩氏が余の主義を以て切實道德とするが如きは全く余を誤解するものなり。拙著「道德法律進化の理」の第三版(增補改訂せるもの)は三四箇月後に出版すべければ、該書に就て余の主義を詳悉せらるれば幸甚なり。(明治卅六年十一月東洋學藝雜誌)

第八　倫理上の一大疑點

諸君、倫理に就ては今日尙解釋し難き數多の疑點が存するであらうが、余は其中の一に就て諸君に質したいと考へて居ることがある。諸君が今日余に其機會を與へられたのは余の大に謝する所である。

余の考ふる所では道德と云ふものは特に國家卽ち國家的社會にあつて必要なもので、國家と國家との相互間にあつては當然に必要なものとは云へないと思ふのである。因て余は今より十一年前卽ち明治二十六年の著述「强者の權利の競爭」幷に其翌二十七年の著述「道德法律の進步」に其事を論じ、又三十四年の著述「道德法律進化の理」の第一版幷に昨三十六年の同書第三版には更に其事を詳論しておいたのである。然るに右等の書中の他の事項に就ては隨分批評も出た。殊に利己、利他の主義に就ては井上、元良、中島の諸博士及び中島德藏氏等より種々の價値ある批評も出たけれども、唯道德が特に國家的社會內の必要に限るものであると云ふ余の主義に就ては未だ殆ど批評が出ないと云つてもよい程のことである。尤も井上博士の論文中には多少右の批評に當るやうな說がないでもないが、其外には坪內雄藏博士の國際道德說が中央公論(第十九年の第五號)に出て居るのを見た。是れは余が說の批評ではないやうであるけれども、兎に角反對說の樣に思はれる。先づそれ位のことであると思ふ。併し余が考ふるに、是れは決して反對說が無いために批評が出ないのではない、反對は實に多いであらう。蓋し余の說に贊同する人は殆ど無からうと思ふ位のことである。それも其筈のことである。歐洲學者の中にも右樣な主義を說く人は無からうと思ふ。ホップス氏の如きは道德は國家の主權者が制作したものであると云ふ說を立てた人であるから、それから推論して見れば全く國家的社會內の必要に限るものであると云ふ論に歸着する譯であるけれども、併し同氏は少しも其樣のことを論じて居らぬと思ふ。又功利學派の如きは道德は國家の利用に出ると云ふ主義であるから、是亦特に國家內に限ると云ふ旨意に歸着する譯と思はれる。けれども、矢張其樣なことには論及せぬやうに見える。今日の學者でグムプロキッツ氏が先づ余の說に近いやうな說を述べて居るやうであるけれども、併し決して全く同樣ではない。又スペンセル氏の如きは個人が同國人に對する德義と外邦人に對する德義とに於て時として(蓋し戰爭の時を云ふなり)全く反對なる態度を取らねばならぬと云ふことは、心靈ある吾々人間には實に堪へられぬことであると述べて居る。けれども併し余の言ふやうなことは少しも言つて居らぬと思ふ。淺學寡聞なる余が口廣いことは言はれぬけれ共、今日迄余の知つて居る所では余の言ふやうなことを

述べた學者は殆ど無かうらと思ふのである。

右樣な譯であるから內外の學者中余の說に贊同する人は殆ど一人もなくして悉く反對であらうと思ふ程であるのに、然かも是迄少しも批評の出ないと云ふのは決して反對でないからではない、却て大反對であるけれども併し此の如き愚論は到底齒牙にかける程のものでないと云ふ所から一の批評も出ないのに相違なからうと思ふのである。けれども余はそれを甚だ遺憾に思ふのである。余は右申す如く十餘年前から右樣の主義を信じて居る。けれ共何分にも余一個の說で他學者から少しも同樣の說を聽かぬのであるから甚だ不安心に考へて居る。それでどうか他學者の說を聽いて見るならば余の考へて居た所に謬見のあるとも分り、隨て多少余の考を改めねばならぬとにもなるであらう。余は決して余の說を固執しやうと考へるのでないから、どうか諸學者の說も聽いて見たいと始終考へて居るのである。夫故今日は此席にて其事を述べて諸君に質したいと思ふのであるが、右申す如く是迄諸君からも右の事に就て一の批評も出ぬけれども、併し諸君は余が著書に論じた所は粗承知せられてあるであらうと思ふから、今日又詳論するには及ばぬと思ふけれども、一寸概論しておかねば質疑の手續がつかぬから、手短に述べやうと思ふのである尤も委しいことは何卒「道德法律進化の理」の第三版を參照されんことを希望するのである。

從來の學者の考では道德なる者は凡そ人間たるものの關係を律するものであるから、天然當然に吾々人間に具はつて居るものである、假令其形式は時勢に由り多少の變化はあるにしても、其本體に至つては全く吾々人間の天性に賦與されてあるのである。それは人間に良心といふものがあつて善惡邪正を辨別する力を持つて居るので分ると云ふやうな說である。是は固より直覺學派の說であるけれども併し又功利學派と雖多少矢張同樣の主義に歸するのである。唯社會の利用に依て道德の標準が立つと云ふ位の相違であると思ふ。左樣な考であるならば道德なるものが吾々人間相互の行爲上當然存すべきもので、國家の內外抔に依て要不要のあるべき筈のもので無いのは當然のこととせねばならぬ。けれども、それならば何故に道德が吾々人間相互の間のみに存して他の動物界には存せぬのである乎、それが少しも分らぬことになる。併し人間は萬物の靈長であるから人間のみには其の天性に道德が具つてあるけれども、他の動物は人間と違つて劣等の者であるから道德の如きものは不用であると言ふ乎。それでは基督敎で神が特に人間の爲め

に世界萬物を造つたと云ふやうな說になつて、決して吾々學者に滿足を與ふるには足らぬと思ふ、のみならず既に進化主義の開けた今日になつて進化主義を信ぜぬ學者ならばいざ知らず、苟くも進化主義を信ずる學者ならば妄に人間と他動物とを全く區別して論を立てるやうなことでは決して道理は立たぬのである。然るに今日多少進化主義を信ずる學者でも倫理抔のことを論ずるときになると全く進化主義に反するやうな說を立てゝ自ら怪まぬのであるが、それが甚だ分らぬと思ふ。

余は全く進化主義を信ずる者であるから、倫理のことに就ても出來得べきだけ進化主義に依據して研究せねば眞理は得られぬと考へるのであるが、偖進化主義に依據して考へて見れば、道德なる者が吾々人間に天然に具つて居るものとはどうしても考へられない、吾々人間が進化に依て次第々々に道德を得るやうになつたものと考へるより外はない、左樣な點から研究して見ると、道德なるものは特に社會的生存上に必要であつて、未だ社會的生存をなさぬ者の相互間には必要でないと云ふことに歸着して來ると思ふのである。但し今少し委しく述べて見れば道德といふものは全く國家的社會を治める道具である、國家的社會を組織する個人と個人との間、又は個人と國家的社會其者との間に道德といふ道具がなくして、各唯自儘勝手なことをやつて居たならば社會の治まるべき道理が決して無い。そこで道德が必ず必要になるのである。然るに同じ人間相互間であつても少しも社會的生存をしない間柄にあつては社會を治めると云ふ必要が未だ少しもないのであるから、社會を治める道具たる道德の入用になる理窟がない。尤も彼此の國家的社會であつても互に和親交通をして居る間柄ならば、殆ど一國家的社會になつて居るやうなものであるから、本當の一國家的社會とは大に違ふけれども、稍それに類似したものと認めてよろしい(余は國家的社會を完成社會と稱し、彼此國家的社會の互に和親交通するものを未完成大社會と稱す)。それゆゑ右樣な間柄にあつては又道德が入用になるに相違ないが、併し一國家的社會內の道德とは其性質と程度とを大に異にするは當然のことである。故に之を國際道德(Völkermoral)と云ふのである。一國家卽ち國家的社會と云ふものは是は絕對的合同で、切つても切られぬ關係のものである、卽ち國家的社會を組織して居る所の各個人は是れは全然國家に服從すべきものであつて、唯それに依て國家と云ふ一の大有機體が生存することを得るのである。余は之を第三段階有機體であると假定したのであるが、一寸此處で三段階の

有機體と云ふことに就て話さねばならぬと思ふ。そこで第一段階有機體と云ふのは單細胞的有機體卽ちモネラだのアミーバだのと云ふやうなもの、第二段階の有機體と云ふのは多くの單細胞的有機體が集合して組織した複細胞的有機體卽ち多くの植物及び動物で吾々人間の如きも其一である。それから第三段階有機體と云ふのは多くの複細胞的有機體が集合して組織したもので、複々細胞的有機體と云つてもよからう。是れは種々の植物群體、動物群體であつて、管水母（クダクラゲ）や水螅水母（ヒドロクラゲ）は卽ち動物群體である。又蟻や蜂の群體等も亦此第三段階の有機體とすべきのみならず、吾々人間の國家的社會も同樣のものとしてよからうと思ふ。尤も生物學者は未だ國家的社會を第三段階の有機體とは言はぬけれども、併し國家的社會の有機性は多くの社會學者に依て認定されて居るとであるから、余は之を第三段階の有機體と假定するのである。但し是等のことに就ての委しいことは「道德法律進化の理」に讓つてこゝでは述べぬ。

右申すやうな譯であるゆゑ、時と場合に依ては各個人は自己を全く國家の犧牲に迄供して國家の生存の爲めに盡さねばならぬ筈のものである。國家が絶對的合同であると云ふのはそれゆゑである。然るに國家と國家との和親交通卽ち合同に至ては其上に最大上權を持つて居る所の大國家と云ふやうなものがなくして、唯國家と國家との隨意な合同であるから、是れは未だ有機的社會卽ち第三段階有機體になつたものでないそれ故絶對的合同とは云へぬ、唯社會に似たやうなもの卽ち未完成大社會であるから、是れは相對的合同である。夫れゆゑ國家と國家との間柄に於ては國家と國家とが畢竟唯自國の利益を主眼として合同するのであつて、國家內の各個人が國家の生存の爲めに合同して只管國家の利益の爲めに盡すのとは大に道理が違ふ。そこで其相互間に多少道德が必要であつても、其道德の性質や程度が國家內の道德の性質や程度とは大に違ふのである。國家と國家との間柄に於ては交際上に於て各自國の利益が得らるれば交際するけれども、若しも双方の利益が互に牴觸するやうなことがあらば自國の利益を主張せんが爲に遂に交際を絶つて戰爭迄もせねばならぬことになるのである。然るに國家內の各個人は各自己の利益のみの爲めに合同して居るのでなくして、畢竟重に國家の生存の爲めに合同して居るのであるから、自己に如何なる不利益な場合が起るとも自己の利益を主張せんが爲めに妄に鬪爭抔するとは許さぬ。唯國家の法律に依て國家の裁決を乞ふだけのことを許すのである。是れが大なる道德的差異である。余が國家內の道德

と國家と國家との間柄の道德とに於て性質と程度とに大なる相違があると云ふのは卽ち右等の事である。

右樣な譯であるから當然に道德の十分行はるべき範圍は特に國家內に限るとで、國家と國家との相互間では唯或る程度迄に行はるべき筈のものであるが、併し互に全く交際往來せぬ國家と國家との間にあつては其間に道德は全然行はるべき筈のものでないのである。其間には毫末も社會的性質がないから決して道德の必要もないのである。箇樣な國家と國家との間柄にあつては如何に不德義と思はれる行爲があつても致し方はない、てんで德義を以て論ずべき間柄でないから德義不德義の名稱もない筈のことである。併し余が此の如きことを言へば甚だ暴論の樣であらうけれども、道德が特に社會的生存に必要であると云ふ主義を信ずる以上は余の論は謬つて居らぬと信ずるのである。動物界卽ち自然界にあつては如何なる行爲と雖道德不道德の議論に登るべきものでないのである。假令人間界と雖毫末も社會的關係のない以上は全く同樣のことであると思ふ。併し人間に對する場合と他の動物に對する場合とは大に理窟が違はねばならぬと云ふ反對論が、殆どあらゆる學者、あらゆる俗人から出るであらう、否出るに相違ないことは十分承知して居る、けれども此の如き反對論は道德を以て全人間界を治める道具として天然に吾人間に具はつて居るものとする主義に依據するより外には少しも確かなる根據のない論である。して見れば此主義が余の言ふ如く果して一の價値のないものであれば到底成立の出來ぬことは當然であると思ふ。余は決して之を疑はぬのである。

但し斯くは言ふものの、以上は國家其者と國家其者との間柄の道德に就て述べたのであつて、此國の臣民と彼國の臣民卽ち彼我國家の臣民相互間の道德に至つては又理窟が多少違ふのである。尤も古代國際道德の未だ十分行はれぬ未開の時代にあつては彼我國家の臣民相互間の道德も彼我國家其者相互間の道德も大抵同一であつた。換言すれば個人相互間でも國を異にすれば其間に矢張國家其者相互間のやうに道德は殆ど行はれなんだ、卽ち他邦人は最初から互に敵と認めると云ふやうなことで、同一人間を以て遇すると云ふこともなく、殆ど他動物同樣に考へた。希臘國の如きすら初めは其通りであつた。支那では夷狄禽獸扞と云つて他邦人を動物同樣に看做したのである。然るに追々開化の進むに隨つては大に趣が變つて來て、彼我臣民相互の間には彼我國家相互の間に於けるよりも道德が能く行はれる

やうになつて、今日の開化國では他邦人をも殆ど自國人同樣に考へるとになつた。是れは民業卽ち商業工業又は宗敎學藝其外種々の事柄に就て、彼我臣民相互間の交通が盛になつて、國の內外を問はず互に協力共同して從事するやうになつて來たからでもあるのみならず、個人と個人との間は國家と國家との間とは違ひ、互に權力を張り合ふ必要も少い上に、同じ人間であるから自然互の交情も親しくなるからのとである。又其上に基督敎の敎旨も與つて大に力あることであらう、それゆゑ今日は個人々々の間には既に國々の別は殆どない位迄に進み、國々の別を却て邪魔に思ふ程になつて來たのである。尤もそれは重もに開化國人と開化國人との間のとで、開化國人が未開國人に對する上では今日と雖中々左樣にはゆかぬ。開化國人が未開國人に對しては容易に德義を用ひぬのである。是れは互に利害を一にすることがないからであつて矢張當然の理であるが、唯情の上から考へては實に忍びないとに相違ない。併し人世は漸々進化するものであるから、進化の極度に至る迄は始終過度時代と見ねばならぬとであるが、此過度時代にあつて情と理との往々一致し難いのは已むを得ぬとであらうと思ふ。

此處で一つ人道 (Humanität) と云ふとに就て論ぜねばならぬとがある。所謂人道とは卽ち人間が人間に對して行ふべき道と云ふ意味であつて、凡そ人間たる者は同一人間に對し內外の別なく一樣に道德的行爲を以て交らねばならぬと云ふとを訓戒する譯である、けれども、國家對國家上の行爲に至つては前述ぶる如く內外全く同一と云ふ譯にゆかぬのは是れは全く當然の理である。國家內の個人對個人の關係に於ては前述べたる如く、或は場合に臨んでは國家の爲には勿論のと、假令個人の爲めたりとも自己の身命を犧牲としてまでも盡さねばならぬとがある、左樣な行爲が畢竟國家の爲めに間接に利益を生ずるとになるからである。然るに國家對國家の關係に至つては如何なる場合と雖、自國の生存を犧牲としても他邦の爲に盡さねばならぬと云ふやうな理窟は決してないのである。國家對國家の關係に於ては徹頭徹尾自國の利益が眼目になるのである。苟くも自國の利益を損せん歟他邦の爲めには一擧手一投足の勞をも取るとは出來ぬ譯である、是れが當然の理である。是れは前申した如く個人の國家に於けるとは違つて、國家と國家との上には大國家なるものがないからである。若しも大國家なるものがあつて各國家が其下に屬して居たならば、大國家の利益を計らんが爲に或は自國の生存を賭しても大國家の爲には勿論のこと、又他邦の爲にさへも盡さねばならぬとも生ずるであ

らう、けれども左樣な大國家が無いから隨つて左樣な責務も無いのである。そこが大に違ふ所である。尤も前申した如く今日の開化國では彼我國家の臣民相互間にも一國家の臣民相互間と殆ど同じやうな道德が行はれるやうになつたから個人間にあつては人道と云ふとも多少言ひ得られるやうになつたのであるけれども、國家間にあつては漫に人道といふことを唱へて右樣な差別を知らぬではならぬのである。彼のトルストイ伯の如きは箇樣な差別を知らぬ所から全く國家と云ふものを眼中に置かず、唯世界全人類をのみ視て說を立てるのである。トルストイ伯には父母の國たる露國の存亡興敗抔は何でもない、指の先きに小疵を受ける程にも感じないのである。

尙此處で述べねばならぬことが一つある、開明國の國家對國家の關係が國家內個人對個人の關係と大なる相違のあることは右述べた通りであるから、國家は十分自國の利益を主眼として行動してよろしい、假令和親交通をして居る國に對しても公々然と男らしく自國の利益を何處迄も主張することは少しも差支ない。それが爲めに戰爭を起してもよろしい、是れは眞の道德の行はれる間柄でなくして互に自國の利益を主眼とすることを許す所の國際道德のみの行はれる間柄である。

から仕方がないが、併し詐欺的、盜賊的行爲を用ひて自國の利を計ると云ふことになると、こゝに始めて不德義となるのである。何故ならば詐欺盜賊抔といふことは和親交通と云ふこととは全く兩立の出來ぬ性質のものであるからである。けれども今日と雖、强大國は弱小國に對して隨分左樣なことをやるのであるが、併し露國程に甚だしいものはない。十年前に吾が邦が清國に勝つて遼東半島を吾れに取ることを清國に約した時に、露國は橫合から口を入れて、夫は將來東洋の平和を害することになるのであらうから止めるがよからうと忠告した。それで吾が邦は其忠告を容れて此事を止めた。然るに露國は數年ならずして清國の弱みにつけこみ其土地を殆ど永借同樣の約束で其實奪領してしまつた。又北清事件の時に自國防衛の爲めと云ふ名義で事件の鎭定迄を期として滿洲に出兵したにも拘はらず、事件の鎭定した後も少しも其約を履まずして撤兵せぬ、其實奪領したのである。日露戰爭も全くこれがために起つたのであるが露國は此の如き詐欺的、盜賊的行動を親交國に對して少しも憚らずやつて居るのである。此の如き行動が國際道德に背反するのは勿論であるが、又外交政略から見ても其實露國のために不得策である。弱國たる清國に對しては如何なる行動も出來るであらうけれども、それが爲めに遂

に吾が邦からは戰爭を仕掛けられて連戰連敗の不幸に陷つたのみならず、他の各邦からは惡まれたり侮られたりするやうな不運に陷つたではない乎。生存競爭の結果が果して適者生存、不適者死滅であるならば、露國は各邦競爭場裡の不適者として早晩死滅を免れることは出來ないのである。余は此事に就て拙著「進化學より觀察したる日露の運命」に委しく論じておいた。

國家對國家上の議論は右の通りであるが、併し前述した如く今日彼此開化國の臣民の相互間は既に殆ど一國家內の臣民相互間の如き關係となつて、隨て國家內に於けるが如き道德も大抵行はれるやうになつたことであるが、是れは前述の如く商業、工業又は宗敎、學藝等、其外何事に就ても各國の差別なく人民が互に協同してやるやうになつて、隨て次第に親密になつて來たからのことであつて、實に歡ばしいことである。此狀況にして益進步して參れば其極遂には開明各國が眞に一致して一大國家を組織するやうになる歟とも思はれるのである。尤も是れには學者間に種々の異論もあり、余とても今日斷言することは出來ぬけれども、併し兎に角漸漸左樣な進步の傾向があらはれて居る。若しも實に左樣になれば是れは全く宇內統一國が成立する譯で、隨て各國の上に最大上權が出來て、世界が此最大上權に依て治められる有機的一大國となることであるから、最早國際道德といふものは無くなつて、今日の國家內の道德が世界中に行はれることになるのである。左樣な譯であるから、人道といふ者も他の凡ての事物と同じく全く漸々に進化發達する譯のものであつて、從來の學者の考へた如く初めより天然自然に人道といふ者が存して居るのではない。道德の進化した最上點に至つて始めて人道と云ふ者が全く成就するのである。從來の學者は進化の道理を知らぬから全く本末顚倒の議論を主張するのである。

以上述べ來たつた國家對國家の關係は、余に於ては少しも謬りのない眞理と確信して居るのであるが、其實今日の實際は殆ど余の議論の通りになつて居るのである。然るに平常講義演說等に依て立派な人道を勸誘しつゝある宗敎家や哲學者や倫理學者さへも今日の實際を認許して、殆どそれを意とせぬのである。尤もそれを人道として認許するのではない、全く政略として認許するのであるが、苟くも宗敎家、哲學者、倫理學者等にして人道の外に政略を認許すると云ふに至つては、其心事の陋劣なること實に驚くべきではない乎。

但し最初より述べ來つた所の理を更に十分證明せんとすれば、必ず一般有機界の

上に例證を求めねばならぬと思ふ。何故ならば、余は進化主義を信ずる者であるゆゑ、有機界を一元と見て大體の普遍性を認めるからである。凡そ有機界に三段階のあることは既に述べた通りであるが、此三段階の有機體は皆同じく唯一の根本動向といふものを固有して居るのである。而して此根本動向と云ふものは如何なるもの乎と云へば、卽ち自己の維持と發展とを計るべき生理的及び心理的動向である。卽ち一口に云へば自己の利益を求めんとする動向である。凡そ有機體にあつて起る所の自發的現象若くは行動は、皆此唯一の動向から發動して來るのであると思はれる。是れは別に證明を要せずして明かなことであらうと信ずるのである。それゆゑ余は之を有機體の唯一根本動向と云ふのである。尤も此事は決して余が始めて言ふのではない、古くはストア學派のディオゲネス、ラエルティウス氏が言つた。又今日ヘッケル氏抔も言つて居るが、併し此根本動向を唯一として此の外に根本動向と稱すべきものは何もないとするのは余の考である。他の學者はそれ程迄には論じて居らぬやうである。大詩人シルレル氏の詩に世界の機械は飢餓と戀愛とに依てまはると言つて居る如く、此唯一の根本動向は二樣に發動するのである、卽ち第一には飢餓より起る營養に依て自己個體の維持の爲めに發動し、第二には戀愛より起る生殖に依て種卽ち子孫の維持の爲めに發動するのであるが、併し此二樣の發動ともに畢竟唯自己の維持に外ならぬのである。然るに通常一般の說では第一の方は利己であり、第二の方は利他であるやうに考へて居るのであるが、それが大なる間違である。此の事に就て余はスペンセル氏の說に反對して述べたことがある（道德法律進化の理第三版第二十二頁）。ヘッケル氏の如きは此二樣ともに自己の維持と稱して居るにも拘はらず、又それに矛盾した說も述べて居るやうであるが、それは後に述べる所でわかるであらう。尤も單細胞的有機體には未だ雄雌の兩性が存して居らぬから未だ生殖といふことが起らぬ。唯分裂に依て種が增殖するのみであれば未だ戀愛ありとは言はれぬ。又高等有機體にあつても未だ生長せぬ間は戀愛の情は起つて來ないから、此兩樣の場合に於ては根本動向は自己個體の維持手段たる營養上にのみ發動して、種の維持手段たる生殖上には未だ發動せぬものと云はねばならぬ。

箇樣な譯であるから、各有機體は本來全く自己の爲にするより外の働を持つて居るものではない、決して他の爲にすると云ふやうな働を持つて居るものではないのである。卽ち之を利己といふのであつて、是れが生理的と心理的との二種に分れ

る。而して利己心と云ふは其心理的のものを指すのである。それゆゑ自己の利益となることならば決して他の利害抔を顧るものでない、只管自己の利益をのみ取ることに努めるのである。して見れば有機體は凡て利己一偏のものと認めねばならぬ。尤も他の利益を害せずして自己の利益が得られるならば決して無益に他の害を惹起するやうなことをせぬのは勿論である。但し斯く言へば有機體は皆意識的に自己の利益を計るもののやうに聞えるけれども決してそればかりではない、植物は勿論のこと動物と雖利己は生理的にも働き又心理的にも働くもので生理的自己は云ふに及ばず、心理的利己と雖全く無意識的に働くものが中々多いのであらうと思はれる、却て意識的に働く方が少ないかも知れぬ位のことである。

併し單細胞的有機體(卽ち第一段階)が多く集合して複細胞的有機體(卽ち第二段階)を組織し、又複細胞的有機體が多く集合して複々細胞的有機體(卽ち第三段階)を組織せんとするに至ては、其集合するもの相互の間には單に利己のみでは集合することが出來ぬから、そこで始めて利他といふものが出來て來るのである(利他も亦生理的と心理的とに分れる)が、偖此利他といふものが如何にして出來て來るのである乎、利己に正反對なる性質を持つて居る利他が突然茲に出來て來ると云ふのは如何にも不思議なことではない乎。是が卽ち一大疑問の存する所ではない乎。然るに余の考では此利他と云ふ者は皮相上利己と全く正反對なる作用を持つて居るやうではあるけれども決して左樣ではない。其實は矢張利己に外ならぬのである、唯利己が境遇の必要に應じて少しく其性質を變じたのみのものである。其理如何と云ふに同一種の有機體は同一なる稟性を持つて居る故互に集合することが利益になる、互に集合すれば、こゝに更に大なる有機體が出來ることになる。左樣になると集合者は全體からと、幷に各集合者からとより保護を受けて其生存を安全にすることが出來るからである。第一段階有機體の集合に依て第二段階有機體が出來、又第二段階の集合で第三段階の出來るのは畢竟それゆゑであらうと思ふ。併し是れは決して意識的ではない、全く無意識的卽ち自然的に出來るのであることは勿論である。して見れば利他と云ふも其實利己から出て又利己に歸するのであるから從來學者の考へた如く決して純粹なる利他ではない。唯利己が少しく其性質を變じたのみのものであると云ふことになるのである、決して利他が突然に生じて來たのでないと云ふことが分かるのである。尤も利己が總べて利他に變じたと云ふことではない、利他に變ぜぬ利己も尙存してあるのであつて、此利己は自己自身の

保護に於て甚だ必要なものである。

以上の道理から考へて見ると、其結論は箇様になるのであらうと思ふ、各有機體は孤立して居る間は利己一偏で未だ少しも利他と云ふ者を持たぬ、是れは未だ利他の必要が少しもないからである。然るに集合して共同的卽ち社會的に生存せんとするやうになると、利己の外に其利己から利他といふものが派生して來る。換言すれば利己の中から少しく其性を變じて利他となるものが出來る而してそれは利他の必要が出來て來るからである。箇様に考へれば間違ないと思ふが、併し箇様なことを言ふと反對は盛に起る。而して其反對は箇様である。假令互に共同卽ち社會的生存をなして居らぬ有機體相互の間にも、利他が絶無である抔と云ふことは決して言へぬ、利他は各有機體に利己と共に固有のものであるに相違ない。但し今姑く數歩を讓つて、假令十分な利他はないとしても少なくとも雌雄牝牡なる兩姓の相愛と云ふものは必ずあるに相違ない。して見れば利他が絶無なり抔とは決して言ひ得べからざるとである」といふ反對が出るに相違ない。否實際左様な反對が十分出て居るのである。けれどもそれに間違つて居る原始動物なる單細胞的有機體抔には雌雄牝牡の別は未だ生ぜぬのである、それ故箇様な有機體は無性的有機體と稱するのでなくして、箇様な有機體は兩性の交接に依つて其種卽ち子孫が增殖するのであつて、一個の體が次第々々に分裂してそれで增殖するのであるから、箇様な有機體に兩性の相愛抔と云ふとのあるべき理はない。兩性の相愛は右原始動物から進化して兩性が分れたものに至つて始めて生じたのである。併しそれとても孤立的生存にあつて生じたのではない。何故ならば、兩性の分れる動物が交接すると云ふとは既に共同的生存と認めてよろしいのである。假令唯一時の偶接にしても既に一時の共同的生存には相違ない、決して全くの孤立的生存とは云へない、それゆゑ雌雄の相愛は孤立的生存に利他があると云ふ證據にはならぬ。矢張共同的生存に至つて利他が生じたと云ふことになるのである。併し余は此兩性の相愛は殆ど利他と認め得べきものでないと思ふ。其譯は此相愛には利己的性質が尙十分明瞭に暴露して居るからである、決して他の利他と同じ性質のものでないと思ふ。右様の譯ゆゑ、假令孤立的生存の動物にあつても必ず利他のないものはない抔とは言ひ得られぬことと思はれるから到底孤立的生存に利他のあると云ふことを確證することは出來ないと思ふ。尤も共同的生存と云つても、必ずしも確然と永久的に共同するもののみを云ふのではない。動物にあつても生誕後暫時母が子を看

護養育するものも隨分あるが、是れも確かに共同的生存に相違ない。それゆゑ、母の子に對する利他と云ふものが生ずるのである。併し是れも母が子を自己と同體視するから起るのであれば、矢張利己の變性である。其他又動物にあつては或は仇敵を攻擊若くは防禦せんが爲め、或は求食又は防寒の爲め抔にて、唯一時的に集合共同して生存するものも多いことであつて、必ず其相互間に多少利他が生ずるのであるが、是亦矢張共同的生存に相違ないのである。それゆゑ共同的生存と云つたからとて決して永久的のものばかりを云ふのではない。吾々人間界にてさへも野蠻未開にあつては數部落が唯仇敵(人間又は動物の)の攻擊防禦等の爲めに、唯一時の共同的生存をなして其目的を遂げ了れば更に解散するやうなことも多いのである。左樣な譯であるから共同的生存と云つても全く一時的のものもあり、數年間のものもあり、永久的のものもあり、又其共同の甚だ脆弱なるものもあり、甚だ鞏固なものもあつて、決して一樣でないのであるから、全くの孤立的生存とすべきものは比較的甚だ少ないのであらう。而して苟くも共同のある以上は必ず多少の利他のないことはない。それゆゑ利己も亦利他と共にあらゆる動物が固有して居るのであると云ふ考が起るのであらうけれども、其實は唯共同的生存に依て始めて利他が利己から變性して派生するに違ひないのであると思ふ。

孤立的生存をなすものの相互間に利他のないと云ふことに就て、更に一の確證となるものがあると思はれる。それは外でもない此地球上に日々生誕する有機體の數と云ふものは實に夥しいことであるが、然るに其中で能く生長するものの數と云へば非常に少ないのである。生誕するものの千分一萬分一はおろか億分一も兆分一も生長することは出來ぬ。其最大多數は生長を遂ぐることが出來ずして死滅して仕舞ふのであるが、偖それは何故であるかと云へば、多くは其營養となるものが非常に不足する故である。有機體の營養となるものと云へば先づ光熱、空氣、水、土地は勿論、其他澤山ある。而して動物にあつては其食餌となるものが甚だ必要である。然るに是等の營養物が日々生誕する有機體に比して非常に少ないのである、到底日々生誕する有機體に生存を遂げさせることが出來ぬ、のみならず動物は必ず同一有機體たる動物若くは植物を食餌とせねば決して生存することが出來ぬのである。其上又有機體には其身心に於て優强なるものと劣弱なるものとの等差がある(余は此の如き現象を稱して自然造化に於ける三大矛盾と云ふのであるが、此事は「道德法律進化の理」の第三版に述べてある)からして、其結果が如何になるかと云へば

是れが爲めに有機界に生存の爲めの競爭といふものが起らねばならぬことになる。生存の爲めの競爭が起らねばならぬことになるといふと、又其結果は如何になるかと云へば、身心の優强なるものが勝を占めて劣弱なるものが敗を取らねばならぬことになる。そこで優强者は生存を保つことが出來るけれども、劣弱者は之に反して死滅せねばならぬことになるのであるが、地球上自然の經濟が此の如き有樣である以上、有機界の生存競爭が非常に劇烈にならねばならぬのは言ふ迄もないことである。然るに此の如く劇烈なる生存競爭のあるにも拘はらず、孤立的生存の有機體相互間に尙利他の行動があらうとは如何にしても考へられぬではない乎。中々以て利他どころのことではない、利己も利己も實に大なる利己卽ち純然たる害他利己が盛に行はれねばならぬ譯ではない乎。尤も箇樣な生存競爭が決して悉く意識的に起るのではない、却て多くは無意識的に起るのであるが、併し此事は孤立的有機體相互間に利己のみ行はれて、到底利他の行はれ難い一の確證になるのであらうと思ふ、決して疑ふべきことでないと思ふ。

然るに余が最も尊信する所のヘッケル氏さへも、利己と利他とは本來並存するものと認めて居るのは驚くことである。ヘッケル氏は希臘古代の大哲エムペドクレス氏が物質に對抗力卽ち相憎力と吸引力卽ち相愛力(Die repulsive hassende und attraktive oder liebende Kräfte)との二つの反對力の存するとを說いた主義に依據して、利己、利他も全く此二力の進化であると云ふ樣に說いて居るのであるが、余の考では此二力は蓋し生理的利己利他であらう(但見やうに依ては心理的とも言はれるであらう)而して此利他といふは彼の細胞的吸引力(Die cellulare Attraktion)と云ふ者であらう。ヘッケル氏も近世細胞心理學の著しき進步に依つて始めて二千餘年前のエムペドクレス氏の說が確められたと述べて居るが、併し余の考では單に孤立的の時には對抗力卽ち相憎力のみであつて、共同的になる時に始めて此對抗力卽ち相憎力から吸引力卽ち相愛力を派生するのではなからうかと思ふ。尤も是等のことは余の十分主張し得ることではない。ヘッケル氏は右の如く說きながら、又他の場處では利己と利他とは全く相反する性質を有するも、然かも利他は其實進步せる優尙なる利己なりと言ひ得べしと述べて居る、のみならず、又自己個體の維持と自己の種(子孫)の維持とを共に自己の維持と稱して居るのであるが、是れは頗る自家撞着ではなからう乎(ヘッケル氏の論は Die Welträtsel 第七版の第二百五十九第四百〇八頁等に出づ)。

因みに一寸こゝに述べねばならぬことがある露國の公爵クロポトキン氏は進化は競爭と相助との二作用に依つて起るものであると云ふことを主張して、動物の同種又は同社會中には競爭の外に相助と云ふことが盛に行はれて、爲めに進化が起るのであるのに、進化論者は此相助のことを忘れて、特に競爭のみで進化の起るやうに考へて居ると論じたとのことである。余は直にクロポトキン氏の著書を讀んだのではない、唯雜誌で其の大意を知たのみであるから精しいことは分らぬが、一應尤もに思はれる、併し余は決して此相助のことを忘れては居らぬ、余が共同的生存に利他の生ずると幷に其必要なことを說いたのは卽ち此相助のことを說いたのである、是れは、道德法律進化の理に論じた所で十分分るであらう、それであるから共同的生存に相助と云ふことがなかつたならば隨て進化のないと云ふことも固より明瞭であるが、併し決して特に相助が必要であるのではない、競爭も亦或る程度迄は甚だ必要である、否若しも競爭がなかつたならば、一の進化もないに違ひない、此事に就ても前述の著書の「國家的社會內の兩階級間（中略）に於ける自利競爭卽ち權力競爭の自然淘汰として道德法律の進步發達する所以」と題した處（第三版の第二百三十五頁）に委しく論じておいた

一寸こゝに其大意を摘んで見れば、凡そ國家的社會の漸く進步し始めんとする時分には、君主や貴族や男子の權力が頗る強大で、平民や婦人は之が爲めに全く壓制を受けたのであるが、是は今日より考へて見れば甚だ野蠻的不道德的に見えるけれども、其頃には左樣になければ家族の土臺も國家の土臺も立たなんだのである。卽ち其樣なことで、家族の制も國家の制も、次第に備はるやうになつたのである。然るに優等人種になつては其後に至り漸々模樣がかはつて、平民や婦人が次第に知識を得るやうになつたから、最早唯々諾々と負けては居らぬで、自己の權力を張らうとするやうになつた、卽ち次第に君主や家族や男子に對抗して自己の權利を獲得するやうになり、其極遂に今日の進步を見ることとなつたのである。然るに劣等人種にあつては今日も尙古代のやうに君主や貴族や男子が權力を握つて、平民や婦人は壓制されて居るのであつて爲めに進步がないのである。是れ皆競爭の有無に原因するのであるして見れば國家の內部に於ても或程度迄の競爭は甚だ必要で、此競爭がなければ到底進步の望はないのである

以上は自然界を例證に引いて、人間界にあつても亦孤立的卽ち獨立的國家の相互間には國家內に於けると同樣に道德のあるべき筈のものでないと云ふことを證明

した積りである。が併し唯互に和親交通する國家と國家との間柄は既に未完成大社會となつて、殆ど完成社會卽ち國家に似たやうなものになつて居るから、其間柄には多少の道德の必要になるのは當然であるけれども、其道德の性質と程度とが大に相違して居ることは前述した通りである。但し一寸こゝに附け加へて述べておかねばならぬことがある、それは外でもない利地と道德とのことである。余の述べ來つた所では利他卽ち道德と云ふやうに聞えるかもしらぬけれども、利他と道德とは同じであるとは云はれぬ、必ず其間に著しい相違がある。利他と云ふのは前述の通り心理的のものばかりではない生理的のものもある。是れが道德抔と云へぬことは勿論であるが、又心理的利他にしてもそれを直に道德とは云へない。利他と云ふのは主觀的個人的のものであり、道德と云ふのは客觀的社會的のものである。利己利他と云ふやうなことは個人の心に存することであるけれども、道德といふのは社會の治安の必要に應じて生じ來るものであると云ふ相違のあるのは勿論のこと、又利他のみが道德上必要なのではない、利己も亦必要なものである。他を害せずして自己を保護する利己が道德上甚だ必要であるのみならず、道德未進の未開社會では害他的利己さへも多少必要である時代があつた。卽ち前述した通り國家の漸く進步せんとする時代に、君主や貴族や男子が權力を握つて、平民や婦人を壓制した爲めに國家の土臺家族の土臺が次第に立つやうになつたと云ふのは其證據である。

然るに形而上學派や直覺學派は(或は功利學派も亦)概して余の述べたやうな主義に反對することで、殆ど贊同する人はなからうと思ふのであるが、余の所見では個樣な學者は進化と云ふことを知らぬのであらう、否全く知らぬのではないが、唯形體上の進化を知つて心性上の進化と云ふことを全く知らぬのであると思ふ。併し凡そ宇宙間に起る現象は形體上、心性上の差別なく、一も進化の自然法に依らぬ者はないのであると云ふことを理解せねばならぬ。して見れば利他と云ふものも道德と云ふものも、亦此進化の自然法を脫することは決して出來ぬ。必ず此進化の自然法に依て進化するものであることは勿論である。然るに右樣な學者は左樣な道理を知らぬから種々の臆說妄談を恣にするのである。右樣な學者は利他や道德は本來吾々人間に具つて居るものであると云ふことを主張するのであるが、本來人間に具つたとは何と云ふことである乎。人間と云ふものは本來人間でない、原始の最下等動物から漸々に進化して人間と云ふものになつたのであるが、其人間と云ふ

者になつた時分に如何やうな手續で利他や道德が人間に具つたのである乎。人間が始めて出來た時に其祖先卽ち他の動物から如何やうなものを遺傳したの乎、或は何物をも遺傳せずに人間には新に人間たる本性が生じたのである乎此點が大に研究すべき所ではないか。子孫が祖先から何物も遺傳せずに新に特別の性質を得ると云ふことが出來るであらう乎。是等のことは決して學者の等閑にすべき問題ではなからうと思ふ。然るに右等の學者は毫も簡樣な點に注意せずして、唯漠然と人間に具つて居ると說くのみである。若しも進化主義を信ぜずして萬物特造說を信じて居る學者ならば、余は簡樣な說に對して何も議論を向ける考はないが、併し進化の眞理なることは多少信じて居るにも拘はらず、妄に簡樣な說を主張する學者に對しては余は十分論ぜねばならぬと思ふのである。井上哲次郎博士は余の益友で吾が邦現時の碩學であるが、併し其主義は右申すが如きものであると思ふから、余は博士を右等學者の代表者と看做して之に對して論じやうと思ふ。併し決して博士の議論のみに對するわけではない、總て右等の學者の議論に對するのであるけれども、姑く博士の議論に對して論ずれば總てに對する論になると思ふ。

博士は、畏軒論文「哲學叢書」「倫理と宗敎との關係」等其他の書に於て、倫理に就て論說された所が多いのであるが、博士は直覺主義に依り、倫理を以て大我卽ち眞我の聲又は先天內容の聲であると言つて熱心に主張されて居る。卽ち倫理は實在より發動するものであると言つて熱心に主張されて居る。卽ち倫理は實在より發動するものであると云ふの意であるが、余の考では凡そ宇宙間何物と雖何事と雖實在より發動せぬものはなからうと思ふ。卽ち宇宙の諸現象は何物何事によらず凡て實在の發現であらうと思ふ。善惡、邪正、美醜、强弱、大小、多寡、方圓、凹凸、其他何物か何事か實在より發動せざるもののあるべき、決して特に善と正とが實在より發動するにあらず、惡と邪とも亦實在より發動するのである。特に忠孝仁義が實在より發動するにあらず不忠不孝、不仁不義も亦實在より發動するのである。實在が善惡邪正、美醜、强弱、大小、多寡、方圓、凹凸の差別を超絕するものなるは勿論なれども、然かも又是等の差別を產出する所の源泉であることも勿論である。若しも實在が特に正善の源泉であつて、邪惡の源泉は別に存するとするならば、實在は旣に相對にして絕對とは云ひ得られぬではない乎。果して然らば遂に博士の本來の主義とは全く矛盾するものとなるではなからう乎。否實在の意義は全く滅するではなからう乎。

余は前述の如く利他及び道德を以て全く孤立的生存に不必要にして、特に共同的

生存にのみ必要なるものとなし、而して此理由なるが故に利他(生理的若くは心理的)及び道德は全く進化に依て漸次に生じ來つたものと認めるのであるから、博士及び博士と意見を同じくする諸學者の說には正反對となるのであるが、余の說は卽ち因果的宇宙觀 (Causale Weltanschauung) と云ふ主義であつて、博士の說は目的的宇宙觀 (Teleologische Weltanschauung) と云ふ主義になるのである。之を詳述して見れば、博士の說は宇宙の現象は本來一の目的とする所があつて、其目的とする所から出て來るのであると云ふことになるのであるが、余の說はそれに反して宇宙の現象は唯已むを得ざる所の原因結果の鏈鎖のみで起るのであると云ふことになるのである。苟くも進化主義を是認する以上は博士の說は決して信用の出來ぬことになるのである。所が博士は決して進化主義を否認する人でない、然るに其說く所が此の如く進化主義に反して萬物特造說に類し、就中吾々人間を本來一種の超絕的生物とするに至つては實に自家撞着と云はざるを得ぬのである。但し博士は斯く吾々人間を本來一種の超絕的生物となすなれども、然かも其實博士の議論は特に開化人民の外には、あてはまらぬものである。凡そ吾々人間を超絕的生物とする學者は吾々人間には動物と違ひ良心と云ふものがあつて、自然に善惡邪正を辨識するの明がある抔と云ふけれども、それは唯開化人民に就てのみ言ふべきことで、今日尙高等猿猴に類似して居るやうな野蠻人民に、あてはまることでない。して見れば良心の狀況に應じて人間の性情の變化することを云ふ)とに依て漸々徐々に獲得して來たものであるといふことが分るのである。卽ち良心といふものも倫理といふものも漸々徐々に進化して來たものに外ならぬと云ふことが分るのである。

尙こゝに博士及び博士と同一主義を有する學者に質したいことがある。博士等が道德なるものを以て本來吾々人間に具はつたものであるとするならば、換言すれば博士等が道德なるものを以て全世界人類の關係に於て當然必要なりとするならば、博士等は古來吾々人間界に戰爭的爭奪的生存競爭の絕間なく起りたることを痛く嘆息せらるるならん原始人間以來、全世界の人間が互に利他的に道德的に平和的に交際せなんだことを痛く嘆息せらるるならんそは一應尤なるやうなれども、併し若しも太初以來、博士等の希望通りに全く平和的道德的交際のみありたりと假定したならば、今日迄の人間世界は如何なる狀況に進步したるならん乎此事に就ては特に博士等の一考を煩したいと思ふのである。余の考ふる所では若し

左樣に太初以來、太平無事を極めたならば恐らく太初以來今日迄殆ど一の進歩も開化もなくして今日尙太初の通り野蠻未開、殆ど猿猴社會と同樣で止まつて居るであらうと思ふ。進歩開明を得る手段は恐らく、なかつたであらうと信ずるのである。一般有機界の進化の重もなる條件が生存競爭であると云ふことに疑ひのない以上は、吾々人間界の進化に就ても其重もなる條件は矢張生存競爭、就中所謂不德義的生存競爭に外ならぬと云ふことは甚だ解し易い道理と思ふ。而して今日の開明世界でこそ平和的卽ち德義的生存競爭と云ふものゝあるなれど、古代の未開世界にあつては爭奪的卽ち不義的生存競爭が重もなことであつたのは明かなことである。果して然りとすれば古代にあつては此不德義的生存競爭が進歩開明の重もなる條件になつたと考へねばならぬと思ふ。是れは歷史上甚だ明かなことであると信ずるのである。彼の絕對的理性命令なるとを主張した大哲カント氏さへも其著 Anthropologie in pragmatische Hinsicht に「凡そ人は互に不和を生ずべき天性を有す、而して此天性は人類界の開明進歩を促すべき手段となるものなり。蓋し國の內外に於ける戰爭は、人をして野蠻を去つて文明に向はしむるに必要なるものなり云々」と論じて居る。して見れは畢竟人間世界の進歩開明と全く矛盾抵觸するものではない乎、甚だ無理な注文ではない乎と思ふ。

意外に長演說となつたことであるに、諸君が其間厭倦もなく聽聞されたのは余の謹謝する所である。就ては此演說に對して諸君の高評に接せんことは余の深く希望することである。

追記　當日幸に井上博士が出席されて余の演說後に反對說を述べられたのは余の大に謝する所である。併し時間の許さぬため詳細に述べられなんだのは甚だ遺憾のことであれば、他日尙十分に論辯教示せられんことを乞ふ。（明治三十七年十月倫理講演集）

第九　一元的倫理

諸君、一元的倫理、是は固より諸君が大抵御承知であらうと思ふ、一元主義、二元主義といふ卽ち獨逸語で言へばモニズムス、ズアリズムス、是は重に哲學で言ふ言葉である、卽ち一元主義は此世界の原理といふものは一つであると云ひ、二元主義は世界の原理は二つであると云ふのである。さうして其二つといふものは互に反對し

た原理であるものである。人に依つて說方も色々違ふから一つに斯う云ふものであるといふ事は言へない、又古今に依つて此說き方も違つて居る、極く古い所を言へば宗敎の方で、昔のアラビヤ、ペルシヤ、其外の宗敎は重もに二元主義であつた、その二元主義は日本にもあるです。日本の神代の神樣に直日神（ナホビノカミ）、禍津日神（マガツビノカミ）といふのがある。それから和魂（ニギミタマ）、荒魂（アラミタマ）といふことがある。直日神といふのは正しい神、禍津日神といふのは惡い神、卽ち善惡の神といふ神樣が二通りある。和魂、荒魂は是は卽ち人間が和かな魂を禀けたり或は荒い魂を禀けるといふやうな譯である。斯ふ云ふ工合に善と惡の二ッが世界の原理で幷存して居る、卽ち善惡の神樣があつて此世界を支配して居ると云ふことである。それから又ペルシヤの古いゾロアステル敎卽ち火敎には光明の神と暗黑の神とがある。光明の神といふ方は善い神、暗黑の神は惡い神である。此二つの善惡の神が世界を支配して居る。それから印度の昔にも、是は佛敎より前、波羅門の古い所でも世界を保護する神と世界を破壞する神、卽ちそれが善惡の神で、其二通りの神がある。それからエジプトにも矢張善神と惡神とがある。又ヘブリユーにも二通りの神樣がある。それのみならず耶蘇敎でも唯一眞神卽ちゴットといふ一つの神、是は全智全能で、何でも此一つの神の力で出來ぬことは無いといふ位な、卽ち世界を造り萬物を作つたといふやうな神樣であるが、其の外に魔といふものがある。神樣を耶魔する者は魔である。それはモウ耶蘇敎のやうな開げた宗敎には殆ど可笑しいことであるけれども、前世紀の初頭迄はさう云ふ事を歐羅巴では信じて居た人が隨分ある。さう云ふ譯に善い神樣と惡い神樣との二つあつて世界を支配する、是が昔の開けぬ世の中の二元的の世界觀といふものである。それはさう思ふ譯である。昔の開けぬ時には世の中に善い事もあるけれ共、誠に惡い事が多い、善い人間もあるが惡人もある。それから人に福ひすることも澤山ある、けれ共亦人に禍ひする天地間の現象も澤山ある。それはどうしても善い神ばかりの仕業とは思はれない、それであるから善惡の神があつて善い事を與へる、或は惡い事を與へるといふやうに考へたのである。さう云ふ風に考へるのは實際開けぬ時には、ありさうなことである。併ながら今言つたやうな宗敎上善惡の神といふことは、それは少し開けて來たら信ずる者は自然に減つて仕舞ふ、極く智慧の無い人は今でも信じて居るけれ共、智慧の開けるに隨つてさう云ふ二元主義といふものは段々に絕えて來る道理である。今日はマア餘程絕えて居るけれ共、又外の形狀に變つた二元主義が澤山ある、一元主義より二元主義が今日でも多い。それは卽

ち哲學にも二元主義の方が多い、二元的世界觀といふ方が一元的世界觀より多い。今日の二元主義といふのはどう云ふ事だと言ふと、天地間に起る現象を說くのに二通りある。卽ち天地間の現象といふものは唯原因結果で出來るものである、原因といふものがあつてそれから結果が起る、其結果がまたそれが原因になつて後との結果が起るといふやうに因果的に說く。原因結果といふものが始終繋がつて行くのである、と言ふのは是は一元的といふ方である、何でも天地間の現象といふものは有形上の事でも無形上のことでも原因と結果の鎖で出來て來るのである、餘儀ない原因があつて餘儀ない結果が起るのである。それを他の言葉で言ふと自然的と言ふ、其自然と言ふのは是は當然に出來べき道理から出來て來るといふことである、卽ち自然的といふことは原因結果の鎖で段々出來て來る現象が自然的のことである、さう云ふやうに言へばそれは一元的の世界觀であるけれ共、外に二元的主義がある。それは卽ち此原因結果の鎖で出來て來ることも世の中の現象にあるが、併し世の中の現象はそればかりで無い、まだ他の道理から出て來る現象もある、そう云ふやうに言ふからして卽ち二元になつて來るのである。それは自然的といふことに對して超自然的といふ、又獨逸語で之を言ふと始の自然的といふのはナツーリヒで、超自然的といふ方はユーベルナツールリヒである。是は自然の力より外の力がある、自然で出來る物もあるが其外にモウ一つ力があるといふ方になるから二通りのことになつて來る。さうして大抵今日の二元的を信ずる學者の言ふ所では世界の無機體は丸で是れは自然力に從ふもの卽ち自然的のものである。因と果で現象が出て來るものであるけれ共、有機體の方になると自然力の支配をも受けるけれ共、又或は超自然力の方の支配をも受ける。超自然力といふものは是は一つ不可思議な力、卽ち神の力とか何か人間では測られない力、神秘的の力である。有機體の方になると自然力に從ふともあり、又事に依ると超自然力といふ方の支配を受けることもあるといふやうに說く。斯く說き方は色々違つて居る又モウ一つの說き方は人間を除いて他の萬物は總て自然力の支配を受ける、それであるから因と果との結果ばかりであるけれ共、人間といふ者は別段なものであるから是は自然力の支配を受ける外に又超自然力といふものの支配を受ける、さう云ふ說もある。人間は他の物より貴い者であるから是は自然力から支配せらるゝ外に神秘的の力卽ち自然を超えた力で支配されることがあるといふやうに說く。それから又一說には肉體は自然力で支配されるけれ共、精神の方は超自然力で支配さ

れる。肉體には不可思議な力は働かないけれ共、精神の方には不可思議な力が働いて支配をする、斯う云ふ說き樣もある。卽ち今日の哲學の中の二元主義はさう云ふ鹽梅に皆說いて居るのである、それから此二元說から靈魂不滅說といふものが出て來る。身體は死んで仕舞つても靈魂丈けは殘るものである。靈魂は身體を離れてさうして滅することが無い、身體は自然力で支配されるけれ共、精神の方は超自然力卽ち不可思議な力で支配されるから靈魂は死なぬ、身體は死んでも靈魂は死なぬ、靈魂は身體を離れて尙ほ存在するといふ說がある。此れが今日の學問上の二元說である。以前の宗敎上の善惡の神を立つるといふやうなのよりは進んで來て居る、神といふやうなものが善と惡との二ッあることを言ふのでは無いけれ共、世界を支配する力に二通りあるといふのである。さう云ふ二元論は今日の哲學者の間に於ても隨分多いのである、一元論より多い。二元論の說き方が其の人に依つて違つて居るから二元論といふものは斯う云ふものであると狹く言ふことは出來ぬ。色々に說き方は違ふけれども併し一元論といふものより學者の數で言へば卽ち二元論を信ずる方の人が多い。二元論といふ方は今言ふやうな譯であるから其の身體と精神といふものを別にして仕舞ふのである。身體は丸で自然力で是れは原因結果の鎖で行くけれ共、精神の方はどうもさう云ふ者で無いどう云ふ物であるといふと、それは分らぬ、一つ不可思議の力があつて支配をするといふから神秘的の者になつて仕舞ふ。漸々にさう云ふ二元論は減じて來たけれ共、まだ今日の哲學者でも其方が多いのは今日の有樣である。カントといふ哲學者は諸君も御承知の通りに、まあ近代の不世出の哲學者で、カントに及ぶ人は無いといふ位なものであるけれ共、矢張り二元論者である。さうしてカントの二元論といふものは今日も矢張り信用されて居るのである。カントは肉體と精神といふものを別な物であると說いてゐる。又肉體の世界と精神の世界といふものは別である、肉體は卽ち自然力で支配されてそれは不可思議なことはない、肉體の方は少しも不可思議なことは無く解することも出來るけれ共、精神の方に至ると神秘力で支配されて居るから分らぬことがある。そうして自然力の方の道理で推すことの出來ぬことがあるといふのがカントの說である。カントの說に人間を肉體的と精神的といふやうに分けて肉體的の人間として見る時には、人間といふ者は實に利己的のものである。是は自分勝手なことをする、惡い事をする、卽ち不道德的のものである。併ながら精神的の側に重もに目を着けて見る時には極く利他的のものであらう、自分の利益を

失つても他人の利益を圖るべきものである、それが極く道德的のものである。さう云ふやうにカントは說いて居るのである。それで人間といふ者は他の萬物とは丸で違つて居る、他の動物などになると精神的の側は殆ど無い、是は肉體的のものであるから欲を恣まにするばかりのことである。併し人間は兩方に屬したものであるから、肉體的の側を見ると不道德的の者であるけれ共、精神的の側を見ると是は道德的のものである、さう云ふやうにカントは說いて居るのである。さう云ふやうに說くからカントの道德といふものは、カントの言ふ所の倫理といふものは、是は極く先天的のもので、人間が本來持つて居る者で、人間の經驗に出たものでは無い。さう云ふことで、丸で人間を二つに分けたやうな議論を立てて居る、

カントの說に從つて議論を立つる所の學者は固より多い。又カントを全く信じない學者にしても二元の趣意をさう云ふやうに說いて居る人は澤山ある、ヘッゲルといふ人は諸君大抵御承知であるかも知れませぬが、是は動物學者でさうして進化學に付て餘程功勞のある人で、今まだ壯んな人で、彼のダーヴィンの說を擴めた人である。其人は極くの一元主義の人であつて、其人の言ふのに今日の有名な學者で若い時分には丸で一元論を唱へ二元論を駁した人であつて、晩年に至つてそれが二元主義になつて仕舞つた人が大分ある、それが分らない。さう云ふ人の言ふのには若い時にはまだ學問が足らなかつたのであるから、一元論で總ての事が說けると思つたけれ共、段々學問が遂くなつて見ると一元論ばかりで說けない、一元論で說けぬから自然力ばかりが世界を支配して居ると言へない考が出て來た、それで不可思議の力といふものも此世界を支配するといふ考になつて來たのであると、それはさう云ふ學者が辯護をするのであるけれども、ヘッゲルは自分の考でさうは思はない、それは若い時には精神が誠に旺んであつて、自分の研究したことを充分に言つたけれ共、さう云ふ人達が年を取つて弱つて來たので、さう云ふ妙な間違つた考になつて仕舞つて、初め一元論で通した人が、又不可思議力といふやうなものもあるといふやうになつたのであらうと思はれると、ヘッゲルは言つて居る、それから是はヘッゲルの言つたのでは無い、もつと前に有名なニュートンといふ人はあれ程の學者であるけれども、七十餘になつて、死ぬ前には丸で違つて來た。大變にゴッドのことを言つてさうしてバイブルにあるやうなことを信仰して居るやうな臨梅に人に話すやうになつて來た始めはさう云ふ人ではなかつたといふことがあるです。さう云ふ所で考へて見るとヘッゲルが言つたやうに、どうも若い時分は精神

が強い、それであるから眞直に進んで行くけれ共、年を取ると弱つて來るから精神も弱くなつて始めの說を貫かぬやうな事が出來るのであらうかと私も考へる。それが歐羅巴人はどうもさう成り易いであらうと思ふ。それは耶蘇敎に感染して居ることといふものが實に深いものである。充分な學者であつて例へば天文學とか物理學とか化學とかいふやうな學者であつては自分の研究することが總て自然力的の事である、それから推して見ると、どうしても神樣の力、不可思議の力といふやうなことは信用が出來ぬ譯であるけれども、矢張りさう云ふことも信用する。皆がさうでは無いけれ共、信用する人が多い。それは自分が常に信仰する科學の主義とは矛盾せねばならぬ、前後丸で矛盾することを兩方信仰して居るものがある。其人ばかりが耶蘇敎に感染したといふ譯では無い、先祖代々からである。日本で佛敎を信じて居るといふやうな淺いことでは無い。それであるから若い時に盛んにそれに反對した人が、少し身體が弱つて來ると精神も弱くなる、精神が弱るとさう云ふやうに舊に戻つて仕舞ふやうな事があるでもあらうかと思はれる、餘程可笑しいことである。近頃死んだ獨逸の有名な醫學者ウヰルヒョー、是はベルリン大學の大學者で、さうして八十歲以上になつて二三年前に死んだ人である。此人が若い時に書いたものは丸で一元的で、總ての世界現象は自然力ばかりで行くといふ風に書いて居る。それが後の著述には自然力の支配外で卽ち神秘力といふやうな不可思議な力もあつて支配するといふ臨梅に書いてある、私は其本は讀まぬがヘッケルが言つて居る。

それから又ヂュブア、レーモンといふ名高い生理學者で心理學にも通じて居る人が、世界の七ッの謎といふ本を書いた、卽ち世界七不思議といふやうなものである、それは今まで分つて居らぬ事でも、學問がもう少し進んだら分らうと思ふ事があるけれ共、徹頭徹尾分らぬことが其中にある。七ッの不思議の中の三ッばかりはヂュブア、レーモンは徹頭徹尾わからぬ、それは卽ち眞に不可思議の力で出來ることであると書いて居る。此人も其以前壯年の時に書いた著述で見ると眞の一元論者である、けれ共、晩年に至つて二元論者になつて仕舞つた。不可思議の力を信用するやうになつて仕舞つた。それから又近頃の人でヴントといふ人、是は今生きて居る、此人は元は生理學者であるけれども專ら心理學を研究し、倫理學のことも研究し今では重もに倫理學者と言はれる人である、此人も始めの主義と後の主義と違つた、始めは眞に一元主義であつたが、近頃の書物では一元主義ばかりでは迚もいか

ぬ、どうしても是は徹頭徹尾、人間の力に分らぬものがあるのである、不可思議の力で出來るものであるのであるといふことを說き出して來た、それをヘッゲルは不思議に思うて、身體が弱り隨て精神が弱つて來たから、さうなつたのであらう、左もなければ、さう云ふ道理は無い譯であると評して居るのであります。

右は一體の一元二元の論を申したのでありますが、今度は此倫理の事に付て御話をしやうと思ふ。先刻カントに付て申した、卽ち今の人間を二つの側から見て肉體的の人間とすれば不道德なものである、精神的の人間といふものは道德的のものであると言つた。それで道德といふことは自然力で支配される所では立たぬ、人間といふものは理性(フェルヌンフト)と云ふものを持つて居るから、それで道德的になるのである、さう云ふと二元主義になつて來る。倫理上の二元主義がカントに於ては明かである、其他に澤山さう云ふ主義の人がある。そこでヘッゲルは倫理學者では無いが、倫理學者の事に付て言ふのに、今日一元的の倫理學者と言へば誠に僅かな者である。倫理學者といふ者は、概して二元主義である。卽ち不可思議な力、超自然的の力を信仰する者であるが、四五人位は一元主義の人がある、それは有名なスペンサーである。それから獨逸の學者でカルネリーといふ人、ヘフヂンといふ人、それに先刻申したヴントといふ人、ヴントも此倫理の方では一元主義の中に這入つて居る。さう云ふ二三の人が一元主義の人である。併しあとの學者は大抵二元主義である。私が今斯う云ふ人の說を調べて見ても先づスペンサーだのカルネリーだのヴント抔といふやうな人は一元的の倫理說を說く人と言つて宜からう。其他の人になると卽ち不可思議力を說く人が多いのであるから、どうしても二元主義の人である。併し私が今日一元的倫理といふものを說かうといふのはスペンサーやカルネリーの說き方とは違ふ、其論點が違ふけれども、自分の說も一元的倫理と見て說くのである。そこで一體の倫理學者といふものは、利己と利他といふ二つのものを人間は本來二ッながら持つて居るのである。さう云ふ矛盾した力が人間に具はつて居る譯であると說く。專ら自分の爲めを謀るといふ心と、專ら他人の爲めを謀るといふ心と、此利己、利他の二つを天然に具へて居るものである。固有して居るものであると說く。大抵の學者はまあそれである。それに反する學者もあるけれ共、併しそれは誠に少くして利己心と利他心といふものを本來二ッながら持つて居るものである、と說く主義を私は二元的倫理と名を付ける。さうして私の執る所は卽ち利他といふものは本來あるものでは無くして、利己から出て來て利他といふ

ことになつたのである。利己といふものは何時までも利己で止らぬ、利己から出て利他といふものが出來たのである。けれ共それは利他といふものになつて仕舞つて、丸で利己に緣を持つて居らぬものでは無い。利他になつても利己といふものの性質はちやんと何時までも保存して居る。そこで唯單純に利己といふことであるのは是は不道德的のことになる。それから利己から利他が出て來て、利他といふものになつた方の利己、それも利己の性質を持つて居るから又利己と言ふのであるが、其利己は道德的の利己になるのである、其始めは一つの利己である、利他といふものは元來あるべきもので無い、此の如く言ふと即ちそれが一元的倫理と言ふものであると私は信ずるので、之を一元的倫理と私の說では言ふのである。

けれ共是は、他の學者が是まで議論をして居るのは、獨り是は人間ばかりに付て論じて居るのである。人間ばかりに付て論ずれば、人間は生れながらに利他を持つて居るのである。併し人間といふ者は進化したものであつて、始めから人間であるのでは無い、下等の動物から進化して人間といふ物が出來たといふ進化說を信用する以上は、人間ばかりで利己や利他の事を研究するといふことは出來ないと私は考へる。人間ばかりで研究して、他の動物と比較すること無くして見たならば、それは人間には生れながらに利他といふ者は持つて居る、小供の時に利他の仕事はしないけれ共、それは小供の腦にちやんと具はつてそれが成長すれば出て來るのが當然である。けれ共人間ばかりで研究するのは研究の仕方が惡いと私は思ふ。さう云ふ譯に間違つた研究をすれば是は二元主義の方が宜いやうである。利他も利己も二つながら人間が持つて居ると言つても宜いけれ共、人間には動物の先祖といふものがあつて、それから人間といふ子孫が出來た。例令へば醫者が人の病氣の治療をすると言つた所が、本當に意を用ゐて充分に其人の病を診斷しやうといふには遺傳病があるかどうかといふことを詮索しなければならぬ、兩親はどうであるか、尙ほ分るならば祖父祖母まで詮索せぬばならぬ、さうせねば本當のことは分るもので無い、それと同じことである。今日人間が下等の動物から進化したものであるといふのに、其祖先の方は詮索せずに人間ばかりを詮索してはどうしても間違つたことになるより仕方が無い。病氣の遺傳なることを知らずに當人に初めて起つた病氣と思つて治療するのと、遺傳病であるといふことが分つて治療するのとは違ふであらうと思ふ、さう云ふことであるから、先祖の事を考へずに人間ばかりで議論すると大變間違つて來る。けれ共通常の學者は唯人間ばかりで議論をして居

る、そこで人間の祖先に溯つて研究して見ると其利己心より外に何も無いと私は信ずる、どう云ふ譯であるかといふと、是は有機體卽ち動物、植物といふ物が自分を維持して行き發展して行く、卽ち自分を維持するといふのは其儘に保つて行くと發展といふのはそれから進んで自分の力を展べて行くのである。そう云ふ維持して行く力と發展して行く力といふものを必ず持つて居るに相違ないのである。是は植物にも無論ある、それから動物にわつても下等な物になつたらさう云ふ意識は無いのである、けれ共生理的に於ても心理的に於ても自分の利益を謀るといふことはチャンとやつて居るのである。それは人間の心に考へたやうに意識的にはなつて居らぬけれ共、一つ生活といふことがあつた上はさう云ふ維持し發展して行く力を持つて居るのである。そこで子孫を繁殖さして行くといふのも發展の一つである、卽ち人間なら人間、動物なら動物が自分の種屬の子孫を繁殖させて行くといふことは、是は意識的にさう考へて居らぬでもさういふ動向はあるのである。此の自己の維持と發展といふことを約して言ふと自利といふことになる、自分の利益、さう云ふ精神は持つて居るものである、それは卽ち根本動向、獨逸語で云へばグルンドトリーブといふもので、此精神は植物も動物も自分に意識がなくても持つて居るものである、是は自分の利益を謀るのである、そこで人間に至るまで持つて居る、其度合は違ふのであるけれ共、其動向といふものは生活のある物は必ず持つて居る、それは總ての有機物が持つて居る、さう云ふ譯であるから、極く下等の物に在つては自分の利益より外に他の利益を謀るといふことは、どうしてもないのである、利己心といふものは卽ち根本動向から出て來るのである、其利己心は上から下まで持つて居るので、殊に下等の物に至つては他の者を利するといふ心のあるといふ事は決して有りさうに思はれない、それについては大分他の科學の力を藉らねばならぬことであるけれ共、有機體の極く始めは細胞が寄つて出來て居るもので無くして、單細胞、細胞が唯一つの物でそれが一つの有機體といふものである、雌雄牝牡の兩性も無い、それだから生殖といふことはない、其一つの物が段々分裂して殖えるものである、それが卽ち繁殖といふのである、さうして見ると、それに雌雄牝牡の互に愛するといふ心のあるべきことはない、それから親子も無い、段々割れて行くから子と言つても宜いやうなものであるが、唯割れるばかりで生殖するといふ譯では無い、さう云ふ物に親子の關係がある譯が無い、それで親子といふことが無く、雌雄兩性の愛といふものもない、自分の

維持發展をする根本動向は、是は自分の意識には無くしても兎に角持つて居るに違ひないけれ共外の仲間までに利益を與へて行かうといふ事に至つてはあらうとは、思はれない。もう少し進んで雌雄の出來た動物は生殖して子が生れる、生れるけれ共まだ始めは卵生で卵で生むのである、卵で生むものはどうも親子といふことは分りもしない、産み附けた卵が孵化して來る、それは親子といふことは分らぬから、親の愛といふことがあらうとは思はれない。又雌と雄の互の愛といふものは、是もどうも利他とすべき程のものとは思はれない、これは生殖慾即ち兩性慾といふもので眞に利己的の性質を持つて居るものである。高等な人間で男女の間相愛すると言つても眞の利己的性質が十分曝露して居る程のものである、それゆゑ男女の愛が全く利他であるといふことは言へない位のものである、眞に男女の慾といふものから出て來るのであるから實に利己的の性質を持つて居るのである、況て卵を生むやうな下等の動物に至つては其卵を拵へた所の雌と雄の間には唯生殖慾があるのみで、眞に利他と名づけるやうなことがあらうとは思はれない。併しそれからもう少し進んだものでは卵を生んでも親の身體で孵化させるといふことをせねば子にならぬのもある、即ち今日家畜になつて居る鷄の類などはさうである、是はマア自然に卵は孵つて行かない、今日では器機でも出來るけれ共、當り前は親が暖めて孵る。そこで孵すと其の子を愛する心が出て來るものと見える。それゆゑ孵化した當分の間といふものは隨分親が子の世話をするのである。そこで初て利他といふことが少し見えて來る。けれ共私はそれも矢張り利己から出るものと見て居る、即ち是は自分の子であるといふことは分るかどうか知らぬが、自分が何しろ暖めて孵化したものであるから自分と同樣に感ずる、即ち同感の情といふものが親鳥にある、それだから他のものとは思はれない、自分の身體と同じやうに思ふ、そこでそれを愛する、愛するけれ共、それは誠に數月間か數日間早いのは數日位でもう一本立、獨立に生活して行けば親子も何も分らぬやうになる、唯一時の事である、けれ共利他の始りは其處に在るであらうと思ふ、が本當の利他と言へるのは、どうしても社會的に生活するやうになつて來てそこで初て起つて來る。社會的生活が始まると、どうしても純粹の利己ばかりではいけない、どうしても他の利益を互に謀るといふことが必要になつて來る。それから始終一つに寄つて一つの目的で働いて行くのであるから、どうしてもさうなつて來ねばならぬ。さうして互の情愛も深くなつて來る。唯孤立して居らるゝものでは無い、一つ社會を拵へて社會的に生

活して卽ち其社會を保つ、一方に於ては他の社會に對して己の社會を保つのである。人間社會の出來る始めを見ると必ず互に戰ふ、其戰ふ時分にこつちも他に負けぬやうに社會を作り、向ふでも社會が出來る、又向ふの社會に對して負けぬのみならず、それをこつちが征して行かうと云ふので、そこで社會的生存が起る、智慧の進んだ人間が起つて來ねばならぬ、又起つて來たが併し是は人間に至つて始めて起つたのでは無い、高等動物には既に社會的生活が大分起り掛つて居る、人間に至つて餘程整つて來たのである。けれ共人間でも野蠻の社會といふものは誠に脆いものであるが、それが進歩するに隨つて堅い社會になつて今日の一つの國家といふものが出來るやうになつた、さうなるに至つて利己といふものが必ず利他といふものを生み出さねばならぬことになつて來た、それでなければ社會といふ者は立たない。そこで是は自然淘汰で左樣になつたのである、互に利他が行はれて行く社會は利他の行はれぬ社會よりも強い、互に爭ふ時に一致して居る社會は一致しない社會よりも強い、さう云ふ社會は何時でも勝つ、さう云ふ自然淘汰からして社會の中に利他心といふものが盛んに進歩するやうになつて來た、利他心の丸るで乏しい社會は持てるもので無いから社會は潰れて仕舞ふ、それであるからどうしても社會的の生存がなければ利他といふことは生じて來ない。けれ共其利他といふものは利己から出た、卽ち自分の維持發展を求める力、自利を求める根本動向といふものが下等動物にあつて、さうして高等動物にもそれを承けて來て益々其動向が強くなつて來た、互に自分の利益を求めやうとすると同時に、互の間に又他人の利益を謀るといふやうにして行かねば、つまり自分の利益といふものは得られない、幾ら強い者にしても幾ら智慧が優れて居る者にしても、それが社會に在つて自分の我儘一方を働いて行かうと言へば迚も外から默つては居られない、充分外の者に優れて腕力もあり才力もある人であつても、自分の私利ばかりを謀つて行くといふことは出來ない、そこでさう云ふ人でも互に他の者の利益を謀るといふことをして行かねばならぬ、卽ち他の利益を謀るといふ事をするのは、つまり自分の利益になるので、他の利益を謀らなかつたなら自分の損になるのである。そこで私の言ふのは詰り利己心から利他心が出て來た、そこで他人の利益を謀らぬ眞の利己心といふものは是は未だ開けない利己心で、到底自分の損害を招く利己心である、他人の利益を謀つてそれで自分の利益の立つ所があるといふ方の利己心といふものは卽ち利他心と形を變へた所の利己心、或は進歩した利己心である。それは自

分と他人と兩ながら維持發展する所の利己心と言つて宜しい。それゆゑ私はそれをも利己心と言ふのである。丸で利他心と變つて仕舞つたものでは無い。利他といふものは利己の爲の手段としてやつて居るものである、その方は進歩した利己心、それから又純粹に自利ばかり謀つて他を顧みない利己心は進歩しない。社會的生活の出來ぬ利己心である。さうすると利己と利他とを別々のものとした說は二元主義であつて、甚だ間違つて居ると私は考へるのである。利己利他といふものが二つながら本來有るものであると言へば二元主義になつて仕舞ふ、さうして利他といふ方はカントが言つたやうな理窟で是は道德的で、是は人間の理性的にあるものである。さう云ふことを言ふと不可思議の力で與へられたやうなものになる。片方の利己といふのは人間が肉體に持つて居る、是れは極く賤しい方のものになつて仕舞ふ。それで利己といふ方は肉體の方に寄つて居るから自然力で支配されるものであり、利他といふ方は人間の理性的として超自然的、自然を超えた力から賦與せられたものであるといふから元が二つになつて仕舞ふ、さうするとどうしても二元主義になつて仕舞ふ。けれども人間の出來る元の祖先にはかなはずに人間ばかりについて考へれば、生れたばかりの赤坊でも利他心はちやんと固有して居る、利他といふ行爲はまだ出來ぬけれ共、それは長い間の遺傳で持つて居る。それで人間は生れながら利己と利他を持つて居るとは分つて居る。併ながら人間の祖先即ち動物の事を構はず人間のみの履歴に付て考へるのは決して充分のことで無いと考へる、人間ばかりで考へれば二元主義が本當に思はれるけれ共、近頃は學問が開けて、例へば解剖學、生理學、組織學其他の學問でも比較的研究といふことが盛んになつて來た、其比較解剖も人間ばかりの比較解剖ではいけない、それは動物と比較して、さうして人間のは斯うである、動物のは斯うであるといふやうなことが審かになつて來て居る。比較的でない研究といふものは今日では用に立たぬのに利己心とか利他心とかいふことを比較的に研究せずに、人間ばかりで研究するといふことが全く間違ひの基であらう。そこで私は利他は利己から出て來たものである、社會的生活をなす必要から自然にさうなつて來たものである、それで無ければ社會的生活は出來ない併ながら尤も、利己が全く利他になつて仕舞つたといふ譯では無い、矢張り利己である、利己が少し形が變つて來て利他といふものになつたけれ共、畢竟矢張り利己で、即ち社會に有益な利己であると思ふのである。

モウ一つ茲に少し順序を誤つたけれ共、極く下等の動物に利他といふものの無い

といふ證據を擧げやうと思ふ。先刻申した雌と雄とが交尾して子を產むといふ譯で無く、全く分裂で增殖する單細胞の有機體の繁殖の盛んなことといふものは驚くべきものであるが、それを學者が研究したことがある。それは卽ちバクテリーといふものである、バクテリーは皆分裂して增殖するものであるが、僅か二十分か三十分間毎に一度づゝ分裂するものもあるが、まづそれを一時間に一度づゝ分裂するものと見ても、初めの一つが一時間立つて二つになる、二つになつたものが各又一時間立てば二つになる、卽ち二時間目には皆で四つになるのである。今度は又一時間で八つになる、其八つが今度は十六になり三十二になるといふ風に段々分裂して行くのである、そうすると顯微鏡でなければ見えぬ程の小さいバクテリーが三晝夜卽ち七十二時間に四十七兆といふ數になる(一兆は一億を一億合せたもの)それから第五日目には數は書いて無いけれ共、世界の五大洋を丸で充てる位の數になる、肉眼に見えぬ位の一つのバクテリーが一時間毎に殖えて行くとさうなるのである。それならば現にさうなりさうなものであるが、さうならぬのはどう云ふ譯であるか、理窟は五日目に世界の大洋を充てゝ仕舞ふ程になるべき譯なるが、世界開闢以來さうならぬといふのはどう云ふ譯かと云ふに、それが又さうなられぬ道理がある。それは詰り生存して行くのに必要なものが足らない、生存するには空氣も必要、水も必要、土地も必要といふやうに、斯う云ふ下等な物でも生存の爲に必要なものが色々ある。げれ共、それが今言ふ通り殖えて行く丈けの數の物を生存させる必要物が足らぬといふのである。マルサスといふ人は人口が段々殖えて食物が足らぬやうになるといふ說を出して居る。それは人間丈けについていつたことであるが萬物みな同じことである。そこで所謂生存の競爭といふことが起る。そこで身體の强い優れたものが勝つて生きのこり、弱い劣つたものは皆死んで仕舞ふのである。生存して行く必要物が足らぬのであるから、マア十人も人間が居る所に假が一人前外ないと云ふやうであればあとの九人は死ぬるより外ない、それと同じことで、バクテリーでも身體の强い奴は生きる、身體の惡い奴は死ぬるより外はない、弱いものは强いものに負けて仕舞ふ、のみならず强いものゝ食物にまでなる、有機物は同じ有機物を食物とせねば生きられぬものである、有機物は無機物ばかりでは生きて居ることは出來ない、それで弱い方はどうしても皆滅びて仕舞ふ、優れた僅かのものが殘つて行くのである。生存競爭といふことは卽ちそれである。別に戰といふやうな競爭をすることが無くても、優れたものは勝ち弱いものは負けて

仕舞ふのが卽ち生存競爭である。さふ云ふ世界に此利他といふことがどうしてあられ得るであらうか、他を利するどころの話では無い、維持發展の根本動向といふものはバクテリーでも持つて居る、唯其中の强いもの丈けが其動向を擅まゝにすることが出來る、弱いものは之れが出來ぬのである。さう云ふ譯で日々世界に生れて來る數は今のやうに夥しい實に驚くべき者であるが、生存して行く爲の必要物が足らぬ爲に僅かな物が生き殘つてあとは皆死んで仕舞ふことになるから、世界開闢以來今日に至るまでまだ世界に有機物が充滿して困るといふことには至らない、卽ち生存競爭のあるが爲である。此生存競爭のある世界にどう云ふ譯で利他といふやうなことが出來ることであらうか、それで私の言ふのは外の多くの學者の如く人間ばかりで言ふので無く祖先まで溯つて言ふのであつて、祖先の利己ばかりであることは分つて居る。本來祖先に利他のあるといふことはどうしても信ぜられない、單細胞のバクテリーにまで溯つて研究せねばならぬ、それが動物の元祖であるから……さうするとどうしてもそんな所に利他心といふやうなものがあるべき譯が無いと思ふ。

それならば進化の途中でどう云ふ譯で利他心が出來たであらうかと考へると、どうしても利他心は雞が卵を孵して其孵つた所の雛を愛するといふやうな極くの、低い所に多少萠芽があるに違ひない。それは親鳥が其雛を自分と同じやうに思うて愛するので全く利己から出ることである。しかし左樣な利他は唯々一時のものであつて本當に持續する所の利他ではない、本當に持續する利他といふものは社會生存といふものが出來、他の社會に對向して行かうといふ時になつて出來たものである。其出來たといふのも元は各個の根本的動向で自分の私利を謀るといふ所から起つて出來たのであるから、矢張り自利の爲に他を利するといふことになるのである。それゆゑ利己の性質は始終失はずに持つて居るのである。さうするとどうしても二元主義にはならない、尤も自利の爲めに利他をするといふことは大抵意識に持たぬことが多いのである。

そこで人間が利他といふものを持つて居るに就ても、矢張根本には利己を持つて居て、詰まり利己に歸するのであるといふことに付て一つ說いて見ようと思ふ。私は利他心に三通りの種類があるとして居る。其第一は感情的の利他心、第二は智略的利他心、それは自然に生ずる利他心、それから人工的に生ずる利他心といふものがある。或は之を敎養的利他心と名づける、卽ち宗敎や道德の敎で養成するところ

の利他心である。宗教や道德の教といふものは皆利他のことを勸めて行く、そこで起つたところの利他心である。其三通りがある。感情的、智略的は自然であり、教養的は人爲的といふやふに分けたら宜からう。感情的といふのは是は人間の自然から出て來る、親子兄弟のやうな近い間柄、又は他人にしても朋友の間といふやうな者は交りが親しい、是は殆ど自分同樣に考へるやうになつて來る。それであるから是は互に其人の利益を禱る、どうぞ自分同樣に其人が幸福であるやうに、不幸に陷らぬやうにといふことを禱る心持が生じて來る。是は感情的卽ち人を自分と同じやうに考へる利他である。それで人が不幸に遭ふのを見ると自分が不幸に遭つたと同じやうに感じ、又人が幸福を得れば自分が幸福を得たと同じやうに感じる、左樣に親しい人が不幸に遭つたときには自分が生命を捨てゝも助けるといふやうになることさへあるのである。其根本を能く考へて見れば全く自分同樣に思ふからである。人の不幸を見ると自分が不幸に遭つたと同じやうに不快の心を起す、そこでどうしてもそれを救はねばならん、打遣つては置けないといふことになる、さう云ふ時に若し自分の志を遂げて、左樣な人の不幸を救ふことになつたならば、自分の心が安んじて嬉しくなる。自分は其爲に隨分困難をしてもそれが誠に嬉しくある。

場合によれば全く生命を捨てゝも骨を折るのである。然るに若し反對に出て、其志を遂げることが出來ず、人を救ふことが出來ぬといふと、其不快といふものは實に言ふべからざることになる。丸で人の事であつても殆ど自分のことと同じやうに感ずるのである。それであるから人を救ふとか人を助けるとかいふやうなことは詰る所は自分の快感を求めるのである。故に感情的の利他心といふものは利他心には相違ないけれ共、詰る所は利己心である、誠に高尙な利己心であります。

第二の智略的利他心は是は前の感情的利他心よりは反對と言つて宜いやうな譯で、是は自分の利益を意識上に考へる爲めに又人の利益を考へるのである。例へば物を賣るといふ時に他の者より廉くして物を良くして賣る、それは實は人の爲にしやうといふ心が本來では無い、自分の利益を求めるのである、詰りさう云ふ風にすれば買手が多くなつて來るから、自分が誠に德な譯である。それで他の商賣人が骨折るよりは自分が多く骨折つて物を賣附けやうといふ、それは明かに自分の爲にすることは分つて居る、是は商賣の上だの世間の交際上で一番多いものである。人の爲を謀るといふのは、あとで又其人から自分の爲をも謀つて貰ふといふこともある、詰り人の信用を求めるのである、さう云ふ驢梅に人の爲に盡すことがあ

ると人の信用を受ける、信用を受けるといふことは誠に自分の利益である、自分が他日の爲に一時此處で損をする、或は此處で大に其爲に勞するといふことがある、それは損のやうに見えるけれ共、あとで人から信用を受けるといふことの爲には大利益である、といふやうな事を考へて人の爲を謀るのは智略的利他心と名を附ける、是は自分の爲にするといふ事を意識に持つて居る。前の感情的利他心といふのは自分の爲にするといふ意識は無い。それはモウ人の爲といふことばかりしか思はないけれ共、それは無意識的に自分の爲にする動向はある。所が此智略的利他心の方はチャンと自分の利を謀る爲に人の利を謀るといふことは明かに意識に持つて居る。是は動機(モーチーブ)が惡かつたら大變惡い全く害他になる。例へば人を欺いて一時人に利益のやうに見せて置いて其人の信用を得やうといふことではいけない、それは決して利他でない即ち動機が惡いのである。動機が正しいのでなくてはいかぬ。今の賣物などに至つては少しも惡いことはない、外の商人よりは少し廉くして、さうして物を撰んで賣らうといふのは人には害はない利益ばかりである、さうしてこちらも其結果として利益を受けるのであるから此動機は少しも惡いことはない。それゆゑ智略的利他心といふのになると十分動機を考へなくてはならぬ。動機が惡かつたら智略的利他心とは言へないのである、それは唯純粹の利己になつて仕舞ふ。

それから教養的利他心、是は宗教や道德で教へるので、人間は利他をしなければいかぬ、人の爲に謀ることをしなければならぬといふやうにする、それに感化されて人間が利他の行をするやうになるといふことは澤山あるのである。德義の行爲が社會に行はれるのは感情的のものもあり、智略的のものもあり、教養的のものもあるけれ共、なか〳〵さう思ふやうには行はれない。それで今日純粹の利己を恣まにしやうといふ人の方が何處の國へ行つても多い、なか〳〵純粹の利己の力は強いものである。有機體の持つて居る根本的動向といふものは一つに働いて行く、社會的生活をした上でもそれに關係なく唯々一個の利益を謀る方ばかりに進んで行くから、それで社會的生活の上に大弊害がある。社會的生活にはどうしても利他といふ事が行はれて行かねばならぬ。けれ共其行はれる利他といふものは根を探つて見れば利己であるといふ事は是は間違ひない事と私は思ふのである。それは教養的利他心に付て例を擧げても能く分る、極く開けない野蠻の宗教といふものはまだ是は道德の分子が含んで居らぬ。そんなものは仕樣が無いけれ共、少し進んだ

宗教になると必ず道德の分子を含んで隨分道德を重いものとして居る。其宗教或は又支那などの色々な道德の教の說く所を聞いて見ても同樣である。耶蘇教では人を自分の如く愛せねばならぬといふことを最も肝要として居る、卽ち愛です。人を充分に愛する事をすればそれが神の意に適ひ、つまり自分が幸福を得るのである、さういふあんばいに教へる。又其やうな人は死後それから後に天堂に生れる、世界の終りに神の審判を受けて神に賞せられる、さう云ふやうに教へる。又佛教では人に慈悲をなして人の爲に盡す者は極樂に行く、それに反する者は地獄に落ちると說いて居る。孔子の教では天堂とか地獄とかいふことは言はぬけれ共、矢張り人の爲めに盡す者は君子である善人である、さうして自ら幸福を得るといふやうに教へる。卽ち積善の家有餘慶、積不善の家有餘殃といふことは儒道主義である。此の如くどんな教でも詰る所は自分の利益になるといふやうに教へるのである。さう教へねば利他をすゝめることは出來ないのである。利他をなして人の爲めを謀れば其結果として自分に利益が返つて來るといふことを教へない宗教は一つもない。それから西洋の哲學のやうな高尙なもの卽ち先刻申したカントなどは、人間が德義を守るといふことは人間の理性に存して居る大義務である、他に色々の理窟があつて道德を守らねばならぬといふ事では無い、人間の大義務であるから守らねばならぬのであると論じて居るのである。夫故矢張り、つまりは自分の利益に歸して仕舞ふのである。人間は其の理性に持つて居る大義務を盡すとそれで最良の人間になり、守らぬ人は惡い人間になる、極く進んだカントのやうな道德の教でも矢張り詰る所は自分の利害に歸して仕舞ふやうなことになるのである。さう云ふ教の積りでなくつてもさうなつて仕舞ふのである。それで耶蘇其外の宗教よりカントの學說の如き高い者に至るまで、利他を教へるのは詰り其結果は利己になるのである。左樣な道理にならねば利他といふことを充分に進めることは到底出來ないのであらうと私は思ふ。それでさへなか〳〵利他を盡す人は少い、眞の利己に陷る人が最も多いのである。利他は利己に歸するのであるといふ理窟はどの教にでも學說にでもあるのである。それ程になつて居ても利他といふことは充分に行はれて居らぬ。それは又どう云ふ譯であるかと言ふと、是はどうしても社會的生活をなさぬ下等動物の祖先から出た人間である。社會的生活をして利他の行爲が必要になつてからは比較的僅かな年數であらう。人間が出來てからと言つてはわるいが高等動物が出來た後のことである。高等動物はモツ既に多少社會的生活をやつて

居る、其時から道德的行爲も多少出來て來た。下等の有機體卽ち生活物が始めて世界に出來てからの年數は地質學で研究した所では、今日まで凡そ四千八百萬年、耶蘇では六千年程前に世界が出來たといふけれ共そんなことではない、地質學で研究した所では生活物が始めて出來てから、今日までの年數が凡そ四千八百萬年、それから脊椎動物の高等なる哺乳動物が出來てからは比較的僅の年數と言つても耶蘇敎の言ふやうな短いのでは無い、隨分長い年數であるが、それ迄の間は利他といふ事は不必要であつたであらう、社會的生活が高等動物に始まつてから利他といふものが必要な道具になつて來たのである。マア大きい年數で考へて見れば利他といふことの出來たのは誠に僅かな年數であらう、其の以前の長い間の祖先といふものは丸で利他といふことは知らなかつた。さう云ふ祖先の子孫であるから人間といふものはなか〳〵今日も純粹な利己の遺傳で不德義な行爲も多いのであらう。今日社會的生活の上に害のある純粹の利己といふ行爲が多いので、利他といふ方の高尙な利己、卽ち進步した利己は誠にまだ充分で無い、人間は動物的祖先から純粹の利己を遺傳して居るから已むを得ないのである、是から進んで行つたらどうか、モツと利他的行爲が增すといふことになるであらうと思ふ。それはなか

なか千年や二千年でさうなる譯には行くまい、なか〳〵長いことであらうと思ふ。それに付て又一つカントの話をすると、此二元主義の最も有力家たるカントは斯う云ふ事を言つて居る、人間が若し肉體的ばかりの者であるならば道德といふことは迚も行はれるもので無い、肉體的ならば純粹の利己的のものであるから道德といふことは決して行はれない、併し人間が併せて理性的の者であるからそれで道德が多少行はれて行くのであると說いて居る。それが卽ちカントの二元主義になる。人間が全く理性的ばかりであれば私慾が無い、唯々道理に從ふばかりであるから道德が自然法と同じやうに行はれて行くに相違ないと說いて居る、併し肉體がなくして理性的のみであるならば是は幽靈のやうなものである。カントは六ケ敷い注文をするのである。道德が自然法と同じやうに行たれるといふことは六つかしいことであるどう云ふ譯かといふと自然法(ナツールゲゼツ)といふのは是は宇宙間に自然に具はつたもので進化するものでは無い、自然法のために外のことは進化して行くけれ共、自然法其れ自身は決して進化はしない、昔から今まで同じことである、暑くなるとか寒くなるとか雨が降るとか物が上から下へ落るとかいふ其法則は進化も何もするものでは無い、それは既にチヤンと定まつたものである

げれ共人爲法卽ち道德の如きものは社會が出來てから生じたものであつて、且つ野蠻社會と開化社會とは大變違ふものである。野蠻社會の道德が何時までも其まで行はれてゆくものでは無い、社會が進めば道德といふものも亦進んで來る、唯々道德の必要卽ち社會を治める道具であるといふ趣意ばかりは變ずるものでない、社會を治めるには道德は必ず無ければならぬ、けれ共其社會といふものに開けたものもあり開けぬものもあつて治め方が變じて行かなければならぬから、道德が必要であるといふことは言へるけれ共、其物は變じて行かなくてはならぬ、それゆゑ自然法とは餘程違つて居る。自然法は天地の在らん限り變はるものでは無い、道德は社會が出來てから必要なものになつて出來た。それから社會の進歩して行くに隨ひ、必要によりて形を變へて行かねばならぬ、昔の必要と今日の必要とは違ふ、それで道德といふものは何時でも同じやうなものとすることは出來ない。カントの言つたやうにすると、どんな野蠻な殆ど禽獸の如き亞弗利加や濠太利亞の山中に居る人間でも理性は持つて居る、歐羅巴の開化の人民と同じやうに理性が存して居るといふ、それは迚も通る說で無い。人間が理性的であるといふのはそれは開けて居る人間に於て言はれるのである、亞弗利加や濠太利亞の山中に居る野蠻人を理性的と言へるものでは無い。それであるから迚もカントの言へるやうな道德で治めて行くことは出來るもので無い。左樣な學說は先刻も申した通り人間丈けに就て研究して居つて、人間の祖先たる動物の事は少しも構はずに居るから間違つたことが出來る。親の遺傳病たるを知らずして醫者が治療すると往々間違が出來るものである、此一元的倫理と書いてある後とに小さく書いた利己的倫理、因果的倫理、自然的倫理といふのは一元的倫理と違つたものでは無い。目の着け樣で名は色々に附くのである、利己的倫理と言ふのは利己といふことを以て押通して、利他までも畢竟は利己であると言ふ主義で說くから卽ち一元である。それから因果的倫理といふものは先刻申す通り、總て倫理は原因結果のくさりであると說いて別に不可思議の力がそこに這入つて來るといふやうなことはないと云ふのである、故に因果的倫理と名を附ける。それから自然的倫理といふのは卽ち倫理と自然力ばかりに依て說いて、不可思議な超自然力といふやうな者が加はつて來ると立てないのであるから自然的倫理と名を附けるのである下の二元的倫理、是も亦目つ着け所に依つて名が變る。それは利他的とも言へる、利己の外に利他といふものがある、其利他といふのはカント等の如く多少不可思議の原因から來たといふやう

に說く事が多いのであるから二元的倫理を利他的倫理とも名ける。それから眼目的倫理、是れは因果に對する眼目、或は之を目的と言ふ方が宜いでせう、テレオロギーといふのは目的と譯して宜い、併し目的的といふのは可笑しいから此處には眼目的と書いた、是は因果に對するもので因果は原因結果の關係で來るもの、テレオロギーの方は世界は目的を立てて造られて居る、人間は斯う云ふ事の爲に造られた、獸は斯う云ふ事の爲に造られたといふ風に、世界の創造が全く目的を定めて出來て居るといふ所から之を眼目的といふのである。人間に斯う云ふ鹽梅に道德を行はせやうといふ目的を以て道德を作られてあると見るから眼目的倫理となる。所が私の考ではさう云ふ目的があつて作られたのでは無い、唯々原因結果でさうなつて來たと思ふから此處で違ひが出て來る。それから超自然的は先刻から言つた通り自然力より外に不可思議な力が這入つて來て支配をするといふことである、さう云ふやうな所に目を着けて言へば超自然的倫理とも言はれるのである。併ながら又斯う云ふことがある。人間の智慧の度が幾ら進んだ所が、世界のことが悉く分るべきもので無い、悉く分るといふことに行かぬであらう。然るに左樣な事を悉く超自然的卽ち不可思議の力に歸して仕舞ふと云ふのは、わからぬことと思ふ。尤も今の智慧で分らなくても是から進めば分ることもあらうが、併し人間の知識で到底分らぬこともあるに相違なからうが、兎に角人間の智識で分らぬことは必ず超自然的だといふ道理は決して出て來ない、自然力であつても人間の力が足らねば分らぬ。ヘッケルも言つて居る、ヂュブアレーモンが生命の根原といふものを七不思議の中に入れたは近いことであるが、それは今日は既にわかつたのである、無機物から有機物の生ずる道理は化學上既に明かになつたのである、又其外にも七不思議の中で既に分つて、不思議でなくなつたことがある。然るに人間の智慧で分らぬことを直ちに超自然力、不可思議力、神祕抔といふやうなことに考へるのは誠に大早計であらう。今日の人間で分らなくても分ることもある、又到底分らぬことが隨分あるだらう。併し人間にわからぬから超自然力といふ道理は無い、唯々人間の力で分らぬばかりで、それが神祕であるといふ譯は無い。自然力から出來るもので無いといふことは決して斷言することは出來ない。ヘッケルはスペンセルや、ヘンヂングやカルネリーと云ふ人達は皆一元的倫理說を主張する人卽ち超自然力を信じない倫理學者であると言うて居る。私の學說は又右等學者とは論點が違つて居るけれ共、矢張一元的倫理と申して宜からうと思ふのである、一元論とか

二元論とかいふやうなことは論點は種々違つて居るけれども、兎に角一元論とは單に自然力を信じて超自然力を信ぜぬもの、二元論とは自然力を信ずると同時に又超自然力を信ずるものであると云ふ相違になるのである。（明治卅六年五月東洋學藝雜誌）

第十　所謂黄人禍

諸君、私は題を所謂黄人禍としたけれども、これでは少し足らぬやうであるから、今附加へて所謂黄人禍と國際道德、斯う云ふことにします。黄人禍と云ふことは諸君が元より御承知で、講釋しなくてもと思ふが、卽ち露西亞人が近頃言ふことである。露西亞のみならず或は獨逸邊でも言ふやうである。それは露西亞が連戰連敗する所から、世界の同情を段々失つて來る、日本の方に同情が增して來る、さう云ふ所から何か邪魔をしやうと云ふ考から、日本は大いなる野心を挾んで黄人種を率ゐて白人種を征服することを企てて居るのである、夫であるから白人種は默つて露西亞にのみ災ひを受けさせると云ふやうな考へで居てはいかない、露西亞に同情を表しなければならぬと云ふ意味で、頻りに黄人禍を唱へるのである昔は黄人種が白人種を征服したこともある、さう云ふことがあるから、また昔に歸つて白人種が黄人種の爲めに征服されるやうになると云ふことを云へば、餘程人氣を得ることは出來易いと云ふ所から、さう云ふことを云ふのである。けれども決して日本人にさう云ふ考へはない黄人種の中に少しも日本の賴みにならうと云ふものはないのであるさう云ふ賴みにならぬ支那や朝鮮や其他蒙古人、滿洲人と云ふやうな日本の賴みにならぬ、却つて邪魔になるやうなものを相手にして、白人種を征服する企てをするやうな愚をするものではない。日本は自國の利益を護る爲めに戰ふのである、それゆゑ日本に接近して居る支那や朝鮮の不幸を救つてやらねばならぬ、其不幸を救つてやらねば直接に日本が害を受くることになる、實に日本は迷惑であるけれども已むを得ず支那や朝鮮の爲めにすることである、支那や朝鮮を日本が率ゐてさうして支那朝鮮と共に白人種を征服しやうと云ふやうな考へのあるべきことではない、却つてそんなものを相手にして仕事を仕やうと云ふことは實に日本の迷惑になることであるけれども已むを得ず、それ等を助けねばならぬのである。それから又其人種と云ふやうなことで團結して、さうして一人種が他の人種に對

して競爭するやうなことは之は昔の話しであつて、迚も今日に出來ることではない、人種と云ふやうなものの團結と云ふことが今日では決して白人種にあつても行はれることではない。白人種が全く團結して黃人種を征服するやうなことも決して出來ないのである。人種と云ふやうなものの異同を問ふと云ふことは、モウ今日は已に時が過去つて居ると云つてよろしい。それから又宗敎、宗敎と云ふものも昔は同一宗敎で團結を爲すと云ふことはあつたけれども、夫れも今日は時が過去つて居る。昔の十字軍と云ふものは卽ち宗敎の大戰爭である、彼の時分は宗敎と云ふものが團結の元になつて、宗敎の異つた同志が爭ふと云ふことは十分あつたことであるけれども、近頃ではそれもない。露西亞と土耳其の戰爭にも英佛が異敎なる土耳其を助けて同敎なる露西亞國と戰つた。極近頃の土耳其と希臘の戰爭にも決して耶蘇敎國であるからと云つて歐羅巴諸國が助けはしない、さう云ふものであるから、宗敎は今日は餘程淡泊なものになつて宗敎の競爭と云ふことは出來ないことになつて來て居る。人種のわけから競爭すると云ふ樣なことも今日はない。又宗敎のわけからも競爭すると云ふことも今日は出來ぬ世の中になつて居るのである。だから露西亞人が黃人禍と云ふことを云つた所が、それに欺されるものは決してない、黃人種と云ふやうなバツとしたことで世間が欺されるものではない、けれども日本が黃人の中で特別に進步して――非常に進步して來たから、どれだけ白人種の妨害を爲すやうなことになるかも知れぬと云ふ恐れはあるに違ひない、それは歐羅巴各國にあらうと思ふ、日本の進步と云ふものは他の黃人種とは丸で違つて居る、白人種も殆ど及ばぬ程の勢ひで進步して居る。其上に今日の戰爭の上でも連戰連勝と云ふ譯であるから、日本人を恐れると云ふことは十分あるであらう、それを大袈裟にふれまはして黃人禍と云ふやうなことを云ふのである。併し其の黃人種が一つになるといふことは元より出來さうにもないことはわかりきつたことである、ところが近頃は又アングロサクソン禍と云ふことを唱へ出した、卽ち英米二國が日本に量負をするところよりアングロサクソン民族は世界を壓倒する企を持つて居ると云ふことを言出して、他の各國の同情を求めやうと云ふやうな有樣である。英米が日本に同情を表して露西亞を惡んで居ると云ふことは明かであるから、英米を惡く云つてさうして他國の同情を得やうと云ふやうな策をやつて居るのである、英米が元より自分の國威國力を强大にしやうと云ふことを謀ることは當然のことであるけれども、英米が唯漫りに各國を征服しやうと云ふ

やうな心持のあると云ふことも決して云へることではない、唯自分の國威國力を強大に擴張しやうと云ふことを以て、夫れを直に世界の禍害であると云ふやうなことを云へば幾らでもある、却つて露西亞自らがそれをやつて居るのである。卽ちそれをスラヅ禍と云つても露西亞禍と云つてもよい、寧ろ自分の方からやつて居るのである。唯夫れは段々戰爭に敗けて來る、都合が惡いと云ふので、英米が日本の負擔をすると云ふことが口惜い所から、さう云ふことを云つて居るのである、けれども、そんなことに天下の公論が瞞着されることはなからう、唯佛蘭西が露西亞の同盟國であり、又獨逸は同盟國ではないけれども利害を共にするやうなことが澤山あるから、餘程露西亞負擔に傾いて居る所がある。けれどもそれは或は政府が其方に傾いても人民はさうでないやうな形勢もある。人民の中にも分れて居るやうな有樣があるから、獨佛が全く露西亞を負擔する譯ではない、獨佛の中にも日本負擔の方に傾いて居るのが餘程ある、現に露西亞のやり方と云ふものは之を虛心平氣、公平に考へた所で、唯我儘不法のみであると云ふことは分つて居るに相違ない。唯獨佛が其同情を表するやうなことには已むを得ぬ理由があるのである。獨佛が露西亞の仕方を惡いと思つても自分の方の利害の點から露西亞に肩を持たねばならぬやうな理由があるのである。又英米は露西亞とは大に利害を異にする所があるから露西亞を惡み、夫れに反して日本とは又大に利害を均しくするやうな點が多いから日本に同情を表するやうなことで、さう云ふ譯であるから各國が自國の利害に依つて日本に同情を表したり露西亞に同情を表すると云ふ相違が出て來るのである、それは當然の話しで、自國の利害を第一に見ると云ふのは元より當然の話しである。

併しさう云ふ有樣である所から、國際道德の上で露西亞の處置とそれから日本の處置と云ふものを比較的に論究して見ることは必要なことであらうと思ふ。

國際道德と云ふことは之は今迄世間一般――世間一般のみならず學者一般の主義とする所では、一國內の道德と全く差別をして論じて居らぬ。それゆゑ倫理とか道德と云ふときには國內の倫理道德も、國際道德も一つに論じて居る、決して其間に異同がない、それであるから人道と云ふやうなことを唱へる、人道と云ふことは主として國內の道德上に就て云ふことでなく、重もに世界一般に對して云ふことであるけれども、世界一般の交際上にも當然倫理道德を要することと考ふるのが抑の間違である。私は大變それは道理に違ふと思ふのである。一國と云ふものは則

ち一つの絶對的團體であつて決して離るべからざる所の大有機體であるのである、國家に屬する所の各個人と云ふものは卽ち絶對的に國家の利益の爲に盡さねばならぬものである。それゆゑ國內の道德の終局の目的と云ふものは卽ち國家の利益を謀ると云ふことである。國家の利益を謀るに就ては卽ち此國を爲して居る所の各個人の中に道德が能く行はれなければいけない、其間に不道德の行爲があるときには、卽ちそれは其國家の不利を爲すと云ふことであるから、道德倫理の終局の目的は全く國家の利益を計ることである。然るに國と國との間は一つの國家を爲して居るものではない、國と國との間には國內の一個人同志と違つて、その上に國家と云ふものがないのである、それで國家內の各個人同志と國と國同志との間とは大變關係が違ふ、それであるから國と國との間は自國の利害と云ふものを十分に終局の目的として善いのである。自國の利益に害のあることはどんなことでも爲すべきことではない、專ら他國の利害を顧みるといふやうなことは出來ないけれども、國家內に於ける各個人の行爲は國家の爲めに利益を謀ると云ふことが終局の目的であるから、各個人の間は自分の利益を終局の目的とすることは出來ないのである、國家の爲めに不利なことならば元より自分の利益を主張することは出來ない、國家の爲めは勿論或は他人の利益の爲に自分の不利をも顧みぬと云ふやうにせねばならぬ場合が幾らもある、それは終局の目的が國家と云ふものであるからである。さうして見ると國家內の倫理道德と國際的の倫理道德とは大變目途が違ふのである。それであるから私は是等の差別をも構はず、唯人道とか博愛とか云ふやうなことを漠然と云つて人道の爲に戰ふ、夫が義戰であると云ふやうなことを言ふのは間違つて居ると思ふ。戰ひを爲す爲さぬと云ふことは第一の目的が唯自國の利益、自國の利益なら戰ひを爲さねばならぬ、決して他國の利益を思ふ爲めに戰ふと云ふことのあるべき道理はない。日本が今回露西亞と戰ひを爲すのも日本の安危に關係するからである、露西亞は未だ日本に向つて直接に領土占領抔のことをやらぬけれども、支那や朝鮮に對しては已にやつて居るから遂に日本を危くせんとする露西亞の暴舉を防ぐ爲めに支那、朝鮮を助くると云ふことは畢竟する所終局の目的は日本の不利を防ぐ爲に戰ふのである、朝鮮、支那の爲に戰ふわけではない、全く自國の爲に戰ふのである。自國の爲にせんと思へば餘儀なく朝鮮や支那を助けてやらねばならぬ、先達ての宣戰詔勅を拜見しても其道理は明かに分る、唯漠然と人道博愛と云ふことは詔勅にはない、詔勅は實に道理に叶つて居

るのである。結局日本の利益を露西亞が害するから、支那、朝鮮を助けて露西亞の暴行を防がなければならぬと云ふやうな御趣意であるから、私の今言ふ通りに少も違ひないと思ふ。日本の利害に關せず、唯支那朝鮮の爲に、又人道の爲めに戰ふと云ふならば支那、朝鮮には限らぬ、モッと遠方の日本に少しも關係なき所の國の爲めにも戰はねばならぬ、卽ち人道と云ふことで戰ふならば、或は英國とボーアとの戰にも關係しなければならぬ、米國とヒリッピンとの戰にも關係せねばならぬやうになる、決して其樣な道理はない。夫故に國際倫理は一國內の倫理とは全く違ふ。露西亞が自國の利益を計ることに骨を折るのは固より間然すべきことはない、自國の利益を主にすることは前申した通り國際上當然であるが、併し今日の如く開けた國際上に於ては自國の利益の爲めに親交國の利益を絕對的に害せんとすることは許さぬのである、左樣な仕方でなく親交國の利益をも眼中に置きながら、自國の利益を取るやうにせねばならぬ、それが國際道德である。それでなければ全く盜賊か若くは詐欺者である。それでは國際道德は全くないのである、然るに露西亞の仕方は自利の爲めに親交國の利益を全く害する仕方をやつて居る、全く盜賊詐欺の所爲である。彼得大帝の時代にはそんなやり方でも當然であつた、當時は今日のやうに國際が開けて居らないから、妄に他國の害を釀すやうなことをしても構はなかつた時である。今日は餘程進んで來て居る、唯我が利益の爲めに親交國の不利を毫末も顧みぬと云ふことは出來ないことになつて居る、卽ち國際間の關係が餘程密接になつて來て居るからさうなつて來たのである。夫故に親交國と云ふやうな間ではどうしても自分の方の利益の爲めにのみ他國の利益を害することは出來ない、夫をすれば國際道德に全く反することになるから、今日は餘程むづかしい時になつて來て居るのである。露西亞は支那とは元より親交國である然るに彼の北淸事變の時に露國は自國の防衞の爲めに滿洲に兵を出して一時其地を占領すると云ふやうなことをやつた。それは先づ已むを得ないとしても、最早占領するの必要なき時に至つて尙ほ其占領を解かない、種々な口實を設けて占領を解かぬと云ふのは元より其地を奪領して仕舞はうと云ふ野心があるからである。而して遂に旅順口迄鐵道を貫通したのである。又東に向つては浦鹽斯德迄鐵道を引いた。浦鹽斯德は元より自分の領地であるから當然のことであるが、旅順口は支那の物であるのに、永久占領すると云ふ擧動をなした。其露國が借りた旅順口は數年前日本に忠告して支那に返させた土地である、卽ち東洋の平和に害があるから日本は之を

持たぬが宜からうと云ひながら、自分は之を占領すると云ふ次第で、實は奪つて仕舞つたのである、全く盜賊の仕方である。露西亞と云ふ國は誠に不幸な國で、東洋に於て一も不凍港を持つて居らぬ、此不凍港を持つて居らぬと云ふことは實に困るのである、自分の領地に不凍港は無いから、どうしても他國の不凍港を奪ふより外に途はない。さう云ふわけゆゑ、露西亞に取つて見れば實に已むを得ぬことであらうけれども、斯かる詐欺手段を以て滿洲及び旅順を占領したと云ふのは、全く親交國たる支那の弱きに附込んで詐欺手段を用ひた譯で、實に國際道德を破つたのである。妄に親交國に對して盜賊的行爲をなすと云ふは國際道德に於て決して許すべきことにあらざるは當然である。それから又其滿洲を占領しても門戸開放と云ふことをしない、それは自國の爲めに不利益であるからであるさう云ふ所から各國の惡みを受くるのは當然である、之は英米などの最も惡むことである。啻に英米のみならず固より獨佛と雖も決して快しとするものではないのである、それは單に經濟上のみならず宗敎上でもさうである、露西亞が滿洲を奪領すれば耶蘇敎でも自分の國の希臘敎より外は許さぬので、決して同じ耶蘇敎でも他の宗派の入ることを快く許すものではない。此の如き所より他の各國からも餘程惡まれて居るのである、其門戸開放と云ふことは經濟上及び宗敎上共にしないのである。さう云ふことが卽ち他國の利益を總て侵害すると云ふ譯になる。日本が滿洲を取ると云ふことは元より爲さない譯であるが、若し日本が滿洲を取るとしても開放は喜ぶ所である。經濟上の開放は元より、宗敎上に於ても許すのである。日本は耶蘇敎國でないけれども宗敎は自由主義を許すと云ふことが憲法に定つて居るから、如何なる宗敎が入り來るも構はぬことである、國家の害を爲さぬ以上は許すと云ふことであるから、日本が滿洲を取るとしても西洋人は元より安心して居るのである。又以前の如く支那の所有に歸するも決して耶蘇などの宗派が這入つても差支へないと云ふことも分つて居る、唯獨り露西亞が滿洲を取つて仕舞へば到底宗敎の自由は許すものでないと云ふ所から、露國は經濟上、宗敎上に於て他國から惡みを受けるのである、卽ち總て親交國の不利を釀すやうな處置のみをやつて居るからである、唯先刻も申した獨佛と云ふものが少しく露西亞に負であると云ふ道理は已むを得ぬ理由がある爲である。佛が露西亞に對して同情を表して居る所以は決して露西亞の處置が公平にして他國の不利を釀す如きことを爲して居らぬと認めて同情を表するにあらざるは疑ひない。佛は露西亞に金を貸して居ることが非常なもので

之が露西亞が衰へては困る所以である、それが第一である。第二に日本に強くなられると假令黄人禍ほどのことはなくも、或は東京や安南邊に佛の藩屬地があるから多少心配がある。第三には佛が露西亞と同盟して居らぬと獨逸との關係上に於て眞に不利である、自分が孤立するやうになつて來ては困る、獨逸に向つて備ふる爲に露西亞と心易くして置かねばならぬと云ふが如き意味がある。其他にも尙理由がありませうが、先づ此の如きことが主たる理由である。又獨逸が多少露西亞に同情を表すると云ふのにも道理がある、之も第一は佛蘭西程ではないけれども、大分露西亞に國債を出して居る、第二は日本の强大を恐れる、日本の强大になることを好まない。第三は獨逸は立憲政體であるが併し皇帝の權力が强くして殆ど專制政治の觀がある、卽ち露西亞の專制政治と云ふものは獨逸の政府には多少氣に入ると云ふやうな氣味がある、露西亞の專制が弱くなると多少自國に害がある、此の如きことから露西亞が勝つ方がよい、而して成るべく立憲政治の形で專制政治を露西亞と同一に行ひたいと云ふ意味がある、同病相憐むの風がある。夫故に露西亞の爲す所は國際道德などに決して合するものではない、露國の行動が甚だ惡いと知りつゝも自國の利益の爲めに彼を助けたいと云ふ意味が獨佛にあるのは已むを得ぬ。又英米が日本に同情を表する理由も主なる點が二三個條あらうと思ふ、英國の露西亞を惡んで日本に親しくせんとするは元より露西亞の南方に出て來ることを英國は防がねばならぬ、之は昔時よりのことである。それには今日强大になつた所の日本と結んで、共に露國を防ぐのが一番巧妙なる手段であると云ふ所から同盟も出來たことである。夫故に日本に向つて十分に責負をする、これが第一。又第二には今日の政體、制度と云ふやうなものが日本は英國に似て居る、兩國共に立憲政體にして人民の權利自由を許すものである、露西亞はそれに反對である。日本は憲法の上からも行政の上からも英國と大いなる相違もあるけれども大體に於ては似た所があるのに、露國は專制政治國で人民の權利自由を許さぬ、これが日本に同情を表して露國に同情を表しない一の理由である。モウ一つ卽ち第三の理由は先刻申した經濟的、宗教的の門戸開放、之は露西亞の十分拒むことであるが日本はそれと反對である。此門戸開放は英國の最も喜ぶ所である。以上は重もな理由であらう。又亞米利加の如きも殆ど英國と同樣である、米國は露西亞の南に出るやうなことは恐れぬけれども、其專制政治は米人の氣に入らぬ。日本は共和政治ならざるにも關はらず總ての制度が大凡そ米國とよく似たところがある、卽ち人民の權

利自由を進むることの如きは日本も米國も大體同樣である、此の如き所よりして人情が自然日本に向くと云ふ理由が生ずる。次には米國は日本で第一番の最初から交際をして特別に日本を開いたと云ふが如き心持がある、又日本からもさう云ふ鹽梅に米國は日本の爲に師匠であると云ふやうに考へて居る、其相互の親交が此の如く他の國より厚いので、隨つて日本に同情を表し、夫と共に露西亞を惡む、又次には右の經濟的、宗教的の門戸開放を日本は爲すに相違ないが露西亞は拒むに相違ないと云ふ所で、米國も凡そ英國同樣な理由から日本に同情を表して露西亞に反對する譯である。夫故に元より自國の利益を目的とすることは何れの國も同樣であるから、各國の間に國家内の道德と同じ道德の行はれぬのは當然である、唯自己の利益を主として其自己の利益に合ふやうな方に加擔するのであるから、固より自己の利益に反する方は敵に爲すやうな譯で、唯自己の利益を主となし目的となす道理のものである。獨佛二國が露國に加擔をなし英米二國が日本に加擔すると云つた所が、之が人道とか博愛とか云ふ道理より出たものではない、全く自己の利益によい方を助け自己の利益に惡い方に敵するやうなことは當然である、けれどもなるべく自國の利益と他國の利益と能く合することを心懸けて、唯自國の利益の爲めにのみ他國の利益を害せぬやうにして行けば、卽ちそれが國際上の道德と云ふものになるのであらう、之に反して少しも他國の利害を顧みず唯自國の利益のみを專らにすれば、卽ち國際道德に反することになるのである。自己の利益を主とすることは之は國際道德上當然のことで少しも惡いことではないけれども他國の利益も成るべく保護して行くことが卽ち國際道德に適ふもので、夫に反して自己の利益を主とすること卽ち露國が支那の土地を詐欺的に取つて安に之を我所有となし、經濟上にも宗教上にも其の門戸開放をしないと云ふが如きことは、唯自國の利益を謀つて他國の利益を害することになるから國際道德に反することになるのである。前申すやうに獨佛の如き特別の關係ある國に於ては露西亞の如く無法の處置を爲す國にも同情を表するやうになるけれども、此の如き特別の關係のない國に於ては、なるべく無法の事をせぬ國を好むのである、決して自國の利益のみを謀つて他國の利益を顧みぬやうな國と親しくしやうと云ふ國は無いに相違ない、

是に由て之を觀れば其自國の利益を主とするは固より當然なれども、自國の利益と他國の利益との共同を努めて謀るのが國際道德に適つたことになる、之に反す

る處置は國際道德に反いたものである。此の如き點より考へる時は日本が他國の利益を損して自國の利益を專らにするが如き心のないことは、外國人が虛心平氣に公平に考へて見たならば明かに分ることである。獨佛自身が考へても、露國が自己の利益を專ら謀つて他國の利益を毫も顧みぬと云ふことは直に分るであらうと思ふ。それ故に獨逸は勿論、佛蘭西に於ても露西亞との親交に反對する黨派は澤山あると云ふことである、さう云ふ所が國際道德に合するか合せぬかと云ふ相違であらうと思ふ。然るに國際道德を論ずるに當つて、一般の總ての倫理道德と云ふ如きことで、人道とか博愛とかの道理を以て論ずるのは大に間違つて居らうと思ふ、今迄の學者は國內の道德と國際上の道德との差別をして居らぬ、國家內の道德と國際上の道德は實際一樣に行くものでないと云ふことは學者も素人も認めて居るけれども、主義として差別を立てて居らぬ、均しく兩方とも一樣な倫理道德として居るのである。それであるから主義の上では人間の交際を總べて同じ道理を以て律すべきものとして居るのであるが、それが大なる間違ひであらうと思ふ、之だけ。（明治卅七年七月倫理講演集）

第十一　眞善美を論じて倫理學上の迷見に及ぶ

諸君、眞善美なる三大理想の解釋に就ては今更余が辯ぜずとも諸君が既に知つて居られることと思ふ。けれども併し、此演題は何のことやら諸君にわかりにくいであらうと思ふから、順序として先づ一寸眞善美の解釋をせねばならんと思ふ。眞善美と並稱すると、此三大理想と自然との關係に於て同じ價値を持つて居るやうに思はれるけれども、余の考では善と眞美とは同じ價値を持つたものでないと思ふ。眞美の方が價値が高くて、善の方は比較的低いやうに思はれるのである。然るに世の學者は此三大理想を同じ價値のものと視て、善も眞美と同じ價値あるものとするところから、其結果として遂に倫理學上の迷見が起るであらうと考へる。此考が即ち余の此演題の因つて起る所以である。

眞は言ふ迄もなく即ち眞理にして、其裏は僞即ち不眞理と云ふものである。美は表にして其裏には醜と云ふものがある、又善は表にして其裏には惡と云ふものがある。併し一方に眞を置き他の一方に美と善とを置いて互に比較して見ると其間に

著しい相違の點がある。眞理、不眞理は表裏とは云ひながら、眞は在るものであるけれども不眞理と云ふものは在るものではない、唯眞理でないものを不眞理と云ふのである。此點に於ては丁度寒熱の關係と同じである。熱といふものは在るものであるけれども寒といふものは在るものではない、唯熱の少ないのが卽ち寒である、眞理、不眞理の關係が丁度それと同じである。然るに美醜と善惡とはそれと違つて美もあれば醜もある、善もあれば惡もある、故に美醜善惡は表裏とは云ひながら全くの表裏ではない。是は程度の相違、階級の差等である、極美と極醜と又至善と至惡とを比較すれば全くの表裏のやうであるけれども、其中間にあるものは唯程度が違ひ階級が異なるのみで決して表裏ではない。是れは彼れより美しい又は醜いと云つても、其の彼れと云ふのを又他のものと比較すれば此の彼れと云ふものが却て美しいことがある。此やうな行爲は彼のやうな行爲よりも善いといへば此やうな行爲は甚だ善いやうに聞えるけれども、又之を一種他の行爲と比較すれば却てそれより善いとは云へぬと云ふやうな場合もある。右樣な譯であるゆゑ、美醜善惡は全く比較的である、卽ち程度の違ひ階級の異なるので全くの表裏とも言ひ難いのである。是れだけが美であり醜であり、又是れ以上が善であり是れ以下は惡であるといふやうに嚴密に分界を立てることは出來ぬのである。

右樣な譯ゆゑ、一方に眞を置き他方に善美を置いて比較すれば、互に大いに異なつた性質を持つて居ることがわかるけれども、又他方面から比較を試みるときには眞美の二つは同じ性質を持つて居て、唯善の一つが全く異なつた性質を持つて居ると云ふことがわかる。而して此異同が倫理學の研究上に大なる影響を及ぼすものであると思ふ。世の學者は眞善美の三大理想を並稱して或は之を三女神と稱する人もあるけれ共、此三大理想と自然との關係に於て三大理想の價値に高卑の相違があるやうに思はれる。其譯如何と云ふに、余の考ふる所では、眞美の二つはそれは自然界(無機界、有機界)一般卽ち全宇宙に存するものであるけれども、獨り善の一つは有機界中の人類界否其の中の共同界卽ち重もに國家的社會にのみ存するものであると云ふ相違があるからである。尤も眞美が一般自然界に存するものであると言つても、眞美の理想といふものは唯吾々人間に存するのである。吾々人間が存在せんければ眞美の理想は存するものでない(既に高等動物中にも多少存すると言つてよいけれ共)吾々人間が重もに知識に依て眞理を認識し、又重もに感情に依て美を感覺するのであるから、若し人間があらざれば眞理の認識、美の感覺と云ふも

のはないのである。けれどもそれは唯認識と感覺のみのとで、眞美其ものは人間の認識感覺に拘はらずチャンと一般自然界に存して居るのである。然るに善と云ふものは大に眞美とは違つて、是れは重もに吾々人間の共同界即ち國家的社會に存するもので其他にはないのである。尤も其他にも全く無いのではない、高等動物中多少共同的即ち社會的生存をなして居るものに至つては既に善惡の行爲と理想とが絶無とは云はれぬ、必ず多少あるのである、それは何故歟と云へば善といふ者は一般自然界には毫も其必要はないけれども、自然界中の共同界には其必要があるからである、共同的即ち社會的生存をなすには其生存をなす所の分子相互の間に助け合ふと云ふことがなければならぬ、若し助け合ふと云ふことがなかつたならば社會的生存と云ふものは決して出來ることでない。而して其助け合ふと云ふ意思と行爲とが善即ち德義になり、其助け合ひに害ある意思と行爲とが惡即ち不德義になる。而して此德義、不德義といふものは單に自然的に生じたものではない半は人爲的に生じたものである、そこで其助け合ふと云ふ意思と行爲とが生じて來れば、又漸次に遺傳と應化(外界の狀況に應じて變化するを云ふ)とに依て善惡の理想といふ者が生じて且つ進歩するのである。吾々人間の古來進歩の由來は此の如きものである。然るに直覺派の學者は動もすると人間には本來善惡の理想が賦與されてあつて、即ち換言すれば良心といふものが賦與されてあつて、それに依て善を擇び惡を避けるやうになつて居るのであると信じて居るけれども、それは大なる間違である。吾々の良心といふものは古來の遺傳と應化とで次第々々に出來たものである、決して本來人間に賦與されてあると云ふものではない。但し此道理に就ては尙詳細に述べねばわかり難いことであれども、此短時間の講演には到底出來ぬことであるから、是れは拙著、道德法律進化之理」に讓つて、こゝには略すこととするであらう。

世の學者といへども善惡を以て一般自然界に存するものと思はぬは勿論である、まさか無機體の上には言ふ迄もなく、植物や動物の上にも善惡論を持ち出さうとはせぬ。それはわかりきつたことであるが、併し苟くも同一人類たる者の相互の關係は必ず倫理道德の範圍に屬すべきものとするのであるが、余はそれが甚だ間違つたことで、即ち倫理學上の迷見であると思ふのである。倫理道德即ち善惡論は無條件的に吾々同一人類の關係上に持出すべきものでない、唯其中で共同的即ち社會的生存をなして居る所の人類相互の關係上にのみ持出すべき筈のものである。

所が右樣の學者の考では善惡は眞僞美醜の如く一般自然界に存すべきものでないにもせよ、自然界の最上點に居る所の吾々人類相互の關係上には最も大切のものであるから、善惡の理想は天然に人性に賦與されてあるのであると認めて居る。なれども併し、天然に人性に賦與されてあるといへば宛かも本能と云ふやうなものと認めねばならぬ。孟子も食色は性なりと言つた如く、食色の如きは最も明かな本能であるが、若しも善惡の理想が本能ならば吾々人間は皆敎を俟たずして善をなし惡を避けさうなものである、學ばずとも倫理に合する行爲をなしさうなものであるのに、決じて左樣でない、却て惡をなし善を嫌ふ者が多いのは何故である乎實にわからぬことである。直覺派の學者は動もすれば倫理を以て先天內容の聲若くは大我卽ち眞我の聲抔唱へて、道德は實在より直接に顯現するものであると云ふやうなことを說くのである。そのくせ實在なるものは善惡邪正の差別を超絕して居る平等無差別のものであると言ひながら、唯道德卽ち善のみを實在の顯現として不道德卽ち不善も亦同じく實在の顯現であることを忘れて居るのである。實在と云ふものは實に善惡邪正を超絕して平等無差別なるものに相違ないのである。凡そ宇宙間、有形無形の現象は何一つとして實在の顯現でないものはないのである。善い物も惡い物も人間の利益になるものも害になるものも、皆實在の顯現に外ならぬ。善い物や人間の利益になるものばかりが實在から顯現する譯ではないと云ふことを知らねばならぬ。若し右等の學者の考へる如く特に倫理道德が實在の顯現で、不倫理不道德が實在の顯現でないとするならば、不倫理不道德は如何なる原因から出てくるものである乎を問はねばならぬ。そこに至ると右等の學者の考は彼の天理人欲抔と云ふやうな主義を說く學者と同じやうな迷謬に陷つて、遂に平等無差別の實在論とは全く背馳することになる。換言すれば右等の學者の說は天理と云ふ正しいものの存すると同時に、又其側に人欲といふ正しくないものの存することを許さねばならぬことになる。彼の吾が邦の直日神と禍日神との如く又古代印度ペルシア、ヘブリユー抔の善惡の二神の如く、幷に基督敎の唯一眞神と魔鬼との如く善惡正邪の二神が善惡正邪の事を分擔して支配して居ると云ふ所謂二神主義(Ambiteismus)を取らねばならぬことになる、併し右等の學者がまさか右やうな未開主義を取らうと考へるのではなからうけれども、知らず識らず右やうなことになるのである。

然るに又或學者は余の右の如き議論に對して、善惡正邪が皆一に實在の顯現であ

ることは無論なれども、併し倫理學は他の學科と違つて說明學ではなくして規範學であるゆゑ、唯「斯くある」と說くのみではゆかぬ、必ず「斯くあらねばならぬ」と說くやうにせねばならぬ、左すれば邪惡も正善と同じやうに矢張實在の顯現である抔と說くことは甚だよろしくない、必ず正善のみが實在から顯現するやうに說かねばならぬと言ふが如くに反對するのである。けれども假令倫理學が規範學であつても苟くも虛僞的に說くことを許す筈のものではない、殊に全く科學的に自由討究をなすに方つては猶更のことであると思ふ。

併し右等の學者が右樣なことを說くと云ふも、畢竟する所實に進化主義を知らぬからである、否進化主義を知らぬではないが、其進化主義を倫理上に適用することを知らぬからである。是に於て余は每度のことながら余の利己主義を持ち出さねばならぬことになる、余は既に拙著「道德法律進化之理」に述べておいた通り、吾人には吾が遠祖たる下等動物から遺傳して來た唯一の利己的根本動向と云ふもののあることは全く自明的のことであると思ふが、此唯一の根本動向から漸次に利他といふものが派生して來たのであると云ふことを知らねばならぬ。そこで植物、動物の自然界に於ては此唯一の利己的根本的動向(植物にあつては重もに生理的利己、動物にありては生理的及び心理的)の爲めに所謂生存競爭が起つて、各自己の利益を求めるのであつて(併し植物は勿論又動物にあつても多くは知らず識らずに出來ることで無意識である)。そこで彼の優勝劣敗卽ち適者生存、不適者死滅と云ふ自然淘汰が起るから、そのために進化と云ふものが起る。而して此進化といふものは體軀的のものも心神的のものもある、これが卽ち自然界に於ける進化の道理である。

併し動物でも既に多少共同的卽ち社會的生存をなすものは隨分あることであるが、殊に吾々人間に至つては知識感情の進歩の爲に其社會的生存の狀況も餘程進歩して來た。そこで全く本來の利己ばかりではゆかぬことになつて來た所より、自然と利己から利他と云ふものが出て來ることになつた。けれども此利他も亦其實利己に外ならぬのである、利己の外に突然と利他が生じたのでは決してないなぜ利他も亦利己に外ならぬである乎と云へば、本來の利己ばかりでは到底社會的生存が出來ぬ所から、自然と殆ど無意識に互に助け合ふと云ふやうになつて來るのである(先刻も一寸述べた通りに)。而して其互に助け合ふと云ふとが決して他人のためになるのみでない、畢竟する所は自己のためになるのであるから矢張利己

である、故に余は純乎たる利己に對して箇樣な利己を變性的利己と名づけるのである、俗諺に「なさけは人の爲めならず」と云ふことがあるが實に面白いことである。併しそれならば社會的生存に於ては利他が十分に行はれて、道德が完全である乎と云へば左樣にはゆかぬ。前にも述べた如く世の中には惡事をなす人が多くて善事をなす人は比較的少ないが、それは如何なる譯乎と云ふに、吾々人間は本來全く純乎たる利己のみの行はれる無社會的下等動物から進化し來つたものであるゆゑ、其遺傳は中々容易に去るものでない、漸々に應化に依つて利他も增しては來たが、併し遺傳力の强い爲に尙純乎的利己の方が却て盛なのであるから、そこで今日の世の中は惡事が多く善事が少ないのである。今日の社會は尙矛盾の境遇にあるのであるといふことを知らねばならぬ。然るに世の學者は此道理を知らぬ所よりして、吾人には本來利他卽ち善が天性に賦與されてあると云ふのであるが、抑生物として父祖の遺傳を受けぬもののあるべき道理は決してない、吾人が無社會的下等動物の遠裔である以上は其遺傳を受けぬと云ふ道理はどう考へても發見されぬ。學者が特に吾々人間には利他卽ち善が天性に賦與されてあると主張するならば、學者は如何なる手續からそれが賦與されたのである乎を十分に說明せねばならぬ。而して其說明には必ず生理學上、心理學上の證據がなければならぬ。是れは實に此の如き學者の免るべからざる義務である。然るに箇樣な說明は未だ曾て少しもないのである。尙今一言右等の學者に向つて述べたいことがある、右等の學者は利他卽ち善は本來吾々人間の天性に賦與されてあると主張するにも拘はらず、斯く迄大切なる善が吾々の社會に行はれることは比較的少なくして却て惡の方が甚だ多いのは如何なる理由である乎、實に解釋の出來難いことではない乎。然るに是等の道理も唯今述べたやうに進化主義に依つて研究すれば甚だ解釋し易いことになるではない乎。

偖吾々人間の社會卽ち重もに國家的社會の進步と云ふものは、槪して利己から出た所の利他に淵源して居るのであるが、然るに其利他が社會外卽ち他の國家に對しては中々容易に行はれるものでないなぜならば畢竟する所利他の必要が國家內に於けるよりも少ないからである、卽ち助け合はねばならぬといふ必要が少ないからである。それゆゑ國と國との間には殆ど利己のみが行はれるのであるが、併し太古より國と國との交際は多少あつたのであつて、少しも他國と交際せぬと云ふ人民は殆どない、換言すれば國と國との間も多少社會的生存をなして居るので